
平凡と理不尽が刻む物語

ごろーん・・・

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平凡と理不尽が刻む物語

【コード】

N7323N

【作者名】

じゅーん・・・

【あらすじ】

ナギの親友リン・イーストと共に旅立ったナギ！物語がいま動き出す！？リンが加わった『紅き翼』、彼はその平凡で理不尽極まりない世界でどう生き抜き、なにを思うのか。別段特別でない、少し平均以上の彼と『紅き翼』のメンバーがおりなす物語。

プロローグ（前書き）

何回も投稿している気がするけど！そんなこと気にしないー・今回は自分の気合入っています！

プロローグ

「少しばかりは理不尽の塊だった。

俺は理不尽の隣で理不尽に振り回された。
とにかく、理不尽だった。

これは僕の理不尽な話

これが、平凡と理不尽の出会い。
よひじく、僕の名前はリン・イーストです。

プロローグ

ここはワールズの山奥。

え？ ウォールズがどこかって？ そんなの自分で調べてください。

僕は今忙しいんです、ただいま僕は

「ちゅう、いてえよリンー」

「少しばかりは理不尽の塊だった。
ナギの手当てをしています。

「まつたく、ナギさんは何回ケンカすればいいんですか？手当てを
している僕の身にも成つてください」

「しょうがないだろ、あつちから突っかかるんだからよ」

「アリーヒーのは話し合いで解決とかしてみましょうよ・・・」

「できねえよ、んな」と

いや、やってみてもないでしょ？、あなた…

「はあ・・・いいですよ、僕ももう慣れましたし」

半ば呆れながらため息を吐く。

「し？」

「ナギさんとして楽しいですから」

「つへー…そつだろ、人生楽しくなきゃなー！」

満面の笑みで返してくれるナギさん。

「わうですね」

僕がナギとあつたのは僕が魔法学校に入ったときの事だ。
その当時の僕は根暗で引っ込み思案で、所謂暗い生徒。

そんな僕は当然のようにたたかれて、そんなとき来てくれたのがナギ
さんでした。

一応言つとナギさんは僕の一つ上、先輩です。

ナギさんが僕を助けてくれました。

そのときから僕は明るくなり、同時に世界観が明るくなりました。

そんなナギさんに僕は心に誓つたんです。

いつでも一緒にいる。どこに行つても僕は味方でありたいと。あなた

の傍であなたとともにいたいと。

「おい、ナギ・スプリングフィールドー校長が呼んでるー早く来い！」

一人の教師が怒鳴つてくる。

「待つてください、ナギさんの怪我の手当がまだ終わってません」

「またお前かーいつも一緒にいるなイーストーお前も同罪するぞー」

「リンは関係ない！分かった今行く！・・・少し行つてくる」
そう言つてナギは教師と一緒に行つてしまつた

少し経つとナギが帰つてきました。

「リンー俺はここをやめるー」

「へ？まつ、何を言つてるんですか！」

「俺は学校を出るー旅に出るんだー自由こーお前も来るか、リン？」

「無理にとは言わない。お前にもお前の生活があるだりうー」

「僕は・・・」

僕は、そつ 誓つたんだ・・・

「僕も行きます。ナギさんが怪我をしたら誰が手当てくれるんですか？」

「つは、そつだつたな・・・よし、すぐ準備しちゃーすぐ行くからな！」

「分かりました！」

そう言つて、僕は家に戻り、準備をした・・・

まずは、杖、ロープ、魔法液などの魔法使いの必需品
そして、絆創膏、包帯、消毒液などの手当をするもの
そして、本は娯楽ですね。

そして、親に書く置きを置いていく行く。

『母さん父さんへ

僕はナギさんと旅に出ます。いつ帰ってくるかは知らないけど、
心配しないでください。なにせ、あのナギさんと一緒になんです。心
配要りません。

ナギさんを一人で行かすと危ないから、僕が付いていきます。これ
は僕の意志でナギさんに無理矢理ではありません。彼を責めないで
ください。また

いつか会つ日まで。

リン・イースト

そして、僕は旅立つた。

僕たちは最初に行こうと思ったのは魔法世界だった。

魔法世界　　それは魔法使いの世界、旧世界ではないどこか
どこなんだろ？

まあ、そんな事はいいとして、そこそこにはゲートを通らないと
いけない。

「ナギさんゲートってどうですか？」

「知るかよ、そんなこと」

「ですよねー」

ふうむ、どうしようか？

「じゃあ、ゆっくり探ししますか？」

僕は微笑みながら言つ。

「やうだな！旅は始まつたばかりだからな！」

そつして、旅は始まつた。
まずは、ゲート探しから。

目の前には大きな魔方陣、それを囲むような石の祭壇。
まあ、言わなくとも分かるかもしぬないが・・・ゲートはすぐに見
つかつた。

「ありましたね、ナギさん・・・」

「ああ、ゲートだな・・・」

「早すぎませんかね？」

「ああ、早すぎたな・・・」

「「ふつー。」」

「「あはははー。」」

一人で笑い合つた。

こうしているだけで僕は幸せだと感じた。

ウエールズの山奥で家族と過ごすのと同じくらい、ナギさんが俺の
居場所だ。

「ナギさん・・・」

「なんだよ？」

「僕、ナギさんについてきてよかつたです」

「俺もお前が付いてきてくれてよかつたよ。食べるものに困る事もないさうだしな！」

「そうですね。これからもよろしくお願ひします」

「了解だ！」

・ そして、僕等はゲートに足を踏み入れ・・・魔法世界に旅立つた・

プロローグ（後書き）

感想・指摘なんでも感想ください！

第1話――旅は続く、新たな仲間と共に――（前書き）

友達に言されました！書いた後に一回・・・なにをしろと言わされた
か忘れました・・・まあ、更正だつたかな？

第1話—旅は続く、新たな仲間と共に—

「リン・ウォン・ラ・リオン・リリサン！魔法の射手！連弾・風の25矢！」

僕は唱えた・・・ナギさんの背中を守れるよ！」・・・

「ぐはつー！」

なんとか、相手に当たったよいで相手は吹っ飛んでいった・・・

「ふう、よかつた・・・」

実のところ僕は平凡だ・・・

ナギさんのように体術に長けているわけでもなく、詠春さんのよう
に剣術もできないし、アルのように重力魔法なんて無理だし、ゼク
トさんのようにナギさんに魔法は教えられない。

それでも、ナギさんと一緒に居たいと思つ、いたつて全てが平凡な
僕だった。

「そつちは終わつたかリン？」

「終わりましたよ何とか、ナギさん」

「さすがは俺の相棒だな」

「そんな恥ずかしいですよ。それにナギさんに比べれば・・・」

「当たりまえだろ？俺は最強無敵だぜ？」

「やつですたね・・・さすが、ナギさんです」

「おうよー。」

僕たちは一人で笑い合つた。

え？ほかの人たち？

第2話—旅は続く、新たな仲間と共に—

「おい！お前らー早く来いよー。」

「ちょっと待つてくれナギー…さつきの戦闘で疲れてるんだー！」

「何行つてんだよー！リンはちやんと付いてきてるぞー。」

そう、僕たちには仲間ができた

一人は、旧世界の神鳴流剣士、サムライマスターこと近衛詠春。

二人目は、ナギの魔法の師、ゼクト。

三人目は、そこか変態のオーラを纏う魔法使い、アルビレオ＝イマ。

今は5人で旅をしている。

この人たちとの出会いにはいろいろあった……そう色々……

「リン……まさかお前もバグか……」

「何を言つてるんですか？僕は平凡です……ただ……」

「 「 「 ただ？」」

「ナギさんに付いていくだけです。」

僕は言ひ、僕の人生を。僕の存在意義を。

「僕はナギさんにどこまでも着いて行きますよ。たとえ火の中、水中。誰もがナギさんを拒んだとしても、僕だけはいつまでも。」

「おお～、なんだかすごいな・・・」

「さすがは俺の相棒だぜ！お前らも見習えよー！」

「まさか、リン・・・あなたは彼のことが好き」「ではありません
なんだ・・・」

アル・・・あなたつて人は・・・
ナギさんは恋愛対象ではない・・・と、いうかそれはない・・・
彼のことを信用し、彼に信用され、頼つてほしい・・・それだけだ
った。

「僕は心に決めただけです・・・僕の羽を預けていいのはナギさん
だけだと・・・僕の居場所は彼にあると・・・」

「なかなか歪んでますね・・・何があつたんですか？」

「何もない・・・ただ、彼が輝いていて、周りが腐つていただけで
す。」

「そうですか・・・」

付いていくのに理由なんてこれだけで十分だった。

時は少し過ぎ、夕飯・・・

「ふう～、今日もつまみわあ～」

「そうだな、リンは家庭的でいいな」

「うむ、つまいのあ

「おいしいですね

「それはありがとうございます。」

上から、ナギ、詠春、ゼクト、アル、僕だ。

今日の夕飯は普通に（いつもの）（のようなもの）をシチューに入れて煮ただけなのだが・・・

まあ、ほかの人があまり料理できないので僕がしている。

詠春だけは、まともに料理ができる。特に『鍋』とか『つ料理』がうまい。

「詠春さん。明日は鍋にしましょ。」

「そうだな、明日は森だし、食材も取れるだろう。明日の夕飯は決まった。

「ええ、鍋かよ。詠春つるむかへなるぞ～」

「ナギさん、それぐらい我慢してください。鍋つて作る手間が省けて、おいしい一石二鳥な料理なんですよ。」

「まあ、リンがそうこうなあ。」

「あなたはリンに頼りすぎじゃないですか?」

「んなことねえよ。な、リン」

「ナウですよ、アル。もつと頼つてほしくらいです。」

「まあ、ナギの世話が好きですね・・・」

「まあ、僕でできるのはそれくらいですから・・・」

「何言つてんだよ。お前だつて強いぞ、なにせ俺の相棒だからな
いていけるあなたは強い(」

「そんな、みんなに比べたら・・・」

「ええ、そうですよリン。あなたは強いです。(ナギにまでも付

そんな感じで夕飯はおわる。

私がナギたちに会つたのは少し前の事でした。

SIDEアル

なにやら街中で揉めていたのを田撃したところ、ケンカでした。
はい、それはケンカでしたね。もう、魔法使いがやるような事では
ありませんでした。

無茶苦茶な身体強化をして殴り飛ばし、投げ飛ばし、蹴り飛ばし。
その傍らで立っている少年はケンカをしている子のことをずっと見
ている。

きっと、あの一人が仲間ですね。

案の定、その少年はケンカをしているところを後ろから不意打ちを
しようと敵を魔法で叩きのめしました。
なかなか連携でしたね。

その一人が町を離れるのをつけてから数10分のことでした。
なんと私が気付かれたのです。

それから、一人の話を聞きました。

旧世界から来た旅人。

ナギ・スプリングフィールド。脅威的な魔力を持ち、無茶苦茶な男。
その横に立つ平凡極まりない従者リン・イースト。ナギにすべてを
かけた少年。
なかなかおもしろいですね。

という事で私はその一人に同席して旅をすることにしたのです。

ナギはいつも無茶苦茶で、それについていけるリンがすごいです。
リンはナギがすべてだと思いました。
彼は何があつたのでしょうか？

そんなこんなで、仲間もまた増え、ゼクト、ナギの師匠、詠春、常

識を持つたサムライマスター、がパーティーにお加わりました。
常識人は今の所、私、ゼクト、詠春だけです・・・リンはナギのこ
となら何でもしますし、ナギはバグですからね・・・

SIDE OUT

次の日が訪れた。

「リン、あなたはナギと契約してますか?」
アルが突然聞いてきた。

「ええ、当然してますよ?僕はナギさんの従者ですか?」

「そういえば、リン。お前まだアーティファクト使った事ないだろ
?出してみろよ!」

「分かりました。」

そう言って僕はポケットからカードを取り出す。

「アーティファクト」

出でてきたのは指輪だった。

「指輪ですね。」

「。。。あ。」

「どう使うんでしょ?」

「やつこつのは本能でどうにかするもんだぜー。」
ナギさん・・・そうなんですか。

「分かりました。本能ですね」

「いや、それはないぜ、リンク」

「やうじゅうやで、やつこつのは脳に情報が来るはずじゃ・・・」

「ありがとうございますゼクトさん。たしかに、知識がありますね」

「使ってみるよ
僕を促すナギさん

「はい。『我守らん。我が大切な者達を。』」

そう呟くと、みんなの体がつっすら光る。

「おお！なんかすげえ！体が軽いぜ！」

「たしかに、気も濃くなっている」

「つむ、魔力も増加しているな

「これは、すげー」

「これは、仲間の強化ですね。次に『我的盾、我を害するものすべてを弾く』『飛べ』

そう呟くと、周りに一枚の膜が展開される。

「結界ですね」

「強度どれくらいなんだろうな？」

そつと、ナギさんは外に出て魔法を唱える。

「来れ雷精、風の精。雷を纏いて吹きすべ南洋の嵐・雷の暴風…」

「ちょっと…ナギにきなりは…うわああーーーー…」

詠春が叫ぶ。アルが汗を流す。ゼクトが顔を引き攣らせる。

しかし、その衝撃は来る事はなかつた。

「すっげえー！なかなか強度じゃんかよ！」
そう、攻撃はすべて僕の結界が止めたのだ。

「これぐらい無いと、ナギさんを守れませんから。」

「おう！俺の背中は任せられるなー！」

「僕だけじゃありませんよ？皆さんだつているんです。あなたの背
中に傷なんてできませんよ。」

「やうだつたな！まあ、一人でもできないけどなー！」

「たしかに、そうかもな…・・・

一人疲れたように、呟く詠春

「まあ、バグですかうね。」

アルの言つ巴グ・・・それは理不尽をあらわす言葉。ナギさんによ
ツタシ。

「つむそづじやな
それに同意するゼクトさん。

今日もこつこつ通つの日常です。

第1話――旅は続く、新たな仲間と共に――（後書き）

指摘、感想など待っています！

第二話—十九歳で書いた、最強無敵—（漫畫も）

血口魔足で書こつも。 更新せりと龜です。

第2話——ナギさんはやつぱし、最強無敵——

本当は今日の夕飯は鍋だった・・・
しかし、夕飯の前に戦場が訪れた・・・
僕たちはここから、大戦に首を突っ込む事になつたのだ・・・

第2話——ナギさんはやつぱし、最強無敵——

僕たちのパーティーは名前が付いた『紅き翼』。

名前が付いたからって何かが変わるかというと、答えはNOだ。
僕たちは今日も今日とて変わりない日を過ごしていた。

歩き、歩き、歩き・・・歩いた。

そして、夜が来る。

僕たちが来ていた森では、戦争が起きていた。
その理由・・・それは魔法無効化能力だ。
オスティア王族に稀に生まれる、子供。
その能力を担うことがある。

今回は少女であった。

そして、今は戦乱のとき。

魔法使い同士の戦いでこの能力がどれほど有利なものだらうか・・・

用は、これをもつてさえ居れば相手の魔法が効かないのだ……とてつもなく厄介、そして有利になる。

「黄昏の姫御子！なんたつてそんなもん！？」
僕たちは今飛んでいる……あの戦場へ……

「ナギ！冷静になつてください！」

「俺は常に冷静だつづーの！」

ある少女を助けに……

向かうといひはあの塔……

今鬼神兵がつかもつとしている塔

「ナギさん早く行つて下さい！『我守らん。 我の大切な者達を』」
そう言つと、みんなの体が光だし、スピードが上がる……

「サンキュー、リン！じゃ、行くぜ！」

僕はナギさんに捕まり、一緒に飛ぶ。

僕が飛ぶと遅いので……

ナギさんが鬼神兵を一撃で仕留め、言つ

「俺はナギ・スプリングフィールド！またの名、サウザンドマスター！」

「紅き翼！」

そして、僕たちの懲滅戦が始まった・・・

相手が兎に角多かつた。

僕の活躍といえばナギさんやほかの人間に降り注ぐ攻撃を弾くことしかない。

「アデアット！『我的盾、我を害するものすべてを弾く』」

鬼神兵の一撃すら弾くこの盾は、きっと僕の思い・・・
僕が強い思いを持てば持つほど・・・強くなる・・・

「僕は・・・ナギさんを守る。」

「『我薙ぎ払う、我の敵全てを』」

そして、放たれる光の豪雨。一本一本が弱くとも、その思いは万にも上る。

下にいる魔法使いを薙ぎ払っていく。

ほかのみんなは空の敵を倒しつづけ、ナギさんは鬼神兵を倒す。

圧倒的力量差を見せつけ、僕たち『紅き翼』は勝利した。

少女の名前はアスナと言つぱなし。ナギさんに懷いたそ�で・・・

「ナギさんお疲れ様です。」

「おお、リン。お前もす」かつたじょんかよー。」

「ナギさんには及びませんよ。僕は自分できることをしたまでです。」

「それが、すごいですよ、リン」

アルが褒めてくれる。うれしい・・・気がする。

これ以外にも、僕たち『紅き翼』は戦場に出る事が多い・・・偶然だけだ。

とある、夕飯の事だつた。その口は鍋。

鍋をする道具は僕がの魔法使いが使う鍋を使います。
まあ、魔法薬なんて調合しないからいいんですけど・・・

「トカゲ肉でもうまいのかの？」

「おいしいんじゃないですか？」
ゼクトさんの問い合わせに僕が答える。

そのころ詠春は

「ナギ、おまつ！何肉を先に入れてるんだ！」

「いいじゃねえか、うまいもんから先でよ！ホラホラ
ナギに鍋を教授しようとしていたが、無理であった。

「バツバカ！火の通る時間差という物があつてだなーって、もう入
れてる！」

「あー、うつせーうつせーぞえいしゅん！」

と、こんな感じで無視して己が道を行くナギさんです。

「フフ・・・詠春知っていますよ。日本ではあなたのよつな者を・
・」

アルは何を言つんだろうか？

「『鍋将軍』と呼び習わすそうですね！」

「ナベ・ショウグンーー！」

「わ、分かつたよ詠春・・・俺の負けだ・・・今日からお前が鍋將
軍だ」

そんな雑談をしているときの事だった・・・

いきなり剣が地面に刺さった・・・鍋を弾いて・・・

弾かれた鍋はひっくり返り、宙に舞つた肉はナギさん、ゼクトさん、

アルに全部取られる。

「ほり、リン。お前の分」

「ありがとう」「ごます、ナギさん」
ナギさんはいつも優しいです。

よく見ると、詠春の頭の上に鍋が掛かっている・・・

「食事中失礼！俺は放浪の傭兵剣士！ジャック・ラカン！いっちょ
やひつぜ！――！」

なんだあの馬鹿は？
僕たちを狩に来たのかも？

「フフフッフ・・・」

「え、詠春さん？」

「食べ物を粗末にするものは・・・」
詠春さんが壊れました・・・
と思つたらもう居ません？

「斬る」

つて、もう戦闘に入つてますね・・・

あの、傭兵剣士・・・なかなかやるよつです。
詠春さんの攻撃を凌いでいます。

「情報その一、生真面目剣士はお色気には弱い」
たしかに、そうですね、うちの詠春さんも・・・
ア・・・詠春さんの苦手な色氣で負けましたね・・・

「ナギさん、待ってください・・・」

もう戦闘に飛び込もうしているナギさんを止める

「なんでだよう、リンン？俺は早くやつてえ！」

「僕が行きます。」

「リングが？分かつたぜ！」

僕は飛ぶ、ゆっくりと、剣士の元へ

「次は僕です。」

「お前が？ぜんぜん強そつじゃないな？」

「はい、強くありません・・・」

「まあ、いい。まあ、一応情報はある。情報その5、平凡魔法使い
は実は鉄壁？備考なし」

「こきますよー。」

そして、僕は動き出す。

「アテアツト！『我薙ぎ払う、我の敵全てを』」

自分の力を収束する。一息へと、そして、形成する。

「これは僕の思い……僕の思いは僕の意のまま」
できたのは、剣……いや、この場合刀だらう……
詠春が持つてゐる本で読んだことがある。
たしか、斬る事に特化した剣。

「なんだそりや？そんなんじやすぐ折れるぢや？」

「さあ、それほどどうじょうか？」

その瞬間僕はラカンの懷に入る。

「うお！何気に早い！」

そして、叩き込む僕の最高の一撃を。
と、言つても斬るだけだ。

「はあああ……」「
刀を上から下へ振る。

しかし、ラカンは少し後ずさつただけ……

「いてえじやねえの？」

「ぜんぜん痛そつじやあつませんよ？」

「まあな……！」

そして、ラカン無双がはじまる。

「おひおひおひおひおひ！」

僕はラカンの適当なパンチを刀で受ける。

「なんで、折れねえ！」

「言つたはずです！これは僕の思い！」

僅かな隙間が見えた・・・気がした・・・

そこに入り込もうとするが、ラカンのパンチが少し掠る・・・

「いつ！」

なんて威力のパンチなんだ・・・

掠つただけで内臓まで・・・

やつぱり、僕は平凡・・・こんなところに面るべきではないのかも

しれない・・・

でも、それでも・・・

強く刀を握る

「それでも・・・僕はあなたの元に居たいんだああああああああ！」

そして、その時、一番思ひが昂ぶつたとき刀を振つた。

たぶん、これが本来の斬り方・・・

ぶつけるのではなくなぞる流れる感じだ・・・
少し切れた・・・

皮一枚切れ、血が流れる。

「ほお、なかなかやるじゃないか？平凡が！」

僕はラカンに殴り飛ばされ、意識が刈りとられた。

「ぜん・・・ぜ・・・ん・・・です

痛いな、ラカンのパンチ・・・

そんな事を思い、僕は飛んだ・・・

こっちに駆け寄つてくるナギさん。

その顔は少し怒りが含まれており、僕を心配してしてくれた。

それが何よりも嫌だつた・・・うれしくも感じだが・・・

僕はナギさんに心配されてしまったのだ・・・

彼に心配されたくなかった・・・それくらい、強くありたかつた・・・

僕は彼に守られるのではない・・・彼を守るんだけど、このとき再度、
自分に誓つた。

ア・・・僕の鍋・・・壊れただろうな・・・

第2話——ナギナタはやひめ、最強無敵——（後書き）

感想・指摘など大歓迎です。

キャラ紹介と行きましょう（前書き）

キャラ紹介です。何気にオリ呪文が入ってたりしますが、作者の勝手な妄想でこの作品の魔法に独自解釈がたくさんあります。

キャラ紹介と行きましょう

キャラ紹介

と、言つてもオリキャラだけで

リン・イースト 後に 東鈴あすかん

年齢：11歳

容姿：髪は黒、目は金、身長は11歳で160程度

顔は割りと整ったほうで、美形とまではいかないが、普通ヨ
リいい。

ウエルズの魔法学校からナギが出て行くときについていくことにした。そのときからナギの元で生きることが自分の人生ときめ彼を守ると誓う。それから、仲間に出会い戦争に介入していく事になる。実力的に言つと強く感じてしまうが、それはアーティファクトの力

で本人の力は一般的の見習いより幾分か強いだけ。ナギを思う気持ち
は誰にも負けないとと思う。ちにアリカに負けるが・・・それは別
の話。

得意属性・風、光

苦手属性・闇、氷

魔法発動対・指輪（アーティファクトとは別）

技・魔法の射手全般

しかし、風と光以外の魔法の射手は格段に威力と精度が落ち、
命中率も悪い。使っても牽制にもならないから、威嚇程度。

風陣結界・光陣結界

風楯・光楯

風花・風障壁・光閃・光障壁

などの、防御呪文

ナギから習つた雷の斧の光、風ヴァージョン、光の槍、風の薙刀
といつても、威力はそこまでない・・・

アーティファクト・想いの指輪

効果は呪文が幾つかある。1つ、身体強化できる。呪文は『我守らん。我が大切な者達を。』自分もされる。2つ、
結界の構築『我の盾、我を害するものすべてを弾く』強度はなかなか

かで、ナギの一撃なら防げるが、一撃目は無理。3つ、攻撃『我難ぎ払う、我の敵全てを』光の矢を何本も構築して敵に打つ。魔法の射手と違うのは始動キーがいらなくためもいらない。強く思えば思うほどどの能力も向上する。

実はまだ、能力があつたり？結構強いアーティファクト。さすがはナギと契約しただけはあると思つ。

キャラ紹介と行きましょ（後書き）

なにか、（魔法とか）間違つてたら指摘してください。

第3話――理不尽を生き抜くために――（前書き）

前回キャラ紹介をしたのに・・・技が増えました・・・ぐそり・・・

第3話－理不尽を生き抜くために－

ラカンさんに吹き飛ばされ、氣絶した後、どうやらナギさんが撃退したらしい・・・

しかしさはナギさんと戦うために何度も再戦を申し込んできた。

まあ、それすらもすべて受けラカンさんとまともにやりあうナギさん・・・

二人とも理不尽だ・・・

第3話－理不尽を生き抜くために－

なぜか、何度もラカンさんが戦いに来るつに行動を共にしていて、
ラカンさんも『紅き翼』の一員になっていた・・・

そして、このころから僕たち『紅き翼』は今魔法世界で起きていた大戦に入していくた。

ヘラス帝国対メセンブリーナ連合の大戦。オステイアの奪還・・・
僕たちは連合側として大戦に参加、ナギさんは敵から『連合の赤毛の悪魔』と恐れられ、仲間からは『千の呪文の男』と讃えられた。

そういう僕にも一つ名付いたらしい、あとファンクラブも・・・ほかの皆さんには及ばないけどね・・・

僕の一つ名は『千の呪文の男の腰巾着』や『紅き翼の尻尾』などの中傷な名前もあれば

『千の呪文の詠唱部分』とか『紅き翼の常識人(?)』『紅き翼の中の平凡』『最強の平凡』などもある。別に僕を中傷するのは構わない、弱いですしだって、使って、魔法の射手や戦いの歌などですから・・・

「まあ、気にするなよ」一つ名なんてよーお前は俺が一番分かってるー！」

「ありがとうございますナギさん・・・でも事実です・・・僕は弱い・・・」
ナギさんは優しい・・・でもその優しさが僕を苦しめる・・・

「そんなことねえよ・・・お前は最初から俺についてきてくれたじゃないか、それだけで俺は十分だぜ？」

「僕はそれじゃ嫌なんです・・・僕はあなたに守られたいんじゃない・・・あなたと肩を並べて戦いたいんだ！」

沈黙が走る

そして、それを破ったのは・・・

「ほお、じゃあ、強くなりたいのか？」
ラカンさんでした・・・

「はい、強くなつて・・・ナギさんに降りかかる火の粉を振り扱えるよ！」

「おし！それなら、俺が鍛えてやるー。」

「ラカンさんがですか？」

「おうよー何か不満か？」

「いえ、ぜんぜん・・・むしろその方がいいですね・・・ナギさんと同じバグですから。」

「おし、それなら今からはじめよう。」

「はいー。」

そして、僕とラカンさんの修行が始まった・・・

「がんばれよリン！」

「はい、絶対強くなります！」

ラカンさんの修行はきつかった・・・
もともと彼はバグなので常識がないです。

「おしーまずは、俺の一撃を受け止めるー。」

「それは、無理っ！ふへえー！」

そして、修行初日は終わった・・・
なんかデジヤヴが・・・

次の日・・・

「ラカンセを昨日は少し無理がありました・・・」

「わうだつたな、お前って普通だつたんだよな・・・」

「すこません・・・」

「よし、それなら身体強化でも覚えるか!」

「分かりました、で、身体強化つて?戦いの歌なら覚えてますよ?」

「違う違う!戦いの歌なんて田じやないぜ!名づけて『武神の舞』だ!」

「何か無駄にかっこいい名前ですね・・・」

「だらうーみー、わしそく覚えろ!魔力を内から外に弾かせますよ
うに激しくーそして、平常心!」

「それって矛盾してますよね?激しく平常心つて!」

「そんな細かい事無私だ無視!」

「理不眞です・・・」

そして、僕の修行が始まった・・・
やつと・・・

一ヶ月後・・・

「やつと・・・でき・・・た」

「時間掛かつたな?」

「説明が足りないんです・・・なんで、激しく平常心で『心は熱く、頭は冷静』になるんですか?」

「それぐらい分かれよ!な、ナギ!」

「さうだぜー!それぐらい分からないと生きていけないぜー!」

「まあ、できたからいいですけど・・・」

「よし、それならー!ほらやれ」

「はい、『我』に願わん、武人としての極みを・・・武神の舞!』

まわりに風が舞う・・・僕を中心として

「いつも思つんだが・・・その詠唱いらなくね?」

「あなたと違つて凡人なんですよ!」

「まあ、いいよし、俺の一撃を受ける!」

ラカンさんが殴りかかってくる・・・

前までなにも見えないほどの攻撃が見える・・・

避ける場所も、防御する点も分かる・・・

これが、『武神の舞』・・・武人としての極みに近づくための集中方法・・・身体強化ではない・・・

「つふ！」

僕は体の前に腕を交差させて防御に移る・・・
交差したてんに魔力を集め、衝撃の瞬間爆発させながら足を地面から離す・・・

「ほう・・・いい出来じゃねえか！」

僕は10m先に吹き飛ばされている・・・

前回と違つのは、気絶していないし、多少痛いけど重傷ではない・・・

・

「ラカンさんのおかげですよ」

「まあな！俺は最強の傭兵剣士だぜ！」

「なにを！俺が最強だ！」

そして、ナギさんとラカンさんの不毛な戦い（ケンカ）が始まった・
・

僕は覚えた・・・この世は受け止めるだけじゃない・・・流す事も
できると・・・

「よし、次だ！」

「えー次もあるんですか？」

「あるいは決まってんだろう！次は『闇の魔法』だ！」

「ええ・・・あれって危険そうじゃないですか？」

『闇の魔法』真祖の吸血鬼が作ったとされる魔法。自分の体内に魔法を取り込む『術式兵装』

『闇の福音』の作った術・・・

「何を言つてゐる！危険だ！」

「と、言つた僕闇の適正ないですよ？光ですよ？」

「『闇の魔法』は単なる属性の適正じゃねえんだよー・心の適正だ！歪んでれば歪んでるほど適正あつと//タ－お前は適正あつまくらじやねえか！」

「まあ、試してみますか・・・」

「やうこなことなー男はドンと構えろよー！」

「はいー！」

そうして、僕とラカンさんの修行2が始まった・・・

「それで、なにをしるどー！」

「『まい』の巻物だ！」

「開ける」

「はー」

シユルルといつ効果音で巻物を開ける

『ほひ・・・私の魔法を覚えよつとするか・・・身の程を知れ!』

その声で僕は精神世界へとござなわれた・・・

表では

「おーーーどうなつてんだよーーー! 今いやつ血吹いてるじゃねえか!」
怒るナギさん・・・

「まあ、そう怒るなつて・・・」の餓鬼もお前のために強くなつて
としてるんだぜ? 「これぐらいは見守れ!」
それを抑えるラカンさん

「まあ、そつか・・・がんばれよリン・・・

その声は届いたのか、届かなかつたのか?

精神世界・・・

「ふん! その程度か!」

僕はエヴァンジェリン・A・K・マクダヴュル(偽)と戦っていた・

「へつ・・・」

うそです・・・呑きのめされていた・・・

疼く腹、軋む骨、はがれた皮、流れる血・・・

「ふん、その程度で『闇の魔法』を覚えようなど！五年早いわ！」

「やつぱし・・・うですよよね・・・はは、ラカンさんは無理をする・・・」

「ふん、どうせあいつもお前の主も弱いのだろう？ああ？」

「ナギさんは・・・最強だ・・・僕なんかが傍にも寄れないほど・・・」

「ふんーせざいいていろーじつせ、お前はここで死ぬんだ！」

「僕は・・・死ぬのか？」

「そうだ、精神が死に、肉体だけが残る・・・まあ、死ぬよ

死ぬのか・・・

まだ、11歳で死ぬのかな・・・まだ、ナギさんと居たかった
彼をこの戦争の間だけでも守って居たかった・・・いや、その後も・・・

なら、ここで死んでもいいのか？

いいはずない・・・僕は生きつづける・・・

ナギさんのが居る限り……

僕は彼を守るんだ……彼の従者として……いや、一人の親友として、相棒として！

「僕は……死ない……いや……死ねないんだ……守りきるまで！」

「何を言つかと思えば……死ぬよ、確実にな！」
襲い掛かつてくる真祖の吸血鬼

ここは、僕の精神世界……

ここは、僕の心……僕の原動力……

「僕はお前に勝つ！」

「ほざけええ！」

突進してくる爪……

頭に響く声……

そして、限界を超えるとする自分……

「降葉の舞……」

それは、まるで葉が落ちるような動き・・・
早くなり、途端に浮き上がり・・・しかし、何れは地面に着くとい
う絶対的な結果を避けようとする動き・・・

「それは・・・運命を抗う力・・・」

「なつ！」

爪を間一髪で避け、彼女の腹を一発殴る・・・

「がつ！」

力が抜け、僕にもたれ掛かる吸血鬼

「ありがとう・・・吸血鬼・・・僕に守る力をくれて・・・」

彼女は力なく地面に崩れた

「ふん・・・お前はいつか、裏切られる・・・そう知っていても従
うか？」

「従うよ・・・そう決めたんだ・・・
あたかも、当然かのように言い放つ・・・

「そうか・・・飲み込まれるなよ？」

「分かつてるよ・・・飲み込まれないさ・・・僕はナギさん『光』
を信じるからね・・・」

「ふん・・・光など弱い・・・闇こそが最強だ・・・」

「光あつてこその闇・・・光あるところに闇がある・・・表裏一体
だよ・・・」

「そりゃ…かもな…」

「じゃあね…」

そして、世界は光に満ちた…

「ただいま戻りました、ナギさん！」

「おお！帰ってきたか！リン…よくやつたぜー！」

「さすがは俺様が教えるだけはあるじゃねえか！」

「何いつてんだよ！リンの実力だ！」

そして、また不毛なケンカが始まると「ひで

「違いますよ？皆さんのおかげです…」

そして、二人は戦いをやめ、三人で笑い合つ…

僕はいつまでもこの笑顔を守つていけるのだろうか？

いや、守れないだろう…でも、僕が見ているときは守つていく・

彼の心は今日も強くなつた…

SIDEエヴァ（偽）

今回私の『闇の魔法』を覚えに来たのは僅か11歳程度の餓鬼だった・・・

奴は、恐ろしく、弱く、脆く、すぐに倒れた・・・
しかし、何度も立ち上がり、私に向かってくる・・・
その事は賞賛しよう・・・しかし、それでは、私には勝てないよ・・・

殺そうとした・・・私の手で頭を貫き
でも、それはできなかつた

途端にやつの動きが早くなり、攻撃が外れる・・・

殴られた瞬間、伝わってきた・・・

餓鬼の思い・・・人生・・・感情

餓鬼は一人の男のために人生をつくしてきた
そして今からも・・・

私にはかなわない・・・そう悟つてしまつた・・・
一つの存在をここまで信じきつているこの餓鬼に私の勝機など無い
と・・・

私にはまぶしすぎた・・・その存在が、その思いが・・・
それと同時に私もこうなりたいと思つてしまつた・・・

胸が熱くなつた・・・

それでも、無情にこの空間は閉じた・・・
また永遠の闇へと変わつていつた・・・
餓鬼のわずかな光の軌跡を残して
・・・

SIDE OUT

第3話－理不尽を生き抜くために－（後書き）

では、紹介します！

『武神の舞』

魔力を自分の外膜に張る事で危険察知から音まで敏感になる。ようはすぐ集中モードです。この状態だと、時が遅く感じたり、直感が凄くなったりします。

『降葉の舞』

一種の歩法。まるで、木から落ちる木の葉の用に速度を変えたりし、敵を惑わす・・・しかし、実力者相手だと一瞬しか使えない・・・ずっと使っているとリズムがつかまってしまい、逆にあだになる。

指輪真呪文！

まだ出てきてないけど出すつもりなので！

『私は偏在する、数多の敵を止めるため』

まあ、ようは分身の術ですね・・・はい、作ってみたかっただけです。と、言つてもリンクのじつりょくだと4・5人が限度です。

『闇の魔法』！

予定としては、光の槍を掌握した術式兵装

名前は『雲散霧消』

光の屈折などにより相手を捕らえる事が難度になつてくる！

そして、隙を突いて攻撃のヒットANDアウェイの戦い向き！

これが技の予定です！
感想指摘など大歓迎です！

第4話—あなたのための一（前書き）

ふうー、疲れました・・・なんだか、話が進むのが早すぎるような気がしてきた・・・けど、俺ってオリ要素入れる才能がないというか・・・

第4話ーあなたのためにー

僕たちは今日の今日とて戦い・・・捻じ伏せ・・・勝利した・・・
今回の戦場は「グレート・ブリッジ」この奪還戦だ

ここは連合の喉元に当たるわけでここを奪還しないと戦争にもならないと・・・
まったく、なんで奪われるんでしょうか・・・

第4話ーあなたのためにー

そこは、戦場だつた・・・
人が切られ、血が流れ、炎が舞い、人が焼かれる・・・
そこは、戦場だつた・・・
肉の焦げる臭い、人間の悲鳴、潰れる人体の音・・・
そこは、戦場だつた・・・
理不尽が一番目立つとき・・・

「ナギ！何隻落とした！？」

「はっ！今20隻目ええ！？」

「はっ！俺は今35隻田ええ！！」

「お前戦艦しか狙つてねえだろー下の雑魚共も狙えよー！」

「下はほかに任せた！」

一方下では・・・

「死ねえええ！！！」

迫る、脅威、魔法、斬撃・・・

しかし、すべてがすべてスローモーションの用に再生される・・・
それを一つ一つ掻い潜り敵の元へ疾走する

「なつ！」

「『めん・・・『我薙ぎ払う、我の敵全てを』
光が収束し、刀を形作る・・・

「降葉の舞・・・」

その周辺に居る人間から血が吹く・・・

僕は今戦場に立っている・・・

人に情けをかける事が許されず・・・

すべては、ナギさんを守るための行動・・・そう思つてやつと人が
切れる・・・

こんなの、人のやる事じゃない・・・魔法使いがやる事でもない・・・

・
これは、悪魔のよくなもの・・・病気のよくなもの・・・
強制され・・・惑わされ、人を切る・・・そして、それが広がり戦
乱の世へと誘う・・・

「お、お前は弱いはずじゃないのか！」

「僕は弱い・・・ただ、あなたが僕より弱かつただけです」
僕はこの前の修行のときから格段に強くなつた・・・
ラカンさんと戦い3、4分持つようになつたし・・・

「ぎゃああーーーー！」

僕はすべての敵をなき払う・・・
すべてが彼のために・・・

「全員、撃て！――斉射撃だ！」

周りから魔法の射手が数千矢飛んでくる

「効かない！」我の盾、我を害するものすべてを弾く
結界と矢が触れ合い爆発する・・・

「ふん、これならさすがの奴も生きていまい・・・

「残念だつたね『我難ぎ払う、我の敵全てを』」
相手と同等程度の数の矢を作り放つ・・・

「やめてくれえ――！」

助けを請う者・・・
仲間を庇う者・・・

仲間を盾にする者・・・

この世はさまざまだ・・・でも、全員が同じ・・・生きていた・・・

「なかなか、やるじやないですかリン?」

「ありがとうござりますアル・・・でも、まだまだです・・・」

「あなたはなぜそこまで力を望むのですか?ナギはあなたが盾でくれるだけでがんばれるようですよ?」

「僕はナギさんを守り、肩を並べて戦いたいんだ・・・そのためにはこの世の中を生きる力が必要なんだ・・・」

「あなたも、歪んでますねえ。こんな戦争に好んで介入するなんて・・・」

「僕は好きでやつてませんよ?ナギさんが好きでやつてるんです。それをいつと僕たち『紅き翼』自身が歪んでますね?」

「まあ、私たちはナギを元に行動していきますからね」

「やうそろ戦いに戻らなくとも?」

「いえ、もう大丈夫でしょう・・・バグが一人がんばってますから・・・」

と、上を向くと空で人間一人が起こし他とは思えないほどの被害を被っていた・・・

戦艦が落ちていき、そらに闪光が走り・・・
爆発が起こり、巨大な剣が現れ・・・

「さすが、バグ……」

その声が悲しく空間に響いた・・・

視線を下に戻すと、下も下で、詠春とゼクトさんが頑張つたおかげで敵はもう居ない

そんなときだつた・・・

チュドオオオン！！！

「
^
?」

急いで音が鳴った上を向くと・・・

落ちてくるナギさんとリカンさんでした・・・

一人は戦艦の一斉射撃に合い、落ちてきましたようです・・・

そして、不幸な事に・・・

「第2陣、突撃！！」

କାନ୍ଦିଲା କାନ୍ଦିଲା କାନ୍ଦିଲା କାନ୍ଦିଲା

相手の軍の援軍が届いたようだ。・・・

ナギさんとラカンさんは結構傷がある・・・
ほかの人間も似たようなもの・・・

僕だけは無傷だつた・・・
自分を守り、相手の攻撃をすべて避けってきた・・・
と、いうか避けてないと一撃で死にますね・・・

相手が着々と迫ってきている・・・

「くつー！俺が！」

「ダメですナギ！ラカンも！あなたたちは後ろに下がっていなさい
！」

「でも、お前らだつて！」

「あなたたちは大丈夫です！戦艦の一斉射撃を受けて生きているほうがおかしいんです！」これは、切り札としてあなたたちを残すべきだ！」

口論をするアルとナギさん

「そうだぞ、ナギ。お前とラカンがいなかつたら俺たちはどうするんだよ？」ここには俺たちが行く

「そうじやぞ？お主は一人で戦ってるんじゃない、仲間がある。」

「お師匠様・・・」

敵の数は数千・・・

こつちは6人・・・圧倒的力量差があるからといつてこつちは今戦

闕後

相手は装備あり、そして、補給も行き届いた部隊……
きっと、ここでみんなが戦つたら勝てるだろう……
でも、それは結果であって過程ではない……
きっと、全員が傷を負い、痛みを感じ、時間も掛かる

なにより、ナギさんが持たないだろう・・・彼はバグだ・・・しかし、いくらバグといつても数千人相手にもつだらうか？
まず、そこまで人を傷つけられるだらうか？そんな思い、彼にしてほしくない・・・

仮にも相手は魔法使いと剣士。いくらナギさんでも、魔法を食らえば痛いし、剣で切られれば血も出る

僕はどう呼ばれたっていい……ナギさんに嫌われたって……彼が生きているのならば……

「ここは、僕が行きます・・・」

「ニシノ！」

「みんなは逃げてください」

「何を言ひてゐんだリン！」わくらし俺たちで！

「数千の敵を相手に勝利できるんですか！？今の状態で！可能でしょう！でも、いくらこっちが最強無敵を自負するバグが一人居ても、今の状態じゃきつい！」

「だからつてお前一人で行くなんて！無謀だ！」

「無謀も承知！僕は今無傷です！それに・・・」

それに、僕は一番弱い・・・被害が一番少ない・・・

「それに、僕が一番弱いじゃないですか・・・僕じゃ、ナギさんは守れない・・・だから、皆さんに頼みます・・・この戦争が終わるまでは・・・ナギさんをどうか頼みます・・・」

僕は一礼して、敵に向く

「おい！何してんだリン！俺は守られなくてもいい！お前は居てくれるだけでいいんだ！」

「僕はそれじゃ満足できない！僕は守られるくらいなら・・・死んで、あなたを守る！」

「リン！」

そこで、ゼクトさんが手刀でナギさんの首をたたき、軽い脳震盪（普通で言つたら首が切れる程度）を起こし気絶せせる・・・

「ゼクトさん・・・ラカンさん、今までありがとうございました・・・皆さんも・・・ナギさんを守つてください・・・」
そうして、僕は敵に走りだした・・・

今私の前には一人の男が居る・・・この前少年だと思っていたこの男は今は自分の信念を貫き・・・その主、ナギ、を守ろうとしている・・・自分は死んでナギを守ると・・・私はとめる事ができなか

SIDE詠春

つた・・・

彼の目は真剣そのもので、ラカンとは別に威圧感を感じた・・・逆らえないと・・・絶対に譲らないと・・・

私は弱かつた・・・力ではなく・・・心で彼には圧倒的に負けていた・・・一人の人間のために死ぬなんて私にはできない・・・それでも、彼はそれをやつてのけた・・・彼は、私の知る一番強い男なのかもしれない・・・

SIDE OUT

SIDEアル

今私は選択に迫られている・・・私の前に立つ少年は今決心した自分を犠牲にすることを・・・自分を犠牲にして、他者を生かすと・・・彼は自分が弱いからといった・・・弱いからしんでも困らないだろうと・・・しかし、あなたが死ぬのが一番困るのです・・・ナギは何かを守ればそれだけ強くなる・・・あなたを守っているナギが居るからこそ・・・ナギが強いのです・・・それでも、それを知つていても私はあなたを止められないだろう・・・あなたを止めれば何かが狂う気がした・・・あなたが狂い、私たちを拒むと、彼を拒むと・・・それは、あつてのならないこと・・・しかし、あなたが死んでいけない・・・これは、選択・・・

SIDE OUT

SHDEリン

僕は走る・・・

あの人のために・・・

僕は叫ぶ・・・

あの人のために・・・

僕は生きた・・・

あの人のために・・・

そして、僕は戦う・・・

あの人のために・・・

最後に僕は死ぬんだろう・・・

あの人のために・・・

「はあああ！！！」

僕は今敵地の真ん中に居る・・・

結界を展開して敵の進行を遅めようとしている

「殺せ！早くしろ！ほかの奴らが撤退している！今の絶好チャンス
だ！早く突破しろ！」

司令官が叫ぶ

「無理です！なにか結界に拒まれています！」

「ぬあにこー！…壊せー早く壊すのだ！えーい！最弱になにをして
！」ずつておるのだ…」

「無理です！突破できません…といつか押されています…」

「くそあーもう、いい！突撃やめ！魔法をあつたけ撃て…」

そして、奴らは詠唱を始める…

「セセると思つたか！『我薙ぎ払う、我の敵全てを』『
光の矢が相手に注ぐ

「ぐあつあー…！」

敵が倒れ僕を恐れる…

「くそーお前は誰だよー弱いんぢやないのかよー！」

たしかに、僕は弱い…いや、弱かつた…

でも、今の僕は負けない…そんなことはないが…

彼のために

「僕は…強くなる！ナギさんが居る限り！僕が食い止めるんだ…

・・

「結界が解かれている！突撃いい！」

「…」「…」「うおおおおつやああ…！」「…」「…」

「僕に力を・・・」

温もりが体の中を通る・・・

自分は知っていたのだろうか？この力を・・・

『『『我は偏在する、数多の敵を止めるため』』』

「なつ！分身だと！」

僕が6人に増えた（内一人リアル）

「お前等に」「一歩も」「進ませない」

一人ひとりが僕だ・・・

「ナギさんに」「指一本」「触れさせない！－」

1対数千が、6対数千になつただけ・・・

それでも、僕は戦うよ・・・

あなたのために・・・

分身した自分を接近戦に使い自分は詠唱に入る。

「リン・ウォン・ラ・リオン・リリサン！来れ、虚空の光、射殺せ
！光の槍！」

光の槍を飛ばし、敵に突き刺し、突き殺す

じぶんの信念のために・・・

『『我ここに願わん、武人としての極みを・・・武神の舞！』』
集中モードに入り、相手の攻撃をかわしながら詠唱をする。

「リン・ウォン・ラ・リオン・リリサン！魔法の射手！連弾・光の

「100矢！」

そして、それを後方に飛ばし後ろに回りこんだ敵を排除

「『我薙ぎ払う、 我の敵全てを』
刀を形成させる・・・」

ここから、俺は死闘を繰り広げた

相手を切り伏せ、相手の攻撃をよけ、相手を絶命させ・・・
相手の魔法を受け、焼かれ、貫かれ、悲鳴を上げ

そして、戦闘は数10分続き、終焉を迎えた・・・
僕の体には無数の傷が付いた、擦り傷、切り傷、焼けど、穴・・・
僕は満身創痍、相手はまだまだ居る・・・
ぼくはきっとここで死ぬんだろうな・・・
司令官の杖が俺の喉元にある・・・この状態なら死ねる・・・

「田標『紅き翼』 口スト！！」

「くそ！追いつけなかつたか！全部あいつのせいだ！」

男が声を荒くし司令官に報告をしてきた

「ざまあ・・・みやがれだ・・・
思わず言つてしまつた・・・
ナギさんたちは生きている・・・
僕は今安心しているのだろう・・・
きっと僕はここで死ぬ・・・でも、ナギさんが生きているんならこ
んな戦争終わらしてくれるだろう・・・

「おまえ！」

男がいきなり僕の胸ぐらをつかみあげる

「やめい！我等は敗れたんじゃ！たつた一人の男に…」
司令官が男に静止をかける

「しかし…」

「やめい！…お主、名はなんと書つ？」「…」

「僕の名前…」

たぶん、これが最後になるのだろう…

「僕の名前はリン…リン・イースト」

主の名前を囁み締めながら書つ

「ナギ・スプリングフィールドの一番目の従者だ…」

「そうか…では、さらばだ、リン・イースト。連合の赤毛の魔
魔の一番目の従者よ、もう会つことはないだろう…」

「だろうな…じゃあね…ナギさん…」

そして、僕は死を覚悟して目を瞑つた…

「お前は今からラス帝国に連行する…『紅き翼』の事、連合
の事、洗いざらい話してもううう…」
が、覚悟の意味がなくなつたようだ…

「へ？僕は死ぬんじゃないんですか…？」

「何を言つてゐる？大切な情報源だぞ？じゃが…死ぬほうが楽

だつたかもな？これからは拷問の時間だ「

僕は生きていけるのでしょうか・・・？

SIDE三人称？

リンが一人で敵に向かつて行きから数10歩が経ち『紅き翼』の面々はもうすでに追いつかれない距離まで遠ざかっていた。

しかし、彼等は逃げ切ったにもかかわらず浮かない顔をしていた・・・

・そう、彼等は大切な仲間を失ったのである・・・

「くそつー今からでも遅くない！リンを助けに！」

荒ぶるナギ、リンの親友

「何を言つてるのですか！それでは、リンが一人で立ち向かつた意味がない！彼の死を無駄にするのですか！」

それを止めようとするアルビレオ＝イマ

「リンは死んでない！」

「そうじゃぞアル。リンなら死なんさ・・・きっと帰つてくるはずじゃ・・・じゃから、ナギ・・・それまでは戦え・・・奴が帰つて来たとき安心させれるように・・・」

「そう・・・だよな・・・リンは俺等を生かすために戦つたんだ・・・なら、帰りを信じてやる事やるしかないよな・・・」

「やつだぞナギ。俺たちがやる事……それば、この戦争を終わりせる事だ……」

「やつだなーよこー！」の戦争、終わりせるやー。

「やつーなくちゅなーべゆくよしひるお前はお前じやねえざー。」

そして、彼等のたびもまだまだ続く。

第4話—あなたのために—（後書き）

戦闘描写は難しいです・・・許してください・・・
感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

第5話—新たな出会い、帝都で—（前書き）

いやあー、なんか書いてたり忘へなつてしまひました。友達に言わ
れました！「・・・」は「.....」のほうがいいってー…どう
なんでしょう？だから、後半変わってます！

第5話－新たな出会い、帝都で－

そこは暗かつた・・・

でも、一筋に光があり・・・

僕はその光をつかもうとしていた・・・

それが、僕の人生・・・

第5話－新たな出会い、帝都で－

僕はあの後捕まり、今ヘラス帝国に運ばれている途中だ
司令官が僕に回復魔法をかけてくれたおかげで前回だ、さすが司令官！というべきか？

話してみると、こっちの兵もそこまで悪い奴等ばかりじゃない
やる気のないもの、生真面目なもの、様々居るが、根本的に連合側
と変わらない・・・
なら、なぜ戦争なんてするんだろう・・・

それは、領地が違ったから?
人種が違つたから?

はたまた、それが運命?

全部違うだろう・・・それは、上の命令だから・・・
国のために、民のために・・・オステイアを奪う・・・

それにどれだけの意味があるというのだらうか……

この戦争全てがどこかおかしい……

そう、思つ今日この頃……の夕方

「兵隊さん？ 後、どれ位で着くの？」

「うああ、後なあ……10分くらいだる」

「え？ ちょっと！ 心の準備とかが！ 早く言ひてくださいよ！」
そり、僕はこれから拷問を受けるとか言ひじやないか……

「ああ、安心しろ、お前は拷問なんか受けねえよ。」

「へ？ ……」

僕は突然の出来事に間抜けな声を上げていた

「お前は軟禁されるだけだ。ずっとだけどな。解放はなし、そして、
穩便に平和的に話してもらえればとつても助かる。ま、話さなくて
もずっとそのままなだけだけどな？」

「な、な～んだ……てっきり、バリバリに拷問されて、白白剣で
も飲まされるのかと思つた……」

「そりやあ～、ないだろ？ ……なにしろ、お前はただの兵隊だし
な・・・まあ、何か知つてたらいいな的な感じだよ」

「そつかあ～、なんだか安心しました……」

そして、その後この兵隊さんと話をしていると

「やつぱー、ナギさんのかつこい所はですね～・・・」

「あ、ああ・・・」

「ラカンさんともはりある・・・」

「で・・・？」

「魔法も実はあんちょこだつたり・・・」

「まじかよーって、着いたぞリン・イーストー！」

と、すつと耳聞話といつ名のナギさんの話をしていました・・・

「うわ～、ここがヘラス帝都へラスですかあ～・・・
と、僕は立ち並ぶ家を見て感嘆の言葉を漏らす

「なんだ、そこまで驚く事か？」

「いや、実は言つと僕こつちこきて村とかつてそこまで寄らないん
ですよね？野宿がほとんどだつたり、僕だけキャンプで留守番とか・
・・」

そうなのだ、僕は村に立ち寄らないのだ、なぜかつて？あまり、役
に立たないからである・・・

知識があるわけではないし、力持ちでもない・・・まあ、せいぜい
できて敵の撃退、足止めなのでキャンプで留守番と・・・

「こここの町は立派ですね・・・」

「おつみーーーーは俺等が誇る帝都へラスだぜ？なめてもうひりちや困

る。」

まあ、こんな感じ（どんな感じ？）で帝都ヘラスの城についてしまつた・・・

「うーん、お別れですね兵隊さん・・・」

「もうだな、まあ、なんだ？お前そんなに悪い奴じゃなあただし・・・がんばって生きようよ！」

「はい、ありがとうございます・・・兵隊さんも死なないでくださいね・・・」

「つへー！それは、分からねえなー俺等は兵隊だぜ？お前も分かってんだろう？」

「はー・・・それでも・・・死なないでください・・・」

そう、僕等は兵隊・・・戦場で戦う存在・・・
僕はナギさんやラカンさんを始め、詠春さんやゼクトさん、言いたくないけどアルなどのつわもの揃いの部隊で守られていたからこそここまで生きてこれたのだ・・・
普通の兵は、まるで使い捨ての駒のようなもの・・・

そして、そこで、その兵隊さんとは別れた・・・
すぐにやつてきたのが、城の衛兵だ

「貴様がリン・イーストか？ぜんぜん『紅き翼』の構成員の用には見えないな・・・」

「はい、よく言われます・・・でも、そうです。僕がリン・イーストです。」

「せうか、ではこひらへい」

そして、僕が連れて行かれたのはある部屋

「お前にはここに居てもうつ、食事は衛兵が持つてくれる、それ以外に何か要望があればドアの前に立つている警備兵に言つてくれ……叶うかは別だが……あと……」

「後？」

そうすると、衛兵が杖を取り出し

「誓約の黒い縄よ、かの者に定められた制約を。」

そう唱えると、僕の右手首に黒い模様が浮き上がる

「これで、お前は私が魔法を解くまで、魔力、氣ともに使えなくなつた……逃げようなど思ひなよ？我々も忙しいのでな……」

「まあ、分かりましたよ……魔法が使えないんじや、僕は何もできません……」

そう言い言われた部屋まで移動した

僕に宛がわれた部屋は別段普通の部屋だった……
城内にある部屋としては質素なものだったが、野宿をずっとしていった身としては、まあまあ、いや、すごくよかつた

まず、ベッドをはじめ、鏡もあるし、タンスだつてある……

「「」の部屋ですか？」

「ああ、「」の部屋だが？何か問題か？」

「いや、こんな部屋にこのかなあ？って思つて……なんていこうか、豪華すぎるやしませんか？」

「ああ、その事だが……本当は牢屋でぶしごんでおへつもつだつたんだが……何せひづの第3皇女が……」

「へ？」

第3皇女？ヘラス帝国、第3皇女……テオドラ……だつけ？

「お前に会つたといと言つたきり、聞かなくなつて……しうがなぐ、普通の部屋にしてやつたんだ……」
はあ、まあ、普通の部屋になつた事はよかつたな……

「まあ、お前はずつとここに居ればいいんだ……それ以外はできない、何か質問はあるか？ないな？おけー！じやあな！」

「あーちゅつー！」

なんか、せつせつと言つてしまつた衛兵……

それから、僕は部屋でくつくつし、床についた……

はあ、なんだかこの安心感がつても不安だよ……
なんだか、とっても悪いことが起きそうで……
なんだか、待遇もあれだし……帝国人って馬鹿なのかな？
まあ、どうせ俺なんて情報もくそも持つてないけどさ……
ああ、心配だあああ……つて、すうい眠くなつてきた……
おやすみー……

そして、次の日がやつてきた・・・

「ほり、朝飯だ」

警備兵が中に入ってきた

「ふああ～・・・ありがとひざいまふ
今日の朝ごはんは、パンにスープ・・・
なんて、いい朝ごはんなんだろつか・・・

野宿しているときはクラッカーと肉程度だつたし
朝っぱらからラカンさんほどこから持つてきたから知らないけど酒
を飲むしで落ち着かないんだよね・・・

「朝飯の後は第3皇女がお会いに来る・・・無礼のなこよつにな
あつたら」

「あつたら・・・?」

「首が飛ぶ・・・」

ああ、死ぬのね・・・

それにも第3皇女があ～・・・

俺に何を聞きたぐるんだろう・・・まさか、第3皇女自ら事情聴取

(?) ～・・・
なわけないよなあ～・・・じゃ、なんだろ・・・

「1」馳走様・・・

ふうー、おなかいっぱいです・・・

「つて、おまはやー」

「まあ、これくらいじゃないと、ラカンさんとかは食べるのとてつもなく早いですからね・・・」

「さ、さすがは、平凡でも『紅き翼』なだけあるぜ・・・いや、そこ関係ない・・・」

「で、一つ質問なんですけど・・・第3皇女が僕に何の用なんですか？」

「ああ・・・なんていうの？テオドラ様は・・・好奇心旺盛だからね・・・色々知りたがりなんだ・・・」

「はあ、で？」

「『』の兵たちは基本、この城漬けだから・・・外の世界なんてあんまし行かないわけだ・・・で、そこでお前が来るじゃないか？世界を放浪した『紅き翼』の一人がよ？それを聞いたテオドラ様は・・・

・
と、なんだか、少し愚痴気味になつてくる警備兵・・・

そんなとき不意に

「妾がどうしたのじゃ？」

幼女角人間（つぼい）が話しかけてきた・・・

走る沈黙、流れる汗（警備兵の冷や汗）、「となる時・・・

「て、テオドラ様ああ！！」

そして、時は動き出す！なんてね。警備兵がいきなり叫んで土下座し始めて・・・

「すいませんでした！別に何もテオドラ様が好奇心旺盛すぎて我々兵達が遊び相手として使われる事に私は何も反対していませんよ？むしろ大歓迎です！あははははは！」

はあ、かわいいそー・・・

「お主がリン・イーストか？どこにでも居そうな奴じやぞ？」
それをすべてスルーする第3皇女もすごい・・・これが、ヘラスの実力か・・・！

「はい、僕がリン・イーストですよヘラス帝国第3皇女様。まあ、僕の特徴自体が、特徴がない平凡なんで・・・」

「妾のことはテオドヨイゾ？呼びにくいじゃん？」

「いえ、でも、さすがに僕敵国の兵だし・・・」

「そんなことはいいのじや、妾がそいつじひと言つたらわざつするのじや！」

目線で警備兵に助けを求める・・・

が、警備兵はもうそっぽを向いて口笛を吹いている・・・

少し反撃

「いや、でも「ダメじゃー」だから「ダメじゃー」。『ええー・・・・・』
「だから、ダメじゃー」。『ええー・・・・・』
なんなんだひづ、この皇女さま。

「はあ・・・・・じやあ、ナオトリ様と早めにせめておしゃべり。

「ひむ、それでいいでま、中に入るだ?

「あ、はこひづ、あ
「ペリ

と、黙って中へ進む

警備兵のひづを見るといつも見て、『やあみやがれーせこせい
頑張れー』みたいな顔で見きます。
え? なんで分かったかって? それぐらい分からなことがあてこま
んよ? ..

「僕は非戦闘員みたいなものですから・・・・・・・。」
とこりより、今は魔法切られてていつもの体だから・・・・。

「お主それでも『紅き翼』の一員か？」

そつまつてやつと肩から降りてくれる・・・

「この子は・・・・なんて、元気なんだ・・・・。

「この身が持たない！！

テオドラが僕のベッドにちよこと座つ、手で僕を誘つ

「まれ、こちこきて話を聞かせろ。」

「へ？話？」

「ナウジヤー、話せ、外の世界の事。」

「なぜ？そして、僕？」

「なんじゃ？警備兵に説明されてないのか？妾はこの城から出ないのじゃ、だから外の世界の話が聞きたいのじゃ！」

「ああ・・・・・・・・まあ、そんなことを言つていたような・・・・・・・・

「はあ、外の世界ですか・・・・・・・何が知りたいんですか？」

「お主達の旅を聞きたい！」

「僕たちの旅ですか・・・・・・少し長くなりますね・・・・・・・・
僕は少し昔の事を思い出しながら話し始めた・・・・・・僕たちの
旅を

「まあ、とにかくナギさんが通る先邪魔のものを蹴散らしただけで
すね・・・・・・・・

「短い！嘘を言つな！もつとまじめにやれ！」

と、ポカポカぶつてくるテオドラ様・・・・不覚にもかわいいですね・・・・・

「はい、では。気を取り直してもう一度です・・・・・」
そして、少年は思い出す、彼等の出発点を・・・・・

少年たちが出発したのはイギリス、ウェールズの山奥のとある魔法学校だった。そこに通っていた当時の彼等は先輩と後輩という関係だった・・・・・とある事件が起こるまでは。その事件の被害者はリン・イースト。彼が魔法学校に居た当時は性格は陰気で根暗、引っ込み思案であった。今になつたのが奇跡のようだとも言える。そして、学校は全寮制で親も居なく、成績が一般より低い彼には味方をする教師も居なかつた。そんな、彼の周りでは虐めが起きていた。虐めといつても、靴を隠したり、教科書を隠すなどの子供っぽい事だった。されど、小さい事でもそれは虐めだった。虐められても、相談する相手も、助けを求める教師も居なかつた。彼は、その虐めを耐えるしかなかつたのだ・・・・・

そんな、虐め漬けのある口だった。まったく、口答えをしないリン。そんなときには、一人が言つてしまつた、もつとやつてもいいんじやないか?と。次第に虐めはエスカレートした。靴を隠すが、靴を解体になり、教科書を隠すが、教科書を燃やすになつた。それでも、

彼は耐えた、耐えてみせた。それが気に食わなかつた少年たちがいた。彼等は放課後人気のないところにリンを呼ぶと、そこでリンチを始めた・・・・・そのころ覚えた手の魔法『魔法の射手』を試し打ちにとリンに照準を定める少年、それを周りから笑う少年。誰もそれを止める事はなかつた・・・・・『魔法の射手』それは、魔法使いが一番最初に覚える攻撃呪文。初歩中の初歩と言つても、『攻撃』魔法だ。矢は放たれ、リンの背中に直撃・・・・・半ば、リンの背中を抉りそれは爆発した。そして、なぜかそこにいた、先輩ナギ・スプリングフィールド、学校一の問題児と同時に天才、はその場面に鉢合わせてしまった。彼はリンを見て、首謀者たちを叩きのめした。それは一方的、しかし、その力こそが世界すべてだつた。力があれば生き、なければ死ぬ・・・・・この世界は弱肉強食だつた。急いでリンを保健室へと運ぶナギ。その速さはまるで風。その風に包まれながら少年は一瞬息を引き取りかけた、しかし、そこで聞いた彼の声を。死ぬな。彼は確かにそう言つてくれた・・・・・・その後、リンは無事教師の回復魔法で完治とまでは行かないが、復活。しかし、その傷は消える事がなかつた。

それから、ナギといつも一緒に居るよつになつたリンは、ナギの影響で性格も明るくなり始め、行動を彼と共にし、魔法を励むようになつた。そうして、すぐされる穏やかに日々、突然ナギが学校から追い出され、それに付いて行くことを決心するリン。目指した魔法世界で困難を軽々と乗り越えるナギとそれに付いて行くリン。彼等はその困難の中で新たな仲間に出会う。そして、その仲間たちと作つた『紅き翼』で歩く先にある戦闘を実力行使で解決していく。自称『最強』の傭兵剣士ジャック・ラカンとの数々の戦闘により地図が改変される毎日。ついには、ラカンまでもが『紅き翼』ナギについててしまう。そして、今起きている戦争に連合側として介入して、今に至る。

「のぉ、まだその傷はあるのか?」「少し心配した田でこいつを見てくれる

「はい、ありますよ

と、言い服を背中の部分だけ捲くる。

そこにあつたのは大きな傷跡。

戦闘の傷跡でもなく、戦場の傷跡でもない・・・・・

それは、幼少のときに受けた傷・・・・・・一生消える事のない・・・

・・・・

テオドラがその傷跡を指で触つてなぞる

普段触れていないその部分は敏感になつていて、声を少し上げてします

「痛いのか?」と聞いてくるテオドラに「いえ、くすぐったいです」と答える。

服を戻し、強制的に触らせるのをやめる。

あたりが、静かになる。誰も何も音を発さない・・・・・

彼は窓の外を見る。そこにあるのは、高く上った太陽・・・・・

そして、自分の喋り疲れた顔

「ずいぶん、長く喋つたようだね・・・・・・もひ、毎だよ~」言つておいでテオドラ様

隣に座つているテオドラに行く事を進める

「嫌じゃ……」

「はい？」

「お主と食べる…………」
「のトは…………」

「仮にもテオドラ様は皇族ですよ？ 敵国の兵と食べていってはまずない
じゃないですか…………」

「嫌じゃ…………」

「だから」「嫌じゃー」でも「嫌なんじゃー」「面つら」と「あかんー」
・・・・・

また、この皇女は！

しかし、決め技発動！

「妾と食べたくないのか？」

上田遣いでこいつらを見てくる褐色幼女（？）

「うう…………食べたくないわけではないですけど、やうこいつ

問題じゃないんです。大人の事情といつか・・・・・

「では、良いではないか！妾とお主はまだまだ子供じゃ！」
子供・・・・・そう、僕等は子供だ、でも、子供が戦争をするだ
ろうか？人を殺すだろうか？

僕は本当に子供なのか？そんな、たわいもない、そして終わりもない事を考へてると、下からテオドラがこっちを見てる。

「・・・・・そう、かもね。よし、じゃ、一緒に食べようか」

まあ、断る事は不可能っぽいからね・・・・・

お前に拒否権はない！つてか？

「やつするのじゃーおーー警備兵ー妾とコンの食事をもつてーー

妾はこじで食べるわー」

そつ警備兵に命令すると、警備兵がこいつを見て『？』みたいな顔

をしてくる。

「早くするのじゃーー

やる気のない声を出してベッドに倒れこむテオドラ

そんな仕草がどこか子供っぽく、かわいかった

僕はテーブルを用意する。

と、いつてもあまりすることはないが・・・・・・
料理が運ばれてくる、2プレート。一方は質素、一方は豪華。一方
は冷たく、一方は湯気が立っている。
これが格差・・・社会なのか・・・

まあ、そんな事はさて置き

「テオドラ様」

と椅子を引いて座る事を促す

ג' ע' י' נ' ג'

「ふむ、なかなか様になつてゐるではないか?」

「まあ、世間観んだ本の中でこんな挿写があつただけですよ」

「ふむふむ・・・・・」

なにやら考へ込んでこむトホドリ

「テオドラ様? 何してるんですか? もういいやいますよ?」

と、言つて宣告通りテオドラのプレートに乗つていた肉を取り、口の中に入れる

「いや、お土を執事にでもしようか考へてこたのじゃが……ついで、おまつーなにを取つておるのじゃ。」

この間 0 . 5 秒

「ふふ―――！」

「汚い！』

「うう、すいません……でも、テオドラ様が悪いんです、
いきなり変な」と言つから……・・・・・僕を執事なんて、無理です
ね。立場上。」

「おこ、召使1号――・

と、呼んで飛んでくるおひさん1号

「はい、なんでしょうかテオドラ様？」

「Iの者を今日から妾付けの執事にする。異論は許さないぞー。」
なんて無茶苦茶なことを・・・・・

「しかし、テオドリフ様「異論は許せんと言つたのじゃ」はー、では。
・・・・・」

田で『名前何?』と聞いてくる召使一郎

「リン・イースト」

「では、リン・イースト。あなたは今日からテオドリフ様付きの執事
となります。(あー!めんどくせー!)」

「はー、分かりました(I)ちだつて被害者ですー。」

そして、すこしの間召使一郎と話をし、書類を書き、睨まれ(親の
仇の用に)

召使一郎は出て行った

「はあ・・・・・なんでこんなことしたんですか?」

「ん～、體じゅー」

「僕は暇つぶしですか！？」

「それに、お主の事を氣に入ったのじや、もつとお主といで、話が
聞きたいのじやー！」

『もつと、あなたといたい』それは僕が一度願つた事・・・・。
ナギの傍で肩を並べて戦いたいと、自分の心から願つた願い
それ以外何もいらないと、自分の人生をかけた目標・・・・。
しかし、それは終わるかもしれない・・・・。そう思つていた時
もあつた、あそこで死ぬつもりだつた・・・・。
でも、今はどうだらう？彼女の言葉を聞いて気がついてしまつた、
自分の気持ちに・・・。

自分は生きていきたいと・・・・。
死にたくないか無いと・・・・。
まだ、一緒に居たかつたと・・・・。
いまさらになつて気付いてしまつたのだ・・・・。

僕はこんなにも生きていたかった……あの人の傍に居たかつた……
でも、僕はある時、彼を助けよと死のうとした……
その事がいきなり怖くなつた……彼という存在が自分から遠く離れていく、この感覚が……

気付いたときには涙が流れていた……
再び窓の外を見る、そこにあるのは……高く上った太陽、
そして……自分の泣き顔だった……

「リン……？」

テオドラがこっちを見ている……

「僕はこんなにも生きていたかったのか……」

そして、声を絞り出し

「彼に……ナギさんに会いたい……まだ、守つていていい……」

そう、小さく呟いた……

その日はその昼の後でお開きになり、また明日という事になつた

テオドラは聞こえたのだろうか……僕の悲痛の願いを……

第5話ー新たな出会い、帝都でー（後書き）

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

第6話——One Little Wish——（前書き）

この話のメインヒロインはテオドラにしました。なんていうか、主人公のキャラがぜんぜん変わってる気がする。そして、平凡でもない気がする・・・まあ、後でやることはもう決まっています。

第6話—One Little Wish—

それは、突然、そして必然・・・・・
運命なんてものがあるのなら、偶然なんてない、そこにあるのは必
然・・・・・

ただ、人はなぜ『必然』を『偶然』にしたんだろう？

第6話 One Little Wish

僕は今、走っている・・・
そこに壺があれば中を確かめ・・・
隙間があれば入つて見る・・・
ドアがあればそれを開ける・・・

そう、僕は今・・・

「お主本當にだめだめじやの、うへ」

僕は今・・・

「テオドラ様が上手過ぎるだけです・・・
僕は今かくれんぼをした！」

おかしい・・・
なぜ、ここまで見つからないんだ・・・
地の利があるからって、壺に入った瞬間消えるし・・・
人間業じゃない！って人間じゃない？

「よし！では、次は何をする？」

「いや、テオドラ様、もう夕飯の時間です・・・おねがいだから、
もうやめて・・・」

「むうー、そう細かい事言つな

「細かくないです・・・もう30分遅れています・・・
ごめんなさいコックさん達・・・今日も遅れました・・・

「じゃ・か・らー、姫はお主と夕飯が食べたいのじゃ～～」

「ダメですよ・・・家族との交流とかは大切です・・・
はあ、こつもこの調子だ・・・

「家族と話すと、お主の家族はどうなのじゃ？」

「普通に居ますよ、父、母そして妹です」

「父が「ホール・イースト、母がマヤ・イーストそして妹がスカーレット・イーストです。」

「では、お主はなぜ家族と居ないのだ？姫に家族の交流ビアヒツ吉
つてるくせに家で少年ではないか？」

「うう・・・すこませんでした・・・」

「では、今日も一緒に食べるのだー。」

「いつもこんな感じ・・・結局は一緒に食べる事に・・・

「はは・・・参ったなあ・・・」

「ほれ、早く屈め」

そして、片膝床につけ屈む。

「うむ」

そう言いながら肩に上るテオドラ

そう、これは・・・肩車だ・・・

「つむ、視界良好じや」

まあ、お前小さいもんな・・・

「お主今妾を侮辱しただろ?」

「え? そんなことないですよ?」

サラッと嘘言こますよ。にしても、ここつは心が読めるのか・・・

・

僕がこの城に来てから数日が経ち、一日目に執事にされてから（執事の仕事なんてやってないけど）ずっとテオドラの身の回りの管理（ところづきの遊び相手）をしている僕です。

本当にあの時はびっくりしました。でも、なつてみると別段悪いものではない・・・とい、言つておいつ・・・いや、やっぱし超、劇的に疲れる・・・

毎日テオドラの遊び相手をするところのは本来この城に居る、衛兵、警備兵の役目であって、それをすべて俺が一人で受けているのだ・・・

・
俺の気持ちを知れ！

毎回毎回かくれんぼして、見つけられない！

おにじにして捕まえられないでずっと走って！

しかも、相手はあのテオドラー！一日ずっと遊んでいても疲れを知らない、あのテオドラなのだ・・・

子供つてすげえー！って思う今日この頃、僕はもう黙ってしまうかもしれない・・・

次の日――

今日はなんとお休みを頂きました。執事長から『お前も大変だろ？・・・』と泣かれ、くれました。

この休みはこの城にある魔道書庫に行こうと思つていい。もう許可ももらつたし（さすがはテオドラ付きの執事、権力ばねえー！）

うすくらいい、そして本くさい一室

ほかの部屋とは別の雰囲気が漂つている
そう、ここは魔道書庫！魔道書が眠る場所

「うへん、なんか良い魔法ないかな？」

僕は今自分に最適な『魔法』を探している

『武神の舞』などの強化系でなく、『光の槍』などの魔法だ。

「はあー、そう簡単に見つかるわけでもないか・・・」

しかし、結果は一目瞭然……田が疲れただけだった

そして、僕は一冊の本を取る

題名は『呪』…………恐つ！

その本を試しに読んでみると

『この本を読む者よ、あなたは今非常に誰かを殺したいんだひづ？
しかし！殺したらそこで終わりです…………そこでです。呪つ
てやりませんか？呪つて死ぬよりつらい現実を味あわせてやりまし
ょづ！』

と、書いてある…………なんか、ひどいな…………

そして、パラパラとページを捲つていいくと『衰弱呪術』と言づ部類
に入った

衰弱呪術って言つんだから、相手を衰弱させるんだろうな…………

・

その章を読み進める事30分

『この呪いを使えば、相手は子供になり自分の言いなりに！そして、
魔力、気が衰弱！口りつ娘が大好きなあなたへ！ あ、別にショタ
でもいけますよ』

と、書いており、『呪術名：口リ奴隸』と書いてある…………
この本アルに持つていこうかな？何々？呪文は『来れ！千の口リ！
我が欲望をもつてこの者を我が奴隸にせよ！口リ！奴隸！』
なんか、色々とおかしい気がする…………うん、なんだひづ？
もひづ、よく思い出せないや…………

「はあ～、なんかいい魔法ないかな？」
独り言を漏らす

「いい魔法か？」

しかし、結果独り言ではなかつた・・・・・・

「ああ、そなんだ・・・・僕もいつかは戦線に復帰する・・・・つて、テオ・・・・」

「おー今お主、妾の」とテオと呼んだじやるーそうしりやつしるー

「で、テオドーラ様、なんのようですか?」

「つて、戻さなくともよいではないか。つと、良い魔法だったな・・・・」

「テオドーラ様は魔法とか覚えてるんですか?」

「つむ、妾もなかなか魔法は使えるぞー」
「どうだつたんだ?」

「何知つてるんですか?」

「仮契約」

「へ?」

今なんて言ったこの幼女

「仮契約ならしつとるぞ?」

そう言い、地面に魔方陣を書き始める

「テオドーラ様床に落書きをしちゃいけまー・・・・じゃなくてーなぜ、
知つてるしー」

「お母様が言つてた『心に決めた相手にならしてよ』」と。じゃから、覚えた。万ーの時のために」
そんな万一きません！

「いや、でも、何で今?なぜ、今書くの?」

「それは、お主。今からするからじゅ・・・
と、顔を赤らめる少女・・・・・かわいいから幼女から少女にレ
ベルアップ

「は?」

「今からするって・・・はははは、『冗談うまいですね!』

と、笑う(うよつと本氣) 僕

「『冗談ではない!本当にあなたのじやー!』

「・・・・・・・・・・・・」

ど、どうじよづ・・・の方、生まれてから女性に迫られるなんて
ナギさんのイベントなかつたし・・・・・・・
くそー!僕は今自分の経験不足の人生を呪いました。

「ん～～～」

と、強引に仮契約を行動につつなうとしているテオドラ

「つて、だめだめ！」

そして、彼女を突き放す

突き放されたテオドラはポカーンと宙を見ている

「な、なぜじやーなぜだめなのじやー！」

「何を言つてるんだ！テオはもつと長く生きるんだー君には僕なんかよりもっと相応しい相手が現れるだろー！」

「そんな事ないー妾はお主がいいんじゃー！」

「まだ、会つて数日しかなつてないだろー！」

「そう、僕と彼女は出会つてまだ数日・・・・・
好きか嫌いか？と聞かれたらそれは、好きに入るだろー・・・・・
でも、それは女性としての好きじやなくて・・・
ええー、なんていうの？妹的な存在。構つてあげたくなる、保護欲
をくすぐる存在。

テオドラは黙ってしまった・・・
床にすわり俯いている

「・・・ンの・・・・・か・・・」

最初に喋ったのはテオドラだつた・・・

「なんですか？小さくて聞こえませんよ？」

「リンのバカ！！」

そう言つてテオドラは部屋から走つて出て行つてしまつた

僕は部屋に戻りベッドに倒れこむ

「はあ～～・・・・・なんで、こつなるかな・・・・・頭を抱えながら独り言を言う怪しい人です。

「おい、新執事！今から飲むけどお前どうする？」
この年で酒に誘われるのか…………まあ、いいか今無性に飲みたい

「吸けてたちます！」

え？ なにか違う？

「よし、来い！」

「ぼくはですねえ――！――！ぼくはですねえ――！」

「ほくはですねえーー。べつにテオドリヤの」とかあわぢよーー。」

「 もう 一 つ ! 」

「でもなんかじょせいから『ハニカム』ついでにやなんですよねーーー。」

「そーだそーだー！」

「一ノ丁」の「一ノ丁」

「い
け
い
け
！」

そして、僕は皆に無理矢理^{いつものぼくとしては}テオドラ様のところに仮契約をしに行く事になつた。

今のぼくは超ハイです。

バン！

ドアを思いつ切り開け放ち、テオドラを見ると、彼女はベッドの上で拗ねていた

「なつ！り、リン！お主何をしてるのだー！」
まだ、ぼくの事を怒ってるらしい・・・・・・

「テオ…」

ぼくはコリコリと一歩ずつ彼女に近づく

「な、なんじや？」

拗ねている彼女の横に座る

「テオ…・・・・・」

彼女の目を見る、

彼女の茶色の目に吸い込まれる

「リン・・・って、酒臭いわ！」

ムードもあつたものでもないが、ぶち壊すテオドア

「テオ…・・・」

そう言つてそつと彼女を押し倒す

「う、リンーダメじゃーと、いつかお主がダメといったではないか

！」

暴れて抜け出さうとするが、相手はまだ少女こつちは青年…・・・勝つた

「ぼくの事を怒っても構いません……でも、それでも、ぼくはあなたがすきなんです！」
最後のまつまハイです。

「なつーう、嘘をつくな、お主は嘘を唄ふんだではないか！」

「あれは……あなたを思つての行動です。きっと深く傷ついて思つた……」
そして、じつから恥ずかしいです、じつまでも恥ずかしいけど……

「でも、気付いたんです！自分の気持ちで心のおつから運べるの想いが…ひどく切ないんです……」

「リン……」

彼女が目を瞑る

「テオ……」

そして、彼女の唇に自分の唇を近づけ……

触れる

そして、もつと奥へと・・・

「ん・・・ふ・・・」

彼女が酸素を求めて声を漏らす

「ふは・・・」

唇を離す・・・

そこに居たのは、一人の少女
顔を赤らめこっちを向いている・・・
急に覚醒する意識・・・
血の気が引いていく感覚・・・
これが、アルの言っていた賢者タイムか・・・?

「やつてしまつたあああ――!――!
頭を抱え高らかと吼える

「うわ、こきなつビうしたリン?」

「僕今・・・キスしましたよね・・・」

少し戸惑いながら

「つむ、したぞ」

と、言うあなたはとってもかわいい・・・

「だ、だけど、あのとつてもいい難いんですけど」「酔った勢いとか
言つたら殴るぞ?」「好きです!」

逆らえない・・・僕はここまで無力だったのか・・・・ぽかーん

「妾も・・・お主のこと我が好きじや・・・」
そつ言つてこっちに寄りかかつてくるテオドラ
お前、僕に無理矢理言わせただろ・・・好きだけどさあ・・・
僕つてお人よしなのかな?

内心もう今すぐ冷や汗だらだらだつたりします。
絶賛後悔中です。

「では、もう一度するぞー」

「なぜにー?」

「仮契約じや」

そう言いつつ、そと魔方陣を床に書き始める

「だから、床に落書きはダメですよ」

「いいのだ

そうして、書き終わり陣の中に立ちこじりに視線を送つてへる

また突き放したらきっともう一度と戻れない
でも、突き放さなくとも戻れない

結果は同じでも、きっと彼女は突き放したら傷つくだろう
なら、僕はあなたを傷つけない、傷つけるものはすべて排除しよう
僕が今までしてきたように……主が変わっただけだ

「分かったよ……僕の負けだ」

微笑みながら彼女に言い放つ

そして、今回はちゃんと一步一歩人の中に歩み寄る

「決まつてあるづ、妾はいつも勝つのじや

たしかにな、かくれんぼでもおじいじでも、俺は勝てないんだ……

・

「じや、よろしくなマイ・マスター」

そして、再び口付けをする

辺りが暖かい光に満ち、また消える

「むへ、なぜ捕まるのじや……」

翌日

僕は今・・・・・

「はは、仮契約したおかげかも」

僕は今・・・・・

「む？ 関係なくないか？」

僕は今鬼ごっこで勝ったんだ

「関係あるさ、繋がつたんだろ、テオと僕、僕とテオ。離れてたつて分かる絆つて物がさ」

こんな関係初めてだよ

僕は臆病で、恐がりだ。でも、少し勇気を出せば、君に手が届いた（酒の力を使つたけど・・・）気にしない！

これからも、僕は恐れ、怯え毎日を過ごすんだろう。でも、君だけは守つてみせる、君の笑顔だけは。

第6話—One Little Wish—（後書き）

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

次回、カードの説明します。

第7話—再会—（前書き）

いやあ、色々矛盾してきた気がするけど仮にしない！それがモットーです。きっと！

第7話—再会—

『最近戦場で活躍をしていた『紅き翼』が今は大犯罪者に…？今日はその真相を探つてみよう！』

今僕はテレビを見ている

『まず、大犯罪者と呼ばれている理由ですが、先日『紅き翼』のメンバーが数人でマクギル元老院議員を殺害しようとしたことですね』
『いやあ～、私もびっくりしましたよ。その時僕もメガロメセブリアに居てね・・・・・・』

ニュースを見ていたらなんとナギさんたちのことが出てるじゃないですか
ためしに見てみたら、まさか、こんな事になつてるなんて・・・・・

「なんじゃ、お主の仲間たちは犯罪者なのか？」

「いや・・・そんなことない・・・はず」
もしかしたら、酔つた勢いでとか・・・
暴れたいだけとか・・・ラカンさんとナギさんならあり得る・・・

第7話—再会—

「あのお、衛兵さん？僕の魔法封印解いてくれませんか？」

「だめだ、まず、なんで解いてほしいんだ？」

「だつて、僕いつもテオドラ様の相手をしていて・・・魔力強化もなく・・・無理です・・・死にそうなんです！」
と、必死で説得する事1時間・・・

「わかった・・・くう・・・お前の苦労は分かった・・・解いてやろう・・・うう」

泣きながら封印を解いてくれる衛兵

「ありがとうございます・・・」

この衛兵は大事な事忘れてないか？
僕一応敵なんですよね・・・もしかしたらって事もあるかもしけないのに・・・

まあ、そんな事しないけど・・・

あの日から僕とテオは前以上に一緒に居る事が多くなつた。朝起きてから、身を整えテオドラを起こしに行き、朝食をとり、遊び、昼食をとり、遊び、夕食をとり、話をして、別れ、寝る。こんな感じでサイクルしながら僕の生活は成り立つている。

テオとの遊びは様々。彼女見た目の割りに頭がいいからカードともできるし。

まあ、できるからといってやるかと言えば、やらないのだが・・・主にやるのは、かくれんぼと鬼ごっこなどの走る回るものあと、時々人生ゲームなどの長いボードゲームだ。ボードゲームの場合、衛兵なども加わる。

カードは、ポーカーとかが好きだそうだ。

「ちつ！なんで、俺だけいつも…理不尽だ！」

「ふはははー！我は億万長者の道を往くー！」

「何を言つー！俺に決まつておろいつー！」

「ふん！妾に決まつておろいつー！」

「残念でした。」

そして、自分の手札を明かす。

「「「「なつーひ、ロイヤルストレートフラッシュだよ（じゅうじ）！」」」

そして、今は絶賛ポーカー（賭けなし、今さつきのはノリトーク）

中。

「はつはつはー」「まみに、僕はいかさましますよ?
え?何が悪いんですか?騙されるのが悪いんです!

「へんあお~」

「お主、いかれましたるじやう!」

「何をーしませんよー。」

ふつ、サラツと嘘も言こます。

これも、生きていくためー金のためー!

「もう、ポーカーはやめよう・・・・・・
一人が言い出す

「では、次は人生ゲームじゃー。」

「また、やるいんですか？」

衛兵が文句を言い始める

「やつですよ、昨日も一昨日もその前もやつたじゃないですか？」

他の衛兵も言い始める

「やつですよ、こには『野球拳』やりましょぶ！」

この人たちとはテオドラに何を求めてるんだろう？

「何を言つてるんですか？ああ、野球がやりたいんですね？あなた
の頭をボールと見立てて！」

「ヒヤー…すいませんでした……」

ふう・・・・・

なぜかこいつを見上げるテオ

「どうしたんだテオ？」

「のあ、リン『野球拳』とは何じや？」

それを聞きますか・・・・・

「で、テオは知らないいい物だよ。分かつた？」

「むう～、妾に隠し事はするなあ。教える～」

「じゃ、じゃ、後で教えてあげますから……」
くそ・・・・・僕は口リコンじやないー・・・・と思いたい

「…ひなつ」

「外野つるわー！」

「と、いつかテオもう昼の時間だ」

「やつじゅったの。では、毎を食べに行くぞ！」

「はい」

今日の昼はサラダに鶏肉を炒めたもの、オニオンスープ+デザートのプリンでした。

そして、今日も昼の後散々走りまわされた僕だが、今日から魔法が使えたので身体強化が少しあれいつもよりは疲れなかつた。

「ふう～」

部屋に戻りベッドに重く座り込む

今日一日を振り返る

衛兵達と仲良くポーカーをして
テオと走り回り、日常だった
あと、テレビも見た
テレビか・・・みんなどうしてるかな？

そんなことを考えると、頬に一筋の雫が走る
自然と目から涙が零れる

なぜ、僕は泣くんだろう

頭をよぎるは不安

『紅き翼』が大犯罪者として認識されたこと。
思い出すは友

『紅き翼』の共に戦つた人達
込み上げるは後悔

『紅き翼』から離れた事
振り扱うは疑念

『紅き翼』の真相を知りたい気持ち

僕は迷っていた

自分での中で優先順位が決められなく
今そのままテオドアと居るのもいい・・・・・
でも、僕はもともとナギさんと旅をしていたんだ、しかしここから
抜け出すとテオが傷つく・・・・・

そして、気付く

ああ、僕は今こんなにも不安定なんだ
僕の気持ちはここまで弱いのだと・・・・・

自然と胸が締め付けられるような痛みを感じる

膝に肘を突き頭を支え俯く

涙の粒が床に落ちる

タン

落ちたつ粒が弾ける

僕の部屋だけに雨が降っているように感じた
この部屋が僕の心のような感じがした
暗く、物が少なく、雨が降る
区切られた空間・・・・・

でも、そんな僕にもドアはあった

ドアが開く

「リン～～」
テオが部屋に入つてくれる
僕のほうを見て

「お主泣いておるのか・・・?」

「いえ・・・ただ・・・田代山が入つただけですよ・・・」
はは、こんな嘘バレバレだらうな・・・でも、本当の事は言えない・
・

きつと、彼女は僕を許してくれる、僕を仲間の元へ行かせるだらう・
・・・・

「やうか・・・」の部屋も掃除しなくてはな・・・
じつやら、空氣を読んでくれたようだ

「で、テオ何の用だい?」こんな夜遅くに
実のところそこまで遅くない・・・

「う、うむ。実は・・・リンと一緒に寝たいんじゃ・・・」

「いや、さすがにそれは・・・仮にも10代ですよどっちも」
そう、容姿に惑わされているが・・・テオも何気に10代なのだよ・
・

「むう～、いいではないか・・・」

「はは、分かりましたよ・・・

「へ?」

彼女が変な声を上げる

「いいのか?」

「いいよ、どうせ断れない・・・」

やつ、どうせ断れない・・・僕は逆らえない・・・

「そ、そつか・・・」

もじもじとする彼女もまたかわいい

「どうしたんだ? 嫌なら別にいいぞ?」

少しこいつの仕返しをしてやうつ

「い、嫌ではない・・・お主がこんなにも早くオッケーするとは思つてなかつたから、本当は色々考えておつたのじや」

「はは、そこまでして僕と寝たかったのかい?」

「・・・・・やうじや・・・・・・」

すこません、逆にこっちが恥ずかしいです・・・

「まひ」

先に布団に入り、彼女を布団の中へ誘つ

「腕枕する?」

彼女は無言で布団に入り僕の横に寝そべる

「なんじゃそれは？」

「いりやつて」

と、言つて手を伸ばす

「僕の腕を枕にするんだ」

「やうか

そう言つて彼女は僕の一の腕に頭を乗せ、僕の服を掴む

「別に掴まなくてこゝも行かないよ？」

「嘘じや・・・こつも、お主はここないではないか・・・

「へ？ いつも居ますよ？」
だって、いつもここで寝てるし・・・

「お主はいつも何を悲しんでるのじや？ 妻はお主の涙なぞもう見
たくないのじや・・・」

「・・・・・・・

「教えてはくれんのか？」

僕は口ばくった。まさか、彼女にまで心配をかけてしまつとは・・・

「実は・・・仲間の事が心配で・・・はは、心配しても意味がない
のに・・・」

そう、あの人たちは最強、僕と違い、力もあり心に芯が通った人たち

「そりが・・・妾は、妾がお主をここに縛つて居るのか？そりながら
「そんなことありませんよ」え？」

「僕がここに居るのは、僕の意志です。でも、仲間の元にも居たい。
僕の我が家ままです」

「それでも「テモもテロもあつません」むう～
むぐれるテオも子供らしくて・・・何回田だこの台詞？」

「テオがいつも通りにしてればいいんだよ」

「そりが・・・」

そうして、一人とも口を開けず、眠りについた

テオドラマの顔が笑顔だったのは誰も知らない
作者以外は・・・

そして、次の朝テオと一緒に寝てるとこを見つかり執事長に怒られる僕であった

こんな日常が続くと思っていた

でも、それは叶わなかつた

ある日城が襲われた

辺りは戦場の後がある

地面が抉られ、壁が破壊され、家具が潰れ、窓が割れてる

僕は地面に横たわっていた

敵は別段、僕達を殺しに来たわけではなさそうだ・・・現に、他の警備兵なども氣絶で済まされている

しかし、なぜ僕だけが起きているかと言うと、それは『紅き翼』での経験故だろう・・・ラカンさんのパンチとか・・・

僕は肩を負傷した

敵の魔法の射手を防御しきれず肩にもらつた

壁に寄りかかりながらも主人の部屋へと行く

テオドラの部屋のドアは特別製で魔法のロックと鍵がどっちともついている、しかも両方とも堅固

ドアの前には男達が集まっていた

それにもしても、あいつ等の服、メガロメセンブリアの紋章入つてやがる・・・

「…のドア、早く開けよ。」

「ちょっと待て！もつちょっとで魔法ロックが解ける！」

「ちっ！早くしろ！他のが起きちゃうだろ。」

「分かってるよ！だから、黙ってくれるかー。」
ドアの前で口論している。

僕は静かに唱える

「リ・ラン・ラ・リオン・リリサン、魔法の射手、連弾・風の矢」

魔力を練り始める

そして、一気に解放する

男共に猛スピードで飛んでいく

そして、着弾

俺は急いでドアに向かい暗証番号を言い（？）ロックを外す、そして、鍵のほうはドアを蹴破った

「テオ！」

「ソラ！」

テオはビルやアベニューの下に隠れていたらしく

子供っぽいな・・・

「リン！」

テオが僕に抱きつき泣き始める

そんな彼女の頭を撫で

「もう、大丈夫だよ。僕が付いてる」

そう言って、彼女と同じ視線になるまでしゃがみ抱きしめる

「よし、じゃ、行かないどー！」

「ど、どこの行くのじゃ？」

「まあ、ここじゃない所

「やつじやーアリカから交渉の手紙が来ておった！その場所に行こうー！」

「分かった

そして、僕らは城の後ろに常備してある飛行船で逃走した

なぜMMの連中がテオを狙つたんだ・・・

第3皇女なんて殺しても意味がないはずだ・・・

まさか、本当の狙いは僕？でも、僕を狙う意味もない・・・

ちなみに、怪我はテオが魔法で治してくれました。
治療は使えたみたいですね。

そして、着いた場所はどつか高い塔
そこに居たアリカ姫が僕の顔を見て

「お主リンか！？」

「え？ そうですけど？ なんで？ 怖いんですけど？」
なんかいきなり、怒られてるんだけど？

「ナギたちがどれだけお主を心配してると思つておるのだ！」
と、言つアリカ姫

「でも、僕テオの執事になつたから・・・それに、この前だつて襲
われたし・・・」

「襲われた理由はお主じや！ お主を人質に取り、ナギに言つことを
聞かせよ」と元老院が企んだりのだ！」

「まじでぇ――！」

僕つてそんなに重要キャラなのか！？ そうなのか！

「す」「ではないからン！ お主そんなにすごい人物だつたのか？」
テオもびっくり、お兄さんもビックリだ！

「いやあ、僕も知らなかつた・・・」

「お主何を呑氣とー！」

その瞬間

バン！

電気が消えた

「うわ、停電…」

ふに

ん？

ふにふに

「んっ！ついで、お主じこを触つておるー」
やべえー、アリカ姫にセクハラしてもうた・・・

「そうじや、リン触るなら妾を触れーー！」

「テオとはもう一緒に寝てるから触るも何もない氣があるー」と、なんかバカな事をしていたが

「もがつー！」

「リモべー！」

「ん！」

全員捕まりました・・・

ちなみに、頭に袋かぶされてますね・・・
そして、縄でぐるぐる巻き・・・

逃げられませんね・・・

「どうせ、僕達は『夜の迷宮』へ行つ場所に連れて行かれるらしいです・・・

輸送中の話

「まつたぐ、誰のせこじや・・・・・・

「こせ、誰にせこでもないと思こますよ?」

「お主のせこじやー

「なぜー・・・・・

「お主が、お主が・・・・勝手にわるからじやーまだ、ナギもつ

!」

まあ、ナギさんなどここに行つても女関係すこな
一国のお姫様だぞ

「ん?ナギにも?まつはー、まれかのナギさんにホの字ですか・・・
頑張つてくださいー」

「何を言つてゐる!我を愚弄するのかー!」

これが、こつもの強気アリカ姫

「まあ、恋愛は自由だと思こますよー。」

「いの――」

暴れだすアリカ姫

「の、お、リン？ホのホと何じや？」

「ああ、好きって事だ」

「では、リンも妾にホの字か？」

「・・・は、そうです・・・」

恥ずかしこよ・・・

「ふんーお主だつてロコロンでまないか！」

「なつーべりでわの情報をー！」

「アルビレオが言つておつた『自分より明らかに小さく相手に恋愛する奴は口利口人と言つのですよ』となー！」

「アルのばかやろーー！らない知識植えるなよーーー！」

『おこー！お前等うるをこぞー！』

と、こんな感じで怒られました・・・

僕達が幽閉されて、1週間位経つたとき

「お主なぜそんなにウキウキしておるへ。」

「え？ だつて久しぶりにナギさんに会えるんだもの…もう、結構会つてなかつたからなあ～」

「そ、ういづば、お主がナギと2人で旅を始めたらしいな？ 本当か？ そつは見えないんだが？」

「本当じやー、リンはナギの一畠田の従者なのだぞ…」

「なぜテオドラが答える？』

「リンは妾の従者でもあるのだー！」

と、カードを見せる

それを見たアリカ姫は

「ふん。ロリコンめ・・・もつすでに、キス済みじゃないか・・・」

「ち、違うーあの時は・・・（酒に酔つた勢いなんていえない！）
まず、ロリコンじやない！ テオはこれでも僕とそんなに年は離れて
ない！」

「年、はな。外見がのあー」と、じーーっとテオを見るアリカ

「アウトじやないか？』

「つむせえーー！」

と、拗ねる僕。

「それにしても、このカードのお主の装備、地味じやの～」

「え？ 装備何？」

そりゃいえば、まだ見てない……

「手袋じゅ……いや、手袋から糸が出るの……鋼線じゅな

「なんか、また使い慣れてないの来ましたね……」

そんな時だった……

ずうん！…

壁が崩壊して、頭を出したのはナギさんだった

「よお、来たぜ姫さん」

「遅いぞ我が騎士。それと古報じゅ」

「なんだ？」

「ほれ

と、アリカ姫が僕のことを指差す

「やつ！」

と、手を振る

「つ、リン！」

す」に勢いで僕のところに走ってくるナギさん

「ナギさん、久しぶりです」

「おう！久しぶりだな！ってお前に何してるんだ？じゃなくて、心配しただろ！」

「はは、すいません。でも、ぜんぜん大丈夫です」

「はつー…さすがは俺の相棒だぜ！」

「相棒…ですか」

「ん、どうしたんだ？」

「いえ、なんでもありません」

相棒…いい響きです。

第7話—再会—（後書き）

テオドリとのカード

武器名：紅い糸

手袋に鋼線がついている。出したり、伸ばしたり、縮めたりできる。

普通に手袋として使用する事も可！

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

第8話—終戦の知らせー（前書き）

“いつも！作者の「じるーん・・・です！」の「じる、なんか眠いんです
よね・・・なんか今は職業体験で楽なのに・・・”

第8話—終戦の知らせ—

「アルさん、この人誰ですか？」
タカミチ少年が問題発言中！

「ああ、彼はですね・・・フフ・・・ただのロリコンです」

「何言つてるんですかアルさんー、ぼ、僕はロリコンじゃありません！で、言つかアルさんテオ見ながら言つたでしょ？」

「はて？何を言つてるんですか？」

「タカミチ少年！僕はリン・イーストだ！決して！断じて！神に誓つてロリコンではない！」

若干タカミチ少年が引いているが

「分かつたかい？」

「は、はい」

「これで、問題なし！」

今日も、もう一仕事した気分だ！

「何だ、これが噂の『紅き翼』の秘密基地か…どんなかと思えれば…
・掘立小屋ではないか！」

「俺等逃亡者に何期待してたんだこのジャリはよ」
ラカンさんただの子供の戯言です…受け流しましょう

「テオ、まだ屋根があるだけましだと思つよ…いつもは野宿なんだ」
そうである、屋根があり、壁があり、雨が凌げ、風が凌げるだけま
しです！

「お主ら本当に『紅き翼』か？」
疑わぬいでください！

「元々、ナギさんと僕が始めた旅ですからね…結果的に功績を
挙げているだけですね」

そして、思い返す、旅の出発点、ウヨールズの山奥

「父さんと母さん、スカーレットは元気かな？」

少し、感慨深くなってしまう…もう、離れて1年くらいがたつ…

これまで、戦つて、戦つて、戦つて…戦いしかしないじゃな

いか・・・

俯く・・・なにか虚しいよ・・・・・・

「心配になつたか?」

ナギさんが会話に入つてきた

「まあ、さつと突然消えて心配されてるでしょ」「…
しかし、ナギさんのほうを向くとナギさんはやうに居なく、アリカ
姫に連れて行かれた

「ああ・・・頑張つて下さい、アリカさん」

誰にも聞かれずその台詞は宙に消えた

見ると、ナギさんがアリカさんの騎士になつた模様だ、それを僕に
だつこされているテオが見ると当然・・・

「リンは妾の騎士か?」

と、聞くわけですよ・・・

「僕強くないから、執事ですね・・・」

「別に弱くても良い・・・傍にいてくれるだけで・・・妾はそれだけ安心できるのじや」

そう、優しく言つてくれるテオが愛おしく

「ありがとうございます」

と、言つておでこにキスをする

「う、うむ。では、リンは妾の騎士じゃない
頬を染めながら言い放つ

「はい、マイマスター」

テオが顔を僕の胸に埋める
その顔は笑顔だった

！ ！ る じ 感 を 線 視 か 何

「いや～、ラブラブですね」

「やつじやな」

「ひゅーひゅー」

「やつたなリン！」

「やはり、ロリ！」

「私は、私は！」

「見てはいけないぞタカミチ」

「なぜですか師匠！？」

上から、アルさん、ゼクトさん、ラカンさん、ナギさん、アリカさん、詠春さん・・・そしておっさんとタカミチ少年だ

「見ないでください！ほら、もうテオが茹でタマの用に真っ赤に！」
と、テオはもう湯気でも上げるんじゃないかと思つぱぞ真つ赤になつていた

「いえいえ、お似合いだと思つますよ？じゃじゃ馬な皇女に面倒見
の良い執事・・・フフフ非常に良い」

アルがコワレター

「まあ、なんにせよ祝つてやる」

ゼクトさん・・・あなたつて人は、なんて良い人なんだ

「ああ、自己紹介忘れてた。俺はガトウ・カグラ・ヴァンデンバー

グだ。 よろしくな」

「おまえがやめようってお願いしますー。」

この人はまともだ！

「あ、ああ

若干引いてしまつたがトウさん……あなたは悪くないと思う……

全員集合した後は、まあ、僕たちは四面楚歌状態
まず、仲間を増やしながら、戦線に復帰していきました。

仲間の増加。これは、アリカさんやテオがやつてくれました。戦線の復帰。元々バグが足りているので無問題！

え？僕？僕はテオと遊んだり、修行したり。

最近は、瞬動術とかがんばってるよ？あと鑑線も！

「リンさんって・・・弱いですね？」

「ひどい！少年にまで言われるなんて！」

「いや、だって他のメンバーがあれじやないですか」

「タカミチ少年なんて、感卦法も使えないじゃないか！」

「じゃあ、リンさんは使えるんですか！？」

「使えるはずないだろ？！」

「…………」

「ほ、僕は元々非戦闘員に近いんだ。魔力も平均よりちょっと上位だし・・・」

「仮にも皇女の騎士でしょ？」

「くっ、そこまで僕を虜めたいのか！そんなんだなー僕は怒ったぞ！タカミチ少年勝負だ！」

「受けて立ちますよ！」

そして、僕とタカミチ少年の戦いが始まった・・・

SIDEタカミチ

「リンさんって・・・弱いですね？」

僕は、リンさんとの修行中に言つてしまつた・・・いつも思つてい

たこと

なぜ、この人は『紅き翼』の一人なのだろう？
顔も、魔力も、趣味も別段目立つわけでもない……

「ひどい！少年にまで言われるなんて！」

「いや、だつて他のメンバーがあれじゃないですか」「ラカンさんとナギさんはバグだし、ゼクトさんと師匠は強いし、詠春さんは剣術使えるし……アルさんは博学だし（勘違い）」

「タカミチ少年なんて、咸卦法も使えないじゃないか！」

「じゃあ、リンさんは使えるんですか！」
ちょっとカチンときました

僕より年上の癖に、年下を大切にしろ！

「使えるはずないだろ？！」

「…………」

そこ今まで、堂々と言わると悲しいのだが……

「ぼ、僕は元々非戦闘員に近いんだ。魔力も平均よりちょっと上位
だし……」

「仮にも皇女の騎士でしょ？」

そう、この人何気に、ヘラス帝国第3皇女テオドラ様の騎士、基、

恋人なのである！

「くつ、そこまで僕を虜めたいのか！そつなんだな！僕は怒つたぞ！タカミチ少年勝負だ！」

「受けて立ちますよ！」

いきなり切れたリンさんが襲い掛かってくる・・・

戦いが始まった・・・

しかし、そこに動きはない

ジリジリと距離が狭まる感覚、チリチリと感じる相手の殺気・・・これが戦い・・・

SIDE OUT

SIDE LIN

最初に動いたのはリンだった

立った状態からの瞬動、ゼロからトップスピードへの瞬間的飛躍
僕はそれを目指していた

この「じろ」考えていた・・・僕の力、僕の戦い、どうすれば相手に勝てるのか・・・

そこに答えはなく、ただ考へが浮かんできた

僕の戦いは、僕だけのもの
いくら、まわりを模倣しようと、いくラカンさんやナギさんを見習つても

それは、僕ではない・・・そして、僕の本来の力でもない

僕の戦い

それは

意表をつく、戦力より戦術

まだ完璧ではない・・・瞬動

少しの溜めを必要とするが、今のタカミチ少年になら十分通用する

「フツ！」

行動を開始した

立った状態からの瞬動は成功、案の定タカミチ少年は驚いて行動が遅れている

「くつ！喰らえ！」

タカミチ少年が、師匠ガトウに教わった無音拳を無闇に放つてくる

しかし、タカミチ少年の拳はまだ遅い、素の状態の僕でも見切れる！

「らあ！」

また瞬動を使い、次はタカミチ少年の進行方向に移動

タカミチ少年の移動エネルギーと反対方向のエネルギーのパンチを放つ

これで、威力アップ！

タカミチ少年が吹っ飛ぶ、って言つても3mくらい

「どうだ、参ったか?」

「くつ・・・まさか、瞬動ができるなんて思ってませんでした・・・
」
「なかなか言ってくれるじゃない?」

「タカミチ少年の敗因は、僕の初動への動搖からの無闇な攻撃だね。
いつでも冷静でいるよ!」

「ま、まさか、あなたに戦い方を教わるとは・・・

「僕これでも、結構戦場に立ってるんだよね?」

今思えば、なんて無謀だったんだろ?・・・死にかけてたな・・・

「ま、精進したまえ少年!」

そして、僕は修行を一時中断した。

SIDEタカミチ

「師匠・・・実は今日・・・リンさんに負けてしまいました・・・

屈辱です!修行付き合ってください!」

僕は今日のリンさんとの戦いを思い出す

僕に教えてくれた事実、それはありがたい

でも、でも、『紅き翼』最弱のリンさんに・・・

「いや、タカミチ、おまえは負けて当然だろ?」

「な、なぜですか!-?」

「お前なあー、『リン・イースト・ナギとか初期からの付き合いで、魔法力などは平均よりやや上』、今のお前じや勝てない」

「だから、修行!」

「それにだ・・・奴は仮にも、英雄の一廊だぞ? 超えてきた場数が違いすぎる」

「で、でも-」

「タカミチ・・・強さつてのはな、力だけじゃないんだ・・・用は、相性と戦いよつだ」

そう言つて、師匠は仕事に戻つてしまつ

戦いよつ・・・相性・・・
力だけじゃない・・・

わけが分からぬ・・・

「わけ分かんねえーつて顔してんの?」

「ら、ラカンさん!」

いきなりラカンさんが現れた

「まあ、今のお前じやリンには勝てないだろ? そりや、当然だ。あいつだつて俺達と戦場に立つてたんだからな。」

「そ、それはそうですが……」

「でもな、勝つ方法はある。」

「本当ですか！？？」

「ああ、どんなことも、戦術、相性、力、どんなものでも吹き飛ばせるまでの理不尽な強さ。それが答えだ」

そう、言ってスタスタと歩いていってしまう。

理不尽なまでな強さ・・・

そこに僕は到達できるのだろうか・・・

この僕が・・・

SHDEOUT

SHDEリンク

時が少し経ち、僕たち『紅き翼』も味方が出来始めた
それから、また時が経ち敵を追い詰めるところまで来た
『完全なる世界』、敵の名前だ。

そもそも、最終決戦があるだろうと言われているが、果たして僕が参戦するのか？

きっと、皆に言つたら別に行かないと言われるだろう
でも、僕は行く、僕だけ行かないのは僕が許せない

そんな感じで日々をすごしていると

テオがいきなり散歩に誘ってきた

今は森の中には、少し向こうには崖があり、そこが目的地だ
青く茂っている木々、踏み心地の良い苔、鳴いている鳥、いや、怪
鳥・・・

「 」

今テオはいつも通り僕が肩車している

「 テオ、何か見える?」

「うむ、木が見えるぞ!」「
そりや、見えるだろ・・・

「もうそろそろ森を抜けて崖が見えるころなんだけど、って・・・
あそこですね」

木々が少なくなり、崖が見え始める

「おお~」

そう言つてテオが僕の肩から降りて走り始める

「早く来るのじゃ!」「

テオが先に行つてしまつ

「はいはい

そつと置いて、テオの後を追う

崖に着くと、そこから下を見てみると

下が見えない・・・これから、魔法世界は・・・嫌なんだ・・・

「おお～、すげー深いぞ？」

「まあ、下が見えなーくらこですからね・・・落ちたら死にますね・

・」

崖から30㍍くらい離れた場所に座る

「あのや、トオ・・・なんで今日は突然散歩に?」

「お主と一緒にきりになりたかったんじゃ・・・
テオが少し俯き、呟く

「こつも一人じゃないですか?」

「違ひ、こつもはタカミチやナギや筋肉ダルマが近くにいるのだ

「で、なんで僕と二人きり?」

「お主は・・・戦争に出るごじやうへ..」

「まあ、出ますね」

「戦場は危ないのじやうへ..」

「まあ、当然」

テオが黙ってしまった

しかし、決心したのか目を合わせて

「それが、最終決戦となれば……死んでしまうかも知れない……
じゃから、妾はお主に行つてほしくないのじゃ！」

「テオ……」

きつと、皆の前では弱みなど見せたくないのだひつ……特にラカ
ンには

「分かつてある、お主は『紅き翼』の一員……仲間と一緒に戦い
たいのも……それでもじや、それでも妾はお主を失いたくないの
じや……」

一線の涙が落ちる

今、僕の前に居る女性は僕のことをこんなにも想い、守りつとして
くれている

でも、僕は何をしただうつか……僕は彼女を守ったか？いや、守
つていないと……

それなら、恩返しをしよう。僕もこの世界を救う手助けをしよう

「ありがとうテオ……でも、僕は行くよ……『めん……』
彼女の事を抱き寄せる

「いいのじや……」

彼女の頭の後ろに手を当て、頭を自分の胸につめる
乙女の涙は見るものじゃない……

「リン、妾と約束できるか？絶対戻つてくると……戻ってきて妾

を抱いてくれると・・・

「約束するよ。絶対戻つてくれる。君が安心しきるまで暫の傍にいる

よ

「では、約束の契りじゃ

そう言って、彼女が顔を近づけてくる

僕はそれを拒むことなく、受け流す事も無く受け止める

彼女の温もりが、想いが、不安が
感じ取れる、流れてくる

胸が熱くなり、彼女がより一層愛おしくなる

「ん、ふつ」

唇を離す

でも、彼女は放さない

ずっと、自分の手で抱いていたい存在・・・

・・・・・

「すう、すう」

時が進み、彼女は僕の手の中で眠りに落ちた

頭を撫でる

「ん・・・リン・・・・」

目尻に少し涙が浮かび上がる

「テオ……ごめんね……」

そう言つて、彼女を抱き上げ、皆の下へ戻る

テオを抱きながら帰ると、皆に色々言われた
それが、日常で、ずっとそのまままで居たくて、そのために僕らは戦
ついて……

そして、数日後テオとアリカさんは本国に戻り明日の作戦の準備の
最終段階をし始めた

「いよいよ明日だな……」

ナギちゃんが僕に言つた

僕たちは今夕日を眺めている
明日守るもの……

「明日……ですね……」

「リン……別に来たくないんなら「行きます」「でも……」

「僕は行くと決めたんです……何のために覚悟を決めたんですか？」

「でも、お前は「弱い……ですか?」…………そうだな……」

「それでも、いいんです……別に、活躍しようなんて思つてないです、重要なのは、僕が皆さんと戦場に立つこと……」

そして付け加える

「それに、行かなかつたらテオが見せた涙の意味がありません……そんなのひどいでしょ?」

そう、テオは僕のために涙を流してくれた

「もうだな……分かった、もうこれ以上は言わねえ、でも、リン。無理だけはしないでくれよ」

「僕が無理をするように見えますか?」

まあ、ナギさんとテオのためならしますけど

「見える」

「そうですか……分かりました、無理はしません。でも、それならナギさんも約束してください……生きて帰ると」

「あつたりめえだろ。俺を誰だと思つてるんだ?俺様はナギ・スプリングフィールド」

「『最強の魔法使いだぜ』（ですね）」

二人同時に言う

一人とも田を合わせ

「「あははは」」

笑う

僕は願った、この笑顔が最後にならないように
本当はそんなことしなくても彼を信じていた
でも、こんなこともやってみたかった
これで、彼が生きる可能性があがるなら・・・

次の日、決戦当日

「不気味なくらい静かだな奴等」

「なめてんだろう？悪の組織なんてそんなもんだ」
その認識は偏見だと思います！

「はあ、やつとここまで来たんですね・・・もうそろそろ旅も終わ

りって事ですね・・・

少し感慨深く独り言を言つてみた

「何を言つてるんですか？人生と言つのはばつと旅ですよ？」
しかし、僕の独り言はいつも誰かが入ってくるようだ・・・いい事
言づなアル

「既にタイムリミットだ」

「行くぜ！」

らしいですね・・・いっきますか！

ナギさんの号令の下僕たちは飛び出した

中はもう戦場と化していた

皆が皆敵と戦つている

その中僕は・・・

『墓守り人の宮殿』内部へと侵入していく

僕は儀式まで行き、発動までの時間を計算する

そのため、通信機を全員が所持している

内部は入り組んでいて、やつとの思い出中心部、世界を無に帰す儀式の場所へとたどり着いた

しかし、そこには一人の人が立っていた
全身を黒に染め、黒のローブをなびかせた黒い人
上でのすごい振動が鳴り響き
その黒い人も転移をした

儀式が行われる球体のところまで急ぐ

その中に、少女が独り居た、黄昏の姫御子だ

「う・・・」

大分体力が奪われているようだ、生氣の無い表情、ぶら下がっている
しかし、僕の魔力ではこの球体から彼女を出す事は不可能

「大丈夫だ！もうすぐナギさんたちがくるから！」

そう言って彼女を励ます

そうすると彼女も少し生氣の戻った表情を表す
どうやら相当ナギさんを信じているらしい

儀式の魔力の練り具合を調べ、大体の発動時刻を計算する
残り50分

「皆一残り50分で発動するー早くしてくださいー！」

『早くって言われても、今戦闘中なんだ！』

「わかりました。僕も上に向かいます」

『無茶するなよー』

「何言つてゐるんですか？僕一人だつて盾にくあらいにはなりますよ？」

『だから、それが無茶つて』

無線を切る

姫御子のほうに向き直り

「『メンね・・・僕も上に行かな』と・・・でも、絶対助ける」

「は・・・やく、はやく行きなさいよ」

驚く事に彼女は喋った

力を振り絞り、それが小さな声でも、僕を励ましてくれた

「あ、ああ。行つてくるー」

僕は全力で走った

皆の下へ、人の明日を守る場所へ

「アルさん！」

「おや、リンではないですか？」

「終わつたんですか？」

「あとはナギだけですね」

「 もうですか・・・」

やつして、ナギさんの方向を見る

しかし、違和感に気付く
何か、向こうのほうから感じるのは
どう黒い・・・殺氣

ナギさんが白髪を待ちあげている
やばこー！今は油断している！

「 間に合へー・アデアットー！」

「 な、何をしているんですかリンー！」

「あああー！」
一気に魔力を解放する
それをすべて、足に溜め
一気に爆発させる

瞬動！

いきなりナギさんと白髪の間に現れ、ナギさんがびっくりしている

「 り、リンーお前何をー！」

「 ふつ、いまさら遅いー！」

向こうの彼方から黒い光線が飛んでくる

「『『我的盾、我を害するものすべてを弾くべー』』

今までに最硬の結界を張る

黒い光線が白髪を貫通

結界に着弾、そして、少し反発して勢いがグンと下がる

パリン

しかし、止まることがなく僕のわき腹を貫通、そして止まる

「リソー。」

・
「運が良かつたね、千の呪文の男・・・でも、絶望はまだ続くよ・・・

白髪が消え、また向こうの方からやつせと比べにならないほど光
線が飛来してくる

そこで、僕の意識が落ちたいく・・・
まだ、僕はいつてはいけないのに・・・
それでも、僕は守れたのだろう・・・
大きなものでなく、別にナギさんにとってはただの負傷でも・・・
僕はナギさんの傷一つ守れたんだ・・・
そのことが嬉しい、そのまま意識を手放した・・・

第8話—終戦の知らせー（後書き）

もう、次からハッピーとか思っちゃいけません！まだ、不幸は続く
と思っていてください！そして、このじろほかのssのほうも更新
しようかと思っています！

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

第9話—Guardian souー（前書き）

いつも、作者です。今回もふがいない文章を今まで読んでくださったかたがたに感謝を！

第9話—Guardian Soul—

「ぐう・・・」

瞼が重い、目がダルイ、体の芯から寒い

ここはどう?

手が暖かい・・・

瞼の向うは光で溢れている

でも、僕の体が動かない・・・

それから、どれくらい時が経ったのだろうか
まだ体の感覚が取り戻せない中、僕は必死に瞼を開けようとしていた

そして、開いた

開いた先に見えたのは

「知らない天井だ・・・」

「リン！」

聞こえてきたのはテオの声

「て・・・お？」

あまり、上手く喋れない

「すこし待つておれ！」

そして、テオがどこかへ走っていく

「？？」

なにがなんだか分からないです。

そして少しの間ドアの向こうでドタバタしているといきなりドアが破られた・・・リアルに破られた・・・

「リン！」

そして入ってきたのはナギさんだつた

「ナギさん」

僕は腕の力で体を起こし壁に寄りかかり上半身を起こす

「リン、大丈夫か！？」

「ええ、大丈夫ですけど？何かあつたんですか？後、ドアを蹴破つたらダメですよ？」

「え・・・リン、覚えてねえの？ほら、最終決戦とかさ？すこはいつもの事だ！」

「最終決戦」

・・・は！？思い出した！

たしか、僕は儀式場まで行つて、上に戻つて・・・

黒い光線防いで・・・防いで・・・防いで・・・？

「あれ？あの後はどうなったんだ？」

「だから、あの後お前が重傷を負つて気絶しちまつたんだよ。それで、まあその後色々あつて、敵の親玉を俺が、倒したんだ」

「へえ、さすがナギさんです」

そんなことがあつたのか・・・

まさか、あのゼクトさんが・・・いい人だったのに・・・

「それでさ・・・リン・・・あの時はありがとな？」

「いえ・・・守れて本望ですから。感謝される事じゃありません。

僕も今までナギさんにたくさん守つてもうございましたから

「そつか……そつか」「おう、リン一起きたのか…」「な
いきなり乱入ラカンさん

「おい！ラカン！何割り込んでんだよ…」

「ああ！別にいいだる、どうせお前が話したってかわんねえよ…」

「まあまあ、二人ともやめてください」

「ちひ、リンがそう言つた」

「ま、今日はいいか。で、リンおめえ大丈夫か？」

「ええ、もう大丈夫ですよ。まだ、感覚が曖昧で、立ち上がりませ
んけど。後10分くらいしたら歩けると思います」

「そつかそつか…まあ、リンも起きた事だし、これで一件落着だな
！」

ゼクトさんが死んでしまいましたが

「そつか…ですね」

少し、悲しいような…寂しいような…
これは思い過ごしだったが…

「これで旅を終わりで、旅の仲間は解散ですかね・・・」

「は？何言つてんだリン？まだ、戦後で処理が終わってないからな。色々飛び回つて後始末だぜ？」

「じゃ、じゃあまだ笛で旅できるんですか？」

「いやあ、どうだらうな？特にお前つてじゅじゅ馬の騎士じゅね？付いてなくていいの？」

「あ・・・そうでしたね・・・ん、迷つなあ・・・旅はしたいけど、テオともいたいし・・・テオはヘラスから離れられないし・・」

「まあ、心配するなよ。お前は、じゅじゅ馬を守つてやんな。その間俺達が頑張るからよ」

僕が結論を出す前にナギさんが結論付ける

「やう、ですね。後始末の仕方はそれぞれですか。僕はテオの補佐とかで頑張ります」

「そうじゅー」

その後も遅れて入ってくる詠春、抱きついてくるテオなどで騒がしくなった

そして、式典のために部屋を出て行くときのテオの顔は『また後で会いに来い』と言つ感じだつた。

式典に出たのは、僕、ナギさん、ラカン、詠春だった
ほかのメンバーは仕事だったり、雲隠れだったり

周りに何千の大衆が群がり、僕たちはしかれているカーペットの上
を歩いていく

アリカ姫の下に

いざ着くと、僕、ラカンさんと詠春さんのときは早々に済ませたのに
ナギさんのときだけなんだか見つめあつたり・・・見せ付けないで
ください・・・

そんな愉快な時間を過ごしている時だつた

なぜ聞こえたのか、なぜ分かったのか。詠唱が聞こえてきた・・・
『来れ、千の口リ、我が欲望をもつてこの者を我が奴隸にせよ口リ

奴隸』

どこかで、聞いたことがあるような呪文

それと同時にダミーとして放たれる魔法の射手

振り返るとそこには数人のロープを深く被っている怪しい男性の集団が

こちらに、杖を向けている。いや、ナギさんに向けているこの大衆の中誰もが気付いていない。この膨大な声のなか誰もがその詠唱を聞き逃した

もとより、誰もが知つていなさそうな呪文だ

もう時間がない、既に魔法は放たれている
どうせこのお祭り騒ぎのよくなときに魔法の一つか二つかなど気にする事ではない

だから、誰もが見落としていた。当たつても、ナギさんだ。魔法の射手くらいなら素でも大丈夫だろう。
でも、これは呪い。防いでも意味がない・・・避けないと。しかし、今は避けたところでその後ろに居るアリカ姫に当たつてしまつ。それもまずい。

よつて、選択肢は一つ

一番迅速かつ、助かる可能性がある方法

それは、自己犠牲

僕は瞬動を発動

景色から僕が搔き消えた

そして、現れた先はナギさんの背中

「つで、リン！？お前！？」

ナギさんは気付いていない今近づいている魔法は普通でない
魔法の射手なんかではない

魔法が両方僕に着弾する、抉られる肉、流れる血
明らかな致命傷、これは、もう・・・

そして、僕は魔法を受けながら詠唱する

『魔法の射手！風の1矢！』

狙いを定め無詠唱で。

矢は飛んで行き、呪いを放つた男の頭部に直撃
一瞬にして男の命が刈り取られた

「ぐう！」

胸の辺りが熱い

鼓動が早い

気が動転する

息が荒くなり、膝をつく

「おい！リン！」

ナギさんが僕の肩を持ち揺すつてくる

「なぎさん・・・あそこのロープの集団・・・」
そして、力を振り絞り手を上げ指差す

「分かった！」

ナギさんがアリカさんに言い、アリカさんが警備兵に

そして、その集団はすぐに鎮圧された

「リン！大丈夫か！？」

「リンー」

「けど、リン。魔法の射手くらいだった俺大丈夫だぞ?」

「ナギさん・・・あれば魔法の射手じゃない・・・呪いです」

「なつ!呪いつて!じゃあ、お前どうなるんだよ!」

「見てれば、分かります。があ!」

そして、煙を上げながら僕の姿が見えなくなつた
けど、口の部分はあるけど、術者は死んだから奴隸の部分はない
んだろうな・・・

傷が思つたより深かつたのか、意識が朦朧とする
なんかこれデジヤヴだな・・・僕復帰してから倒れるの早くね?
いや、デジヤヴじゃないな・・・今回は死んだな・・・

「え? リン、どこ行つた?」

最後に聞いたのはそんな言葉だった・・・

そして、また目覚めた

あの天井、あのベッド、あの温もり
でも、今回はすんなり起きた・・・

「うつ」

「リン！」

またテオです

これはまさかのループか？

「ナギ！リンが起きたぞ！」

いや、しかし体に違和感がある、小さいだけでなく、何かが違う

「マジか！おい、リン！大丈夫か！」

「大丈夫です。と、いうより何で大丈夫なんですか？明らかに死んでたんですけど・・・」

「そ、それは・・・」

ナギさんが黙つてしまつ

「悪魔の血だ」

ラカンさんが答えてくれた

「悪魔の血？」

「そう、悪魔の血。それをお前に入れることで、バカみたいに再生する悪魔の回復力ができるってわけ。」

おお、そんな事が出来たのか

「まあ、思い付きだけどな」

「はあ！僕実験されたんですか？」

「いや、成功の見込みはあったから、実験ではないな。まあ、お前は回復したが、それと同時に長寿になり成長速度も遅くなっちゃったわけだ。しかも、見た目餓鬼だし。また餓鬼からやり直しだな！」

「笑わないでくださいラカンさん！」

「なんか、俺つて迷惑かけてばっかだな・・・ゴメンなリン」
ナギさんがし�ょげてます

「いえ、僕のほうこそ迷惑かけてますよ」

「でも、お前。この前も今日も守つてくれたし」

「それが僕の決めた事です。この身が滅びようとも、僕が守ると誓つたものは」
ナギさんとテオを見る

「守ると決めたんですね」

そして、皆が黙つてしまつ

「じゃ、じゃが。これで、もっと毒とこれをやるじゃねー。
と、何の話か分からないです

「やうなるな
ラカンさんが分かってる

「やうだな
ナギさんも

「何の話ですか？」

「いや、お前の話
だから、僕の何の話？」

「お前、子供になつたし、成長速度も下がつたから・・・じゃじゃ
馬と回じへりいだな」

「くそ、やうなんですか
ああ、だからもつとテオと居られると

「なんだか、やうなると呪じに感謝ですね？」

「いや、それはないだら（じやう）」

「ははは」

笑うナギさん
やうぱし、いろんな感じじやないと

「悲しんでるナギさんなんてナギやうじやないですから
誰にも聞かれる」となく言った

ちなみに、僕の容姿は9歳で2年に1歳くらい年を取る

しかし、悲劇は続いた

オステイアの崩落

その責任を負う事になったアリカさん「厄災の女王」と名づけられ2年後に処刑が決まった

そのころナギさんは戦地を駆け抜け命を救っていた

僕はと言つと、小さくなつてもテオの横でテオの補佐をしてくる

処刑まであと10日

ナギさんは行動を見せていなかつた

「テオ・・・少し出かけてくる」

「リン?ナギのことか?」

「はー・・・・」

「つむ、行つてくるのじやー！」

それから、僕は3日かけてナギさんが居る家へ到着

「コンコン

「誰ですか？」

タカミチ少年も居るようだ

「僕です、リン」

ドアを開けた、タカミチ少年が僕を見て

「コンさんー！」

「コンだとー！」

そつ言つて飛んでくる詠春

「久しぶりじゃねえか！」
と、歓迎するラカンさん

でも、ナギさんが来ない

「ナギさんはどうですか？」

「ああ・・・会わないほうが良いかもしけないぞ？」

「いえ、それではここまで来た意味がありません」

「・・・あつちの部屋です」
と、教えてくれるタカミチ少年

「ありがと」

僕はその部屋へと歩み寄る

ドアを開けるとそこに居たのは、昔の英雄とは思えないナギさん
目に生気が感じられず、希望も夢も感じない
そこに居たのは英雄でなく、一人の脆い人間だった

「ナギさん」

「リンか・・・

しばし沈黙

「ナギさん、あと7日でアリカさんの処刑です」

「ああ」

生返事だ

「ナギさんは何もしないんですか?」

「できるかよ・・・あいつは俺に言つたんだ・・・『女一人を救つ
ている暇があるんなら、一人でも多くのいわれなき不幸に苦しむ無
辜の民を救え』って」

「それで、あなたは良いんですか?」

「ああ・・・いい・・・」

腹が立つた

僕の知る彼ではなかつた
もう、面影すらない

「ナギさん・・・あなたがそれでいいはずない・・・」
そして、ナギさんを殴る
初めて、彼を殴つた

「なん・・・だと」

「あなたはバカだ！あなたは分かつていない！アリカさんがどれほどあなたを求めていたか！」

「言ひな・・・」

「いえ、言ひます！何が英雄ですか！何が千の呪文の男だ！一人の女性も救えず、自分の心に正直にもなれず！」

「だまれ！」

ナギさんが僕の胸ぐらを掴む

「黙りません！あなたは僕の知るナギ・スプリングフィールドじゃない！僕の知つてる彼はもっと頼れて、もっと輝いて、もっと、もつと」

「もつと、強い男だつた！」

「やうか……けじな、リン。お前の知る俺はもう居ないんだ……」

「そつ置いて、ナギさんが僕を放し、また元いた位置へ戻る

「俺は、弱いんだ……」
弱くはき捨てる

「あなたには失望しました」

僕は部屋を退室した

「だめだつたろ?」

ラカンさんが言つ

僕はそれに答えずに一つのカードを渡す

「もし、もし、彼が本当に救つ氣があるのなら……」「連絡してください。協力します」

僕の連絡先だ

「ああ、もしそうなつたらな

そして、僕はそこを後にして、今回は2日で戻る

「リン、お帰りなのじゅ。で、ビツビツもつた?」

「あまり、見込みはなさそうですね・・・でも、僕は最後まで彼を信じます」

処刑まであと5日

SIDEナギ

俺は今猛烈になやんでいる

アリカは救いたい、でも、あいつの言つていていた事もやつてやりたい・

・
そんなことで悩んでいるリンが訪ねてきた

あいつに色々尋ねられ

リンが怒った、あのリンが怒った

「もつと、強い男だった！」

心が痛む

救いたいという想いが膨張する

でも、それを抑える

今の俺に力がないから

「俺は、弱いんだ・・・」

そう、俺は弱い

こんなにも弱い人間だつたんだ・・・

あいつが去つた後も俺は悩み続けた・・・

アリカがどれほど俺を求めていたか・・・
そして、俺もあいつを求めていた

そんなこと言わなかつたが、俺は自然と感じていた
あいつといふときの感覚、なにか暖かく鼓動が早くなる

あの感覚を味わいたい

またあいつと出かけたい

思い出が暴走する
目から涙が流れる

そして知つたこの涙の意味を

俺は悲しかつた、あいつが死んだら悲しむと

今になつて分かつた

だから、俺は俺のために

あいつを救おう、あいつに降りかかる火の粉は俺がすべて払おう

リンが今までこんな思いで守つていたのだろう・・・

あいつの凄さがわかる

あいつは2回しか俺を守らなかつた
でも、2回守つてくれたのだ・・・

なら、俺も守る・・・・・リンほど上手くないけど
できるかぎり頑張つ

俺はあいつを

救う！

S H D E O U T

処刑当日

そこには幾千の人が集まっていた

警備も万全、なんだかもう戦争おこしそうな勢いで

その中意を決して行動をする者たちが居た

アリカさんが谷へと落ちていく

「よおーし、こんなモンだ！」

「貴様何者じやー…？」

そしてラカンさんが力を居れ特注（時間掛かった）を一気に壊す

「「千の刃！ジャック・ラカンだと！」」

そして、次に詠春、アル、ガトウと出でくる

そして僕も降りる

「「「誰ー？」」」

「はあ・・・」

「まあ、いいじゃねえの『護り人』さんよ」

「ラカンさん、その名前やめてください。恥ずかしいです」

「いいんじやないか？お前はナギの危機を一度も救つたんだ。誇りに思え」

「わかりました」

詠春さんの言つた事を納得する

そして、話に出てきたナギさんまと並つと・・・

谷の下で怪物たちと鬼ごっこ中だらつ

「じゃ、じつも始めますか？」

「「「おひー。」」」

「行きますーアデアツトー』『我守らん。我が大切な者達を。』『我
は偏在する、数多の敵を止めるため』『
身体強化を全員に施し、自分の分身を作る

「僕の分身はこじとなったときの盾なりなんでも使ってくださいー。」

「さすが『護り人』。自己犠牲だなwww

「いや、分身だし」

それから、僕たちは暴れた

いや、主にラカンさんが暴れた

僕はほとんど戦力外、時々不意打ち程度で

処刑も無事終わり、ナギさんとアリカさんは無事結婚したよつです
それで、これから一人の新婚旅行として詠春の故郷の旧世界の京都
に行くらしいです

まあ、僕は行けませんけど、テオがこっちに居て、忙しいし

「それじゃ、僕戻りますね。皆さん元氣でー。」

「ああ、お前もなーじゃじゃ馬によろしくいつといてくれー。」

「はは。分かりました!」

そして、テオの元に帰る
僕の最愛の者の元へ

きっと、これからずっと一緒にいる存在
その存在のありがたみ、暖かさ
忘れてはいけない、人は一人で生きていけないのだと・・・

第9話—Guardian soul（後書き）

よんでもくれてありがとうございます。

リンの年齢操作に『ご都合主義！』とか突っ込まないでください！
本策で30代のおじさんを書きたくなかった作者のわがままです！

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

第10話—僕が麻帆良に会ったまで—（前書き）

なんだか最近眠い作者『こうーん』です。 東鈴ってなんだか読みにくいですね？

第10話—僕が麻帆良に会ったまで—

あの処刑からずでに11年の年が経っていた
この11年間で色々な事があった

テオが襲われたり、襲つたり

テオの成長具合にはびっくりですね

今は大体13・14くらいで出るところかなと感じます。スタイルは抜群だ

まあ、そんな彼女を彼女に持つ僕は同じ14・15くらいで身長は173くらいですね

魔力も減つてから増え始め今では元の魔力の3分の2くらいに回復している

ああ、あとラカンさんに無理矢理拳闘士の大会に出されたり・・・
後、ナギさんが死んだという噂もwww
そんなあるときのことだった・・・

「おい、リン！ナギから手紙が来てある！」

「まあ死んでないと思つてしまつたが・・・」

「ほれ、早く読むんじゃ！」

急かすテオ

「はいはい

そして、手紙の封を切つて読み始める

「ふむふむ・・・」

そして、読み終えてしまう

「どう、どんな内容じや？」

「自分の息子『ネギ』を頼む、と書いてありますね。故郷に今居る
よひでや」

「そ、そつか・・・で、行くのか？」

「当然行かないと行けませんね。親友の最後の頼みです・・・だから、少しの間辛抱していってください・・・」

「わ、妻ももう供ではないのだ!それくらい出来るー!」

「それでは、支度をしたらすぐ出るので」と、言つて彼女を抱き寄せて唇を奪つ

「げ、元気でな

送り出してくれるテオに手を振り

「手紙とか送るからー!」

新たな旅が始まつた・・・

僕が付いたのはウェールズの山奥

たしか5年前に一回訪問した

その時に、親に自分の体のことを説明してあるし

そして、まず目指す先はナギさんの親戚の家

ネカネ・スプリングフィールドの自宅

彼女はいつも魔法学校に行つていて家に居ないが、今は休み中だから居る

自宅は人に聞きすぐに見つかった。

中からはネカネと思われる女性の声と、ネギと思われる少年の声、
そしてもう一人女の人のものと思われる声が聞こえてくる
まあ、僕は会話なんて構わずノックをします

「はい、どなたでしょうか？」

ネカネさんがドア越しに話しかけながらドアを開ける

「ここにちは、僕はリン。リン・イースト」

「り、リンさん！？なんでこんなところに？」

まあ、僕も知られているようだ・・・

今でも、平凡で覚えてくれない人も居るけど

「ある人物に頼まれてね。君達の世話をというか、なんか任されたんだ

まあ、具体的に何をやるんだろう？

「どうせナギさんは遺産とか残してないんだろう？僕が生活費を持つよ。大変だな…」

「いえ、でも」まあ、リコは年上に頬りなさい。「年上？」

「あれ？聞いてないの？僕ナギさんと一緒に暮らしてないよ？だから今・・・32歳？それくらいいか

「ええ！でも、あのビーツ見ても一〇代ですよ~」

「まあ、色々呪いでねー!まあ、それはそうとあらがネギ君？呪いでねー!説明めんビー！」

「ええ」

「また随分と父親に似てるね」

「でも、性格は真逆ですよ」

「へえ、まあ、やつか。ナギさんだったら今頃殴りかかってるね」

「え？」

「まあ、その話は置いといて。ここからはネギ君。僕はリンツて言うんだナビ、君のお父さんの親友だ。」

「ほんとーお父さんの知り合いで。ねえ、お父さん生きているの？」

「ああ、生きてるよ。ナギさんが死ぬはずないだろ老い以外で」

「じゃあ、いつか会える?」

「会えるんじゃないかな?・ネギ君が頑張れば」

「ほら!・アーニャー・父さんにはまだ会えるって!」

「そんなの嘘に決まってるでしょ!・こんな、ネギより魔力低そうな男の言つこと嘘に決まってるじゃない!」

「アーニャちゃん、そんな」とちちやだめよ?彼は紛いもなく英雄ナギの最初の従者のロン・イーストよ?」

「で、でも私でも倒せそなひょる男じゃない!」

なんか、もう死のうかな・・・確かに、ナギさん譲りのバカ魔力のネギ君より魔力低いけどさ・・・

俺これでも、年上だよ・・・

「あ、ははは。言つじゃないか少女」

「私少女じゃないわ。『アーニャ』ってちちちゃんと名前があるんだから!」

「分かったよ、アーニャちゃん。まあ、あまりネギ君を虐めないでくれよ?」

「虐めてなんかないわよ!」

「あ、あの?リンさんほどに泊まつていくんですか?」「

「ん?僕?僕[元々]の村に居たから」に家族いるよ?」「

「え?ええ!—!そんなの初耳ですよ?」

「マジで?あっちの角を曲がった突き当たりにある家だけど

「で、でもあれこの家の息子さんはもうそろそろ三十路とかって···
・あ、そうか」

「なかなかおっちょこちょい何だねネカネさん

なんだか癒された気分だわwww

ネカネさんは頬を染めて俯いてしまつ
そこにアーニャが

「ちよつとー・ネカネさんを虜めないでよね!」

「はは、虜めてないよアーニャちゃん

「嘘よ、そんなの嘘!」

「まあまあ、そうやつてすぐ人を疑うのは良くないよ?」「

「人を疑ってるんじゃないわよーあんたを疑ってるの!—
そんなこんなで挨拶を済ませて、自分の家に戻る

ドアは勝手に開けます

「ただいま～」

そして、家に入るとスカーレット（妹）がソファに寝転がりながら魔道書で顔を覆い寝ようとしていた
しかし、僕に気付くとその魔道書を顔から離し

「あ、兄貴！？」

「やあ、スカーレット久しぶり。でもいきなり『兄貴！？』だなんて。もうちょっと女の子らしく出来ないのかい？」

「そんなもの私に求めないでくれ」

「ああ、僕が悪かった。」

「まあ、とにかく待つてろ、父さんと母さん呼んでくるから」
そうして、スカーレットが2階に走り親を呼びに行ってしまう

スカーレットはなかなか美少女だと思つ
別にシスコンとかではなく

すらっとした体、整った顔立ち、長い紫のツインテール

我が家ながら僕と違い、目立つほうだ

近くにスカーレットが読んでいた（と信じたい）魔道書を取る
その内容は『瞬動術の基本—PART?—』だった
この時代はこんなに便利になつたのか・・・
俺が覚えたときは・・・はあ、苦労したのに

「おお、リン久しぶりだな！」

降りてきたのが少しあつれた父

「あらあら、リン君お久しぶり」

それと少しおつとりした母

「久しぶり父さん、母さん。二人とも元気そうだね」

「ああ、お前」「や・・・なんか成長してないな？」

「言ひたでしょ、もう二つ体になつたんだ・・・」

「やうよねえー。なんで私より年上なのに、私より若く見えるのよ！」

と、なんだか意味なく怒つてくるスカーレット
まあ、確かにスカーレットは今26歳だからね。
僕は15だし・・・

「いや、だつて僕2年に1歳だし」

「はあ！そんなの「んちきよー」」

「いや、いんちきとか言わないでよ。僕死ぬといつたんだからさ」

「まあ、いつか。でも、自分の兄貴が英雄の一人と考えると・・・
なんか複雑・・・」

「まあ、いいじゃん。勝手に金入るし」

「うわ、それ権力濫用じゃない？」

「いいんだよ、使えるものは使わないと」

「今から夕飯だけど食べていく？」

「と云うより僕今日から泊まつてくれんだけど？」
と、久しぶりに家族で楽しく食卓をともにする

次の日

僕はアーニャちゃんとネギ君とで外に遊びに出ている
二人とも活発でいいじゃないか
まあ、こちどらテオと毎日遊んだ戦士なんでね
負けない！

つて、あれタカミチじゃないか？
なんで奴が？

「よお、タカミチ少年」

「り、リンせん！？何で」「うん。」

「ま、親友の頼みでな」

「そ、そうですか？」

「お前は？」

「ぼ、僕はネギ君に会つておひつと思いまして」

「そつか、ネギ君なら今川のほうで遊んでるぞ？行つてあげるよ。
お前が居れば安心して帰れる。それじゃ！」

そつ言つて僕は瞬動で町に戻る

「はあ、なんか暇だな」

そう、タカミチ少年がいる以上ネギ君の近くに居る意味がない
しかし、僕に町ですることもない・・・

「あ、スカーレットだ」と、自分の妹の姿を発見

彼女は今男に囲まれている
なんだろ？かつあげかな？

「お~い、スカーレットお~！な~にやつてんの~？」

「あ、兄貴！？お前に何をやつてんだよ！？ネギはどうした？」

「葱？今日の夕飯には使わないからこりゃないんじゃない？」
何を言つてゐるんだこの妹は

「ちがうちがう、ネギ少年のまつだよ。面倒見てるんじゃないのか
よ？」

「ああ、タカミチ少年が来たから、僕ようしなんだ」

「た、タカミチ！？あの、タカミチか！？」
なぜそこまでタカミチに一ま、まさか！お前！

「うふ、そうだけど？何か？」

「だつて、タカミチだぜ？あの超有名な
よかつた、惚れてるとかじゃないのね・・・」

「ああ、あいつもだいぶ有名になつたんだつけだ・・・俺に負けて
たあのころが思い出されるぜ・・・」

「つて、負けてたつて！兄貴タカミチに勝つた」とあるの？..」

「まあね」

と、こんな感じで兄弟の親睦を深めているところ

「おー！スカーレット！今日！悔み晴らしてやるぜー！ついでにそ
このスカーレットと関係ありそうな餓鬼もなー！」

と、周りに居た男代表が言つてくる
まあ、周りにはざつと13人くらいの男が囲んでいる

「お前、なにかやつたの？」

「ああ、ちょっと・・・ケンカで負かした・・・友達から金取らうとしていたから・・・」

「ああ、面倒な事いやがつて、どうすんだよ？お前勝てないだろ、この人数じゃ！」

「う、逃げるしかないか・・・」

「と、言いたいところだが。まあ、これは兄貴に頼つてみろよ？」

「え？ 兄貴に？ でも兄貴弱いんじゃ？」

「ひどい！俺これでも戦場立ってるんだよ？」

「私のアーマーはまだ一ヶ月、お前等『魔法の射

手！連弾氷の5矢』

そして、周りの男達も放つ

魔法の射手はなつてくるとか・・・
妹よ、どれだけ恨まれてるんだ?

「也沒有——。」

妹が乙女っぽく悲鳴を上げる

「少し〜まつてみよ?」

「え?」

実の妹をお姫様だつことかしたくないんだけどな・・・

「よつと!」

足に微力な魔力を集めて上に跳ぶ

そして魔法の射手が互いにぶつかり爆発

そしてゆづくりと着地

「ふう、疲れた・・・」

「早いよ兄貴、まだいるんだよ」

魔法の射手が当たらなかつた事から、相手は直接攻撃に切り替えて
きた

でも、魔法使いが近接つてどうなの??

「めんべー『我にこに願わん、武人としての極みを・・・武神の舞』

風が渦巻く、何気に妹のスカートが捲れるが、それを抑えてあげる

「ありがと兄貴」

「そんな」とで感謝される兄貴・・・悲しそ

「 「 「 「 「つらあ！！」」」

何人かの男達が襲い掛かつてくる
剣、ナイフ、鈍器
どこから取つてきやがつた！？

「ほい」

僕は一人一人の攻撃を避け、相手の武器を破壊する
剣とナイフは折、鈍器は奪い取る

そして、残りの男も掛かつてくる

「もうめんどくさい。アーティスト『紅い糸』」

そして、手袋が現れる

「今命名…束縛！」

そして、糸を放つ。

相手に向けて、糸が相手の四肢に絡み、相手の身動きを封じる

「があ！」

一人が無理矢理とこうとするが

「やめたほうがいいよ？無理にとこうとするとスパツッと切れるから」

そして、男達は動きを止めた

「よし、じゃスカーレット帰るぞ！」

「わ、わかった兄貴」

そして、その場から離れる

「なあ、兄貴切れるつて危なくね？」

「え？ 嘘だよ。あれただのちよつと鋼線だからすぐちぎれやん？」

「は？」

「戦闘とは、化かしたほうが勝ちなんだ」

「・・・それでも英雄？」

「勝ち残つたものを英雄と言つんだよ？」

「そつか・・・なんか、見損なつたかも」

「なつ！ それひどくない！ 僕みたいに才能のない平凡ががんばつて
ここまで生きてきた術を伝授してやろうと思つたのに！」

「いいよいよ。私兄貴と違つて才能は足りてるから」

「うわーん！」

そして、より一層早く走る、いや瞬動である

「つて、兄貴瞬動使えたの！？ ちよつとそれ教えてよー！」

「いやだね！」

そして、家まで追いかけつゝしました。

「ただいま～」

「ぜつはあ、ぜつはあ、なんで兄貴は息切れしてないの？おかしくない？」

「まあ、鍛え方が違うんだよ」

そして、今日も今日とて普通に口が過ぎていった

まあ、それからの日々は、ネギ君が犬にいたずらしたり、真冬の池に飛び込もうとしたりするのを止めたりして忙しかった・・・。それも、日常になっていたある日の事だった

今日はネギ君が釣りに行くのを着いていった

「いいかい、ネギ君、釣りのコツは忍耐だ。釣り、それはつまり口との戦い。」

「や、そつなんですか」

「そつなんですよ」

そう言つて、ネギ君は釣りに夢中になる

そして僕は本を読み始める

読んでいる本は『妹の扱い方』だ

別にそういう趣味ではないが、最近スカーレットに舐められているので・・・

あの妹はなぜ瞬動が1週間ができる!俺は2ヶ月掛かったのに!..

そうして、本に集中していると、寝ていた

え?それって集中していないんじゃない?それはなにかの勘違いだ!

「つで、やば!ネギ君は!..」

と、あたりを見回すと、村のほうの空が黒い

「やばい!」の気配・・・悪魔か!』

そして、全力で村に走る

そこは燃えていた

家が崩れ、人が固まり、野原が燃え

「くそ!どうなってるんだ!..」

相手も人を殺す氣は無いよ!ついで石化させている

「くそお!..」

そして、村を走り回り自分の家へと急ぐ

ドアを破る

「父ちゃん・母ちゃん・スカーレットー・」

自分の家族の名前を叫ぶ

「さやあ！」

2階から悲鳴が聞こえる

2階へ急ぐ

そこには、スカーレットを庇ひ母、それを庇い石化した父が居た

「退クンダ女」

「い、いやよ。娘だけは！」

「フフフ申シ訳ナイネ命令ナモン♪」
そう言って石化光線を放つ悪魔
母がスカーレットを庇い直撃

「お母ちゃん・」

「に、げなさい・・・スカーレット・・・兄さんの事をよろしくね、

あの子意外にドジだから」

そう言って固まってしまう

「お母ちゃん・お母ちゃん・」

泣き叫ぶ妹

それを見てあざ笑う悪魔

許せない・・・そして、許さない！

「アーティスト。『我難ぎ払う、我の敵全てを』
刀を作り

「『我ここに願わん、武人としての極みを・・・武神の舞！』
相手に突っ込む

「ム！」

こっちに気付いた瞬間もつ遲い！

「はあ！」

悪魔の上半身と下半身を真つ二つに切り裂く

「兄貴！」

「スカーレット、はやくこっちへ来い！」

「でも、でも母さん達が！」

「早く！」

そうして、スカーレットを無理矢理引っ張る

「待つてよ！」

「だめだ！」

そうして駆ける

「ひっく・・・ぐす・・・ん」

俺に抱かれながら泣くスカーレット

「もう、泣くなよ・・・」

しかし、そんな感動できとうなシーンを邪魔する悪魔達

「逃ガサナイ！」

襲い掛かってくる無数の悪魔を避けながら切りつけ
それの繰り返し

しかし、僕は油断していた

一匹の悪魔に

自分の気配を絶ち機を待つていた

そして、そのときが来たとき

奴は放った石化魔法

僕は着地した瞬間を狙い

回避不能なはずだった攻撃だった
でも、僕には当たらなかつた

なぜなら、そこにスカーレットが居たから

「スカーレットーお前、なんで！」

倒れる妹を抱える

「母さんに言われたからね・・・」

目から涙が零れる

「兄貴を頼むつて・・・」

彼女の最後の言葉を聞きながら
心が暴走しそうだった

「やつぱり、重要なところでドジるんだな・・・やつぱし、私がつ
いてない・・・と・・・」

そう言って固まる

僕の家族が・・・
僕の想いが・・・
僕の大切なものが・・・
護りたかったものが・・・

崩壊する

壊れる
崩れる
割れる

許せない・・・ゆるせない・・・ユルセナイ

ユルスナ！殺セ！

自分の中の悪魔の血が騒いだ

髪の毛が黒から金に変わった
一気に魔力量が跳ね上がった

「あああ！！」

力の暴走・・・

刀を一太刀・・・
それで終わつた

今の僕は負けない・・・
今の僕は怪物だから・・・

すべてが真つ一つになつた
まるで一枚の絵を切るように

「エ？」

そして、全てが消える
元にもどつていく
悪魔達が消えた

そして、僕も元に戻る
髪が元の黒に戻る
魔力が元に戻り

でも、家族は戻つてこない・・・

自分の妹を見る
もう固まってしまった妹を

「スカーレット・・・」

涙が溢れる

「俺は、護れなかつた・・・」

「何が英雄だ・・・なにが『護り人』だ・・・僕は何も守れなかつた・・・自分の家族すら・・・3人の命すらー・」
そして、僕は吼えた

奴等が憎いと

初めて思った、憎いと

少し時間がたつと

俺は落ち着きスカーレットを安全な場所に戻す

少し離れたところで雷の暴風が発動されている
この魔力は・・・ナギさん！？

そこから僕は全魔力を使い瞬動をする
景色が飛び、草原に着く

「お、リンじゃないか。はは、どうした泣き顔で」
ナギさんが居た。いや、分身だろう

「家族が・・・」

「そつか・・・まあ、大丈夫だろ。俺の息子が頑張ってくれるさ・・・」

そつ言つてネギのほうを見る

「彼なら、きっと辿り着くんでしょうね・・・」

「俺の息子だぜ？」

「はは、そうでしたね・・・それなら、僕は彼がそこに至るまで見
守るだけです」

涙を拭う

まだ、希望はある

あのナギさんの息子だ・・・常識なんて通用しない
解決するはずだから

「頼むぜ？」

「はい」

それから、村が救助され

生き残りは僕とネギ君とネカネさんだけとなつた

ネギ君とネカネさんは魔法学校に通い

僕はと言つと・・・

魔法学校の校長に久しぶりに会いに行つたらなんか知り合いの学園
長が人手がほしいそうで・・・

麻帆良学園に来ました

ここが関東魔法協会の本部で、たくさんの魔法関係者が居るらしい

僕はここに・・・なにして入るんだろう?

僕2年に2歳だけだから・・・まあ、飛び級とかにすれば大丈夫だ
ね・・・

今15だから・・・高校1年かな?ちょうど春だし、高校生からや
れるね

僕は寮でなく一人暮らしをする

このアパートは魔法関係者で固まっているらしい
下には明石教授という先生とそのお子さんが住んでいるらしい
いろんな先生が住んでいるところに特別に住ませてもらっている
学園長いい人だな

まあ、明日くらいに会いに行こうと思つ

今日は引越しとかで疲れたし・・・

次の日いへ

「学園長、失礼します」

「つむ、入れ」

「お邪魔しま・・・す? タカミチ少年じゃないか
こんな所で会うとは・・・
なにかの因縁か?」

「リンさん、何してるんですか?」

「いや、僕呼ばれたんだけど」

「そうじやぞ、ワシが人員不足じゃから向ひの校長に頼んでの」
そこに居た学園長は・・・なんて言つた
頭の長い人でした・・・

「あ、こんちわ、申し送れました僕はリン・イーストです」

「知つてある。そうじや、リン君。今日からはリン・イーストでなく『東鈴』とのれ

「はい、別にいいんですけど・・・なぜ?」

「外人さんと騒がれたくないんじゃない?」

「はい。『考慮ありがとう』でございます!」
この人は良い人だ! 確信した

「つむ、で、これが仕事内容じゃ」

そして、書類をもらつ

内容は

? 学校の警備

? 護衛の依頼などを行なう

? 学業に励む

なんて簡単なんだ

「分かりました。僕が必要になつたらいつでも呼んでくださいね」

「うむ、それでは今からついてくれんかの?」

「え? 今から?」

「つむ、今から鈴君の紹介で、魔法使いたちで集まるのじゃ」

「わかりました」

そうして、連れて行かれたのが世界樹広場

「でかい木だねタカミチ少年」

「そうですね。まあ、世界樹ですか。」「タカミチ少年は準備運動を始めている

「ねえ、タカミチ少年なぜ戦闘用意しているんだい？」

「ああ、なぜでしょうね？」

それから、少し経つとたくさんの魔法使いが集まってきた
上の階の明石教授もほかの先生もいる
金髪幼女もいますね？彼女何者？

「本日ここに集まつてもらつたのは彼、鈴君の紹介じや

「よろしくお願ひします。東 鈴です。色々と未熟ですが精一杯頑
張ります」

「何を謙遜しとるのだ。お主はあの『護り人』なのぢやろ？実績も
伴なつとる」

護り人

護れなかつたのに

「いえいえ、僕に守れなかつた人も・・・たくさん・・・いますか
ら」

「そつか・・・まあ、少し悪いんじゃが。今から模擬戦をしてもら

つていいかの？タカミチ君と

「ええ、構いませんよ？実は僕ももう準備万端なんです」「そつ僕はあの日からいつでも襲われていいように武装している

「うむ。ではタカミチ君も用意はいいのかの？」

「いっでもどうぞ」

「では、はじめー！」

「アーティスト」

「一つのアーティファクトを出す

『『我薙ぎ払う、我的敵全てを』『我』に願わん、武人としての極みを・・・武神の舞！』』

光が収束して武装を作る

出来たものは傘

なんの辺鄙のなさそうな青い傘

「そんなものでいいのかい？」

「逆に詰つたび、僕に任せよかつたのか？」

「本気でやりたかったからね！」

そつして、いきなり咸卦法使つてくるタカミチ少年

「なんか怒つてゐるでしょ？」

「いえいえ、ぜんぜんなんで僕より年上なのに・・・なんて考えて
ませんよっ？」

と、いいながら無敵拳をとばす、いや、タカミチ少年のは到底こ拳
だつたな

「わっ！」

そして、それを転がりながら避ける

「やつぱし、あのひるの僕は弱かつた・・・あなたに負けるまびこ。
・・でも、僕は強くなりました！あなたにも勝てるまびこ！」

「ふふふ・・・ほんとこいつ詰つてゐるのか？僕に勝てると・・・

「何を！もう実力差は歴然です！傘で何が出来るんですか！？」

「でも、残念だつたね。僕も本氣でいかせてもらひつよー。」

「なつー。」

「左腕に魔力！そして！」

「まさか、あなたも咸卦法をー。」

「やつぱし、右腕にも魔力！』

「へ？」

タカミチ少年が固まる

まわりが滑る

でも、僕は動く

「油断禁物だ！」

タカミチ少年を傘で殴り飛ばす
無防備になつていたわき腹にころに入り骨は一本くらい折れただろう

「ひ、卑怯ですよリンさん」

「は？ 戦いに、卑怯もくそもないよ？ 勝つたものが勝ちだ！」
言つてゐる意味が分からぬ？ 自分で考えろ！

「ぐつー。」

そして、居合い拳をたくさん打つてくるタカミチ少年

「よつとー。」

瞬動で次々に避けていく

「そんなんじや当たらぬによー。」

「何をー。」

少し怒らせてしまつたのか

「豪殺居合い拳！ 亂れ打ち！」

なんか凄いコブシが飛んできたーーー。

「うわあ——！」

そして、その真所が煙で覆われる
すこし時間が経ち煙が晴れる

「はあはあ・・・なかなかやるじやん・・・」

「これで、僕の勝ちですね」

「いや、まだだね！」

そうして、ポケットに手を突っ込みマグネシウムの帶を取り出す

僕は傘を開き中に仕込んであつた刀を引き抜き瞬動で移動する一瞬の動搖と傘のおかげでタカミチ少年には気付かれずに近づき

「第一節、木枯らし」

切り刻み

「第二節、陽炎」

後ろに回りながら切り

「第三節、蛇絡み」

自分の足を相手の足に巻き一気に引き抜き転ばせる

この間時間は1秒に満たない

「終節！降雷斬！」

思いつ切り下に突く

「どうだげぶう！」

効かなかつた・・・まあ、分かつてたけど・・・

「なんですか今のは？やる氣あるんですか？」

最後の突きは首の横に外れていた・・・当たつてたら痛いしね！

「ああ、僕は大真面目さー。」

「なら、あなたは方に一つ僕に勝つ可能性はないー！」

「はっ、抜かせーまだ、切り札はあるんだぜーー？」

「なつー！」

手袋をしているまづの手を引っ張る

そうすると、タカミチ少年が動かなくなる

「「」」とですか・・・今さつきの動きも・・・」

そう、僕の今さつきの意味のない乱舞は鋼線を絡めるための行動

「でも、こんな糸ーはあ！」

「切れないよ？僕の全魔力注いでるんだから」

「ぐうー！」

もつと力を込めて暴れる

「無理矢理はやめたほうがいいよ！切れるからや、そりゃも輪切りになるよ？スパッと、スパッとね」

「くへ

「じゅら、やめてくれるようだ……

「これで、僕の勝ちかな？」

「また、僕の負けですか……弱ったあなたにまで負けるんですね
僕は……」

「まあまあ、僕だって弱くないし……」

「まあ、仮にも皇女の補佐で英雄の一廊ですかりね」

「嫌味か？」

いやな奴だなタカミチ少年・・・そんな奴には友達できないぜ？

「じゃ、僕帰りますね？」

ふああ、眠い

「うむ、よいぞ」

よし、全速力で帰つて風呂入つて寝よー。

「じゃ、さよなら陛下さん！あ、そうだタカミチ少年！今さつきの糸！切れないから！」

「なっ！だましましたね！それだったらあの後干切れたのか！」

「つははあー戦いは力だけじゃないって言つたろー！騙してなんぼさ

「！」

そして、僕の麻帆良ライフは始まった・・・
もうすでに疲れた・・・

第10話—僕が麻帆良に至るまで—（後書き）

やつぱし、戦闘描寫ますぎますね WWW次は第3者からやうつかな？

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

第1-1話—それぞれの思想、そして始動—（前書き）

ものすごい久しぶりの投稿です。なんだか最近忙しすぎて気付いたら5ヶ月とか。。。これからは不定期で亀だけど更新していきたいと思います。小さい子を書くのは苦手だけどチャレンジしてみました。

第11話—それぞれの思想、そして始動—

僕は世間的には『立派な魔法使い』に近い存在だった
でも、僕は断つた。僕にはテオのサポート多々があるから
それでも、僕の評価は変わらなかつた

周りは僕を『正義』と思い勝手に『立派な魔法使い』見習い的なも
のにした

僕はそれからかけ離れているのに

第11話—それぞれの思想、そして始動—

SIDEガングログラサン教師ことガンドルフイー二先生

今日私達が集会があると言われ世界樹広場に集まつた

今日紹介されたのは東鈴ことリン・イースト

千の呪文の男とともに大戦を戦い抜いた英雄の一人だ

私は尊敬していた、彼は人並みの才能で彼等に着いていき生き抜いたのだ

そして、噂では2度もナギ・スプリングフィールドの命を救つたとか
そんな彼に会えるのは光栄だつた

しかし、来たのは誰だろう

未だ15歳くらいの少年ではないか？

確か、リン・イーストは今三十路くらいのはず・・・

まあ、そんな事はどうでもいい

用は彼がそれほどの人材であるという事だらう

彼は短く自己紹介するとタカミチと模擬戦を始めた

その内容に驚嘆した、そして同時に失望した

相手を騙し、動搖を誘いその隙を突く

しまいには、意味のない行動をする

そして、決め付けに嘘を吐き相手を負かしていた

これが英雄なのだろうか？

この戦い方はまるで立派ではない

立派であるものは正々堂々と敵を正面から倒すものだ
なら、彼はなんなのだろう？

正義？立派？いや、違う・・・

彼は悪い近い・・・

僕は今日失望した

自分の尊敬していた彼が
こんな人物だったとは・・・

SIDEタカミチ

今日は久しぶりにリン君と模擬戦をした
内容的にはもうすでに模擬線でないが・・・

彼は以前からまじめに試合をしていなかつた
まるですべてを受け流すように力なく相手を切り伏せた
しかし、今日はどうだろう？

僕を欺き、騙し、驚かし
動搖を誘い、そこを突く
それはまるで盗賊のような戦い方

今回は彼に勝つ自信があつた
でも、また彼に敗れてしまった

彼は言った

『戦いは力だけじゃない』

その通りだった

僕は彼に騙された

最後の最後まで

まだまだ、修行が足りないようだ

そんな嘘まで吹き飛ばせるくらい強く・・・

僕は強くなる！

SIDE OUT

SIDE 金髪幼女ことエヴァンジェリン

今日はジジーに呼ばれ意味のない集会に行かされた

今日は春から麻帆良付けになる予定の魔法関係者の紹介だと
まったく、そんなものいちいち紹介しなくてもいいではないか

そして、来たのはリン・イースト

ナギの初めての従者にして、大戦を戦い抜いた平凡の魔法使い

しかし、奴は年老いても居なく未だ若い

あんな奴がナギの従者だったのだろうか？

それにも、奴の気配から少し魔を感じるぞ・・

ククク・・・」いっぽはなかなか面白い

「どうしたのですかマスター？」

「こいつは茶々丸だ

私の従者の人一人でガイノイド

「なんでもない・・・茶々丸あやつの戦闘とつておけ」

「はい」

奴の戦いは魔法使いとは思えないものだつた
常識はずれの戦法、まるで正義ではない
どちらかと言ひと悪の方だ

しかし、あれに引っかかるタカミチもタカミチだらう

奴の勝利はまるで紛い物
すべてが嘘ででっち上げられ最後に相手を追い詰めて
負けを宣言させたところでばらし、敗北感を増す

面白い・・・面白いぞリン・イースト！

S H D E O U T

僕の生活が始まった

と、言つても今は春休み中だ

だから、このアパートに住んでいる人たちに挨拶を済ませうと思つました！

では、レッヅゴー！

ピーンボーン！

「少し待て」

「はい」

そしてドアを開けて見えたのはガングログラサン教師ガンドルフィー！「せんです！」

「こんちわ。昨日も会いましたね。昨日からこのアパートに住むことになりました鈴です」
と、言つて手を差し伸べる

「ああ、私のほひそよろしくたのむよ。最近人手が足りなくてね。忙しいんだ」
と、少しそこで話をしていると

「先生何してたんですか？僕が来る前」

「ああ、ちょっと銃の手入れをね」

「へえ、銃ですか！僕も銃使うんですよ？」
「ちょっと、話をあわせてみよう

「何を使うんだい？」

やつぱし、自分の好きなものには食いつく人だった

「少し改造したデザートイーグルを一丁護身用に」

「へえ～、どういった改造を？」

「まあ、弾速が通常の3・4倍で。魔力が込められる弾を使用して
ますね」

「弾速が3・4倍ってどんな改造したんだい？」

「いやあ、なんか友達に貸したらそりなつてたんですよ
アルの奴何したんだろ？？」

「へ、その友達はすごいね・・・」

と、言つてなんか気まずくなつたのでさよならをした

たしか、あるつて重力魔法主体だよな・・・
銃で何したんだろ・・・いつか聞いてみよ

お次は

瀬流彦先生へ――

「こんにちわー」

「いらっしゃい、リン君

「いやあ、瀬流彦先生はイケメンですね

「な、なにをいきなり言つてるんだい？」

「いやあ、なんでこんなに優しくイケメンな瀬流彦先生がなんで彼
女の一人が出来ないかと思つてですね・・・ま、まさかあつちのけ
が！」

「いやいや、何を言つてゐるんだい？」

「では、おことましますー！」

「ええー。」

はい、瀬流彦先生とはばいばいです！

そして、最後に明石教授の『自宅』です

「」
「」

「やあ、よく来たね」

出てきたのは少し痩せていた男だった

「来ちゃいました。お仕事大変そうですね？」
「氣を使うのは当然！とここに来る前に『外人が日本に行くときに必需』で読んだよ！」

「あはは？ そうかな？」

笑つてごまかそうとする教授

その笑い顔はとても柔らかく優しそうだった

「はい、顔色が悪いですよ？」

「えい・・・・・だよね。はあ、娘にも心配されてね・・・・・

「

「娘さんいるんですか?」

初耳です!

「ああ、いのよ?会つてみるかい?裕奈も喜ぶだろ?」

「じゃ、お邪魔します!」

明石教授の自宅内

「お父さんその人誰?」

と、登場したのが明石裕奈、教授の娘さんだ

「ん?この人は・・・・・・」

そこで戸惑ってしまう

そう、僕の位置は微妙だ

見た田高校生で『回僚』と書つわけにはいかないのだ

「 」の人は?

もつ一度聞いた感じの少女

「 」の人は・・・・・お隣さんみたいなものかな?」

「お隣さん?」

「 もつだよ? 今日から 」の上の部屋に住むんだ。あずまりんって名前だよ」

「 あずま りん? じゃあ、お兄ちゃんなんだね!」

その発想はどうから持つて来たー?」

「え?」

教授のほうを見ると

「お願」と書つたような田をしてくる

「 もつも、お兄ちゃんですよー」

「わーーー。」

そう言つて喜ぶ裕奈はとても無垢な瞳をしていた

その後、裕奈と遊ばせてもらった

いつもは友達と遊んでいるようで、父親とはあまり遊ばないようだ
そのせいか、肩車などか好評だった
子供は高いところが好きなようです
そういうえば、テオも好きだつたな

「ぜんそくせんしーーん！」

掛け声をかけながら指差す方向へ僕は進んでいく

あつと叫ぶ間に毎をすぎ夕暮れが見え始める

「ああ、楽しかったー」

そう言って今も肩に乗っている裕奈が頭に寄りかかるてくる

「それはよかつたよ。僕も久々に羽を伸ばせたよ

実際にそうだ

テオは今はそれなりに仕事もある
僕も護衛の仕事が増える

いつもやつてのびのびできる時間は貴重なのだ

「そお？えへへー、お兄ちゃんが嬉しいなら裕奈もつと嬉しい
そつ言つて、自分の喜びを分かち合つてくれる

この子はとても優しい

「じゃ、家に帰らつかへね父さんがきっと夕飯作ってくれるよ。」
やつひかへ 裕奈を家に届けた

しかし、明石教授が一緒に食べようつと誘つてきてそれを断る理由も無いので一緒に食べる事にした

食べ終わつ「では、お暇します」と家を出ようと足に何かが引っ付いてくる・・・・・裕奈である

「帰つまひつのへ

え・・・・・なんかすゞこまだってよ的なノリなんだナビ・・・・・

そして、教授のまづ田を向かると

「お願ひ」と言つたままをまたしてくる・・・・・

「わーーーーー、あせじめ、お兄ちゃん裕奈と一緒に寝なつへ。」

「あ、もういいやつだ。まだ部屋も片付いていないだらつ

「ひだり、わーーーーー、お兄ちゃん裕奈と一緒に寝なつへ。」

「え・・・・・

「もうすとこよ。それなら早くお風呂に入つてきなさい
つて、何勝手に話を進めてるんですか！」

「はーーー

やつぱり家の奥のまへに進んでしまった裕奈

「あの・・・・・明石さん？」

「ああ、鈴ぐんも自分の家でシャワーを浴びてくれ
えへ、ちょっと話が進みすぎです

「分かりました、すぐ戻りますね
あの田で見られたら断れない

そういうで、急いで自分の部屋に戻りシャワーを洗うと浴び
ジャージに着替え再び明石家にもどる

「早かったね。寝る場所は、あっちの部屋だから。
やつぱり家の奥のまへを指差す

「あ、はい」

「すまないね・・・・・まさか裕奈があんに懐いてしまつとは思つてなかつたんだ」
ちよつと教授それ言ひのせいです
もつと最初に言つましょつ

「あつと、裕奈はもつちよつと掛かるからー」

部屋には敷布団が敷かれていた（一枚）
僕はその上であぐらを書き、ボーッとしている

「お兄ちゃんおまたせー」

裕奈が部屋に入ってきてドアを閉めた

そして、僕の足の上に載り頭を擦りつけてくる
連想させるは猫である

優しく髪を撫でてあげる

そんなどかな時間がつづき

裕奈はいつか眠りに落ちてしまった

その裕奈を横に倒し寝かせる

そして、自分も横になる

これから的生活を考える

これからは、きっとこんななんびりした生活ができるんだろ？
そんな考えをしていると自然に頭がぼんやりしていく
いつの間にか・・・・・眠りに落ちていた

第11話—それぞれの思想、そして始動—（後書き）

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

第1-2話—平和な日々が壊れる余興—（前書き）

いやー、なんか書き出したら止まらなかつたwww
ああ、ヒッセイあるのに・・・・4000字のヒッセイがある
のに――――――!

作者の悲鳴は無視な方向で

第12話—平和な日々が壊れる余興—

春休みも過ぎ、僕は高校へ通い始めた
そこでは、目立たないよう過ごした
なぜかって？だって、外見があまり変わらないことであつた
くないだろう

僕ののんびりした日々は続いていた

ある一時を境にまた僕は戦いへと一步一歩塚近づくのであつた

第12話—平和な日々が壊れる余興—

高校は男子校である
別に、共学でもよかつたのだが、男子校のほうが近かつたのでこつ
ちにした

この学校は麻帆良に珍しく・・・・・・
荒れていた

教室は使われず

授業に出るものは小数
といつより3割くらい
のこり7割はサボリ

いや、もともと学校に来ているがどうかすら怪しい

そんなとこの制服を着ている僕は・・・・・・
やつぱし、それでも目立たないくらい平凡だった

「ふああ～・・・・・・」

外を眺めながらあぐびをする

今日の天気は快晴、雲ひとつない

季節は春、とてものどかでゆつたりとした時間がながれる

「東、こここの答えは分かるか?」

今は数学の授業中

出席者数28人4人中

「そここの答えは――――――
適当に答えておく

授業とはつまらないものだ

教師の質問に答えるだけ

しかし、ならなぜ出席しているのだろう？

僕はここにいない奴等と同じにはなりなくなかつた
たぶん、それが答えだろう

別に彼等の生き方は否定しない

不良のなにがダメなのか？

人の生き方にはつけるものじゃない

また外を眺め、空に浮かぶ一つの雲を発見する

今日も一日が終わる帰り道の途中だった

Pirri
Pirri

携帯に連絡が入った

ちなみに携帯は2つもっている

一つが仕事用

もう一つは私生活用

と、いつてもこっちには滅多に掛かつてこない

今回も仕事用である

「また、仕事か？」

そういうて、電話に出ると

「りん君？」

相手は明石教授であった

「なんですか？なにか仕事ですか？」

「いや・・・・あの、なんていうか言いにくいんだが・・・・

・

「はい」

「裕奈の迎えに行つてくれないだりうか？今日ははどうしても外せない用事が出来てしまつたんだ」

「はい？」
きつと素つ頓狂な声だつただろう
それくらい予想外な内容であつた
仕事用の携帯だったので

「…………」

「あの、明石教授…………」ついでしゃうか？」

「ああ

「これ、仕事用の電話ですよ。」

「ああ、すまない…………君しかいないんだ」

「まあ、分かりました。でも、次からはもう一個の携帯にかけてくださいね、後で教えますから」

「ああ、助かるよ」

そつこつて、裕奈がいるであろう小学校に向かう

小学校

そこは、小さな子供が学ぶために行く場所である

裕奈は現在4年生だ

その門はいつも自分がみているものよりも幾分か小さく
なんだかおもちゃでも見ているような気分になつてくる

僕は小学校というものに行つていい
魔法学校とは小も中もないのである

門を抜けるとそこには校庭が広がっている
高校とそこまで変わらないであろう広さである
それだけ、子供とは活発なのだろう

その隅のほうにある木のところに裕奈はいた
しかし、様子が少し変だ
ずっと上を見上げている

彼女の視線を追うとそこには一つの体操着袋が二つの枝の間に引っ
かかっていた

裕奈はそれをずっと見ていた
なぜなら、その持ち主は裕奈本人であるからだ

僕は今いる場所から小走りをはじめ

木の1mくらい前で跳ぶ

いつもは肉体強化を切つてているからだに少し魔力を通わせる

そうするといとも簡単に枝まで届く

見事に袋を取った僕は
それを裕奈に差し出す
彼女の瞳をしつかり見ながら
すこし赤くなっている

「はい」

「あ、ありがとお兄ちゃん!」
やつぱり抱きついてくる

「どうして、あんなところに?」
疑問に思っていたことを聞いてみる

「あのね……ひろし君とまさ君とひで君が裕奈のとつて投
げまわすの」
ま、まさかーこれはいじめなのではー

「でねー、いつもは返してくれるんだけど………あんまり枝
に引っかかるちゃたの」

「で、3人は?」

「棒をとつてぐるつて言つて学校に・・・・・あつ、戻ってきた

ふむふむ、

これはあれだな！

気になる子にちょっとかい出したくなる症候群だな

「あかいしー棒もつて・・・つてその人誰?つてもう袋とれてるし
!?

一人の子が棒を持ってきて僕に気付いたようだ

「こひのひと、裕奈のお兄ちゃんだよー」

「こひわ

優しくあこせつしました

「え・・・・でも、あかいしには兄妹いないんじや?」

「きんじょのお兄ちゃんだよー」
近所ですね。上の階だから

まあ、その後も少し注意しその場を裕奈を連れて去る
そのときに一人がこっちを始終睨んでいたことは気にしない

「ねー、お父さんは？」

「今日はお仕事が入ったから迎えに来れなかつたんだ。だから僕が来る事になつた」

「そつかー」

そう言って、前を歩く裕奈はぐるりと回転する

その後普通に帰宅し、明石教授が帰つてくるまで裕奈と遊んであげた
そんなのんびりした日々が続いた

4年間くらい続いた

その間に裕奈はすくすく育ち今は中学2年生

僕は4年間で2才としをとり大学1年生だと、言つてもずっと学校で勉強しているわけではない

一応これでも、仕事がある
魔法使いとしてのだが

それで、最近は半年くらい席を空けていた
それで、大丈夫なのか？

愚問である、僕は魔法使いであり、就職とは無縁な感じなのである

そして、ようやくまた麻帆良の地を踏んだ
半年間ここにいなかつただけでこここの風景は変わるものである
学生の要求によって店はバンバン変わっていくし
流行といつものはすぐ去つていくものも多い

そんな麻帆良のあるき結構時間が経つたころ
僕は女子中等部エリアに着いた
別に、そういう趣味の持ち主ではない
ただ、ここに学園長室があるからわざわざここまで来るわけである
いまだに謎だ・・・・・

「はあ・・・・・・」

ため息をつき

来ているパー カーの帽子をふかく被る
あまり、この現場は見られたくない
ここは女子校エリアであつて男子がくる所ではないからだ

すこし、歩いていくと麻帆良女子中学校に着く
ここに…ここに学園長室があるので…
もへ、やめてほし
ここに来るまでも視線が痛かったのに…
…

そんな事を思い恵々しげに校舎を覗んでいると

「お兄ちゃん？」

近くに声が聞こえた

「ん？」

そつちの方向をみるといたのは裕奈であった
中学2年生とは思えない体の持ち主である

「やつぱし、お兄ちゃん…帰ってきたの？」「…」
に？ま、まさか！？」

色々一気に言つてくるのが裕奈である

「いやいや、別に僕は学園長室に行かないといけないんだ。そして、
今日帰ってきたばかりだからね

「そつかそつかー。それにしても何で学園長が？お兄ちゃんそんな人だつたつけ？」

「さあ？僕も呼ばれただけだからわ。分かんない」

「なあ？那人誰なん？」

会話に入ってきたのは青髪の少女

「ああ、この人はお父さんの家の近所の東鈴つて言つ人で。私のお兄ちゃんだよ」「いや、まちがつているだろお兄ちゃんだよって何だよ！」

「へ、へえ～。こ、こんなにちわ」
そう言つてぺこりのお辞儀をしてくる

「こ、こにちわ。東鈴です」

「あ、はい。う、うちは和泉亜子です」

「私の友達だよーー！」

「さうかさうか。裕奈の友達か。いやー、裕奈がいつもお世話をなつてます」

「いやーいやーいきなりそれ！別に私そこまでお世話をになつてないよー！」

「はつはーそうか。それは悪かったな。いやー、前はあんなにべつたりだつたのになーー！」

これぞ、過去を掘り返すアタック！

「昔の」「ことまじい」でしょーーもうーー亜子行ーー！」

「えー、わ、わかった

そう言つて去つていつてしまふ一人

「じゃあなー、裕奈ーー！また週末にでも会おうなーー！」
裕奈の背中に向けて言い急いで学園長室に向かう

そこは、少しほかの部屋とは印象が違った

「で、学園長？なんの用でしょ？」「
今対面しているのはく麻帆良の学園長
通称ぬりつひょんである

「うむ、仕事？」苦笑だった

「いや、それだけじゃないでしょ？まあ、ありがとうございます」

「察しがよくて助かるわい。うんじやよ、来月、ナギの息子の
ネギが麻帆良に修行に来るんじや」

「へえー、ネギ君がかー・・・・・・樂しみだなー」「
ネギと会つていよいよ期間は大体5年くらいになる
ときどきネガネと手紙などをしているが基本的に会わない

「じゃあ、お主にはネギ君の護衛を頼みたいんじや」

「え？僕これでも大学生なんですか？」「
見た目は高校生でも大学生ですよ？」

「つむ、ネギ君も教職なのでな、ネギ君が学校外にいるときだけ頼む」

「ネギが教師……だと！」

まあ、予想はしていたけど

「まあ、それぐらいならオーケーです」

「ナギさんとの約束もありますし。別に一田中でもこいですよ? どうせ単位とかもらえるんだし（学園長に）」

「いや、半年も空けていたんじゃ。少しこいつもの生活に戻つたほうがいいじゃね？」

「お心遣いありがとうございます。では、これで帰りますね

「つむ、では、なににかあつたら連絡するんでな

「はー」

そう言ひて、僕は学園を出る

この1ヶ月後来る

見習い魔法使いによつて僕の日常が破壊されることを知らずに

その迫り来る音にさえ気付かず、生活するのであつた

一ヶ月後-----

第12話—平和な日々が壊れる余興—（後書き）

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

やつぱり小学生書くの大変！

第1-3話—少年現る、それはラッキースケベの塊—（前書き）

題名と内容は一致しません。なぜなら、ラッキースケベの瞬間を止めるからです。最近は一話一話が短くなつてきました

第13話—少年現る、それはラッキースケベの塊—

今日はネギ君が来る日である

彼に会う事は楽しみだった

5年前のあの事件から彼には会っていない

彼の成長を見てみたい

どこまで、ナギさんに近づいたのか

自分で実感したいのだ

第13話—少年現る、それはラッキースケベの塊—

僕は学園長に自らネギ君の迎えに立候補した
それは、きっと日本に慣れていないであろうから
知っている僕が適役だと思ったから

そうして、僕は中学エリアの駅で待つのであった
そして、これに乗り遅れば遅刻する最終電車が駅に着いた

そこからものすごい人数の生徒達が暴徒のように走り始める
その中一人小柄な赤い髪の少年がいるのが分かる

「ネギ君！こっち、こっちー！」

彼に気付いてもらつために大きく手を振る

「あー！リンさん！」

予想通り気付いてくれた彼は賢いのだろう

「やあ、元気だつた？まだ、日本に慣れないんだろう。」

「はい、こんな人が集まっているのを見たのは初めてです！」

「まあ、麻帆良は学園都市だからなー」

それから、ネギ君と走つて学園長室まで行くつもりだったんだが・・・

ネギ君・・・・・

肉体強化は切らうね！

もつ、ものすいにスピードで先のほうに行っちゃったよ……

ああ、もつー

そして、やつと追いついたと思ったら

ネギ君は神楽坂明日奈となにやらケンカをしている

「はつ、はつ！」

くしゃみをしようとするネギ君

「ま、まずいっ！」

魔力の暴走

それは、ネギ君の用に小さいながら巨大な魔力を持っているものに
良く起こる現象だ

気が緩んだりいきなりの衝撃のときに魔力が溢れてしまつのだ

ネギ君の場合くしゃみが魔力の暴走のトリガーデある

急いで自分の足に魔力をある程度集め

人ごみの中を縫うように走る

最後に直線になつたところで魔力を爆発させる

ネギ君の口を手で抑え神楽坂から離れさせる

「へ~~~~」

手の中でもがいでるネギを放す

「こやあ、危なかつたなネギ君。ちやんと魔力を切つとくとこによ？（ボソッ）

「あ、はいーありがと」やれこめや

そういうて、自分の周りの障壁と身体強化を解いてくれる

「あ、あんた誰よー？」

自分の思い通りに行かなかつた事に不満を憶えたのか僕にやつたりしてくる神楽坂明日奈

昔、はあんなにおとなしかつたのに・・・・ちょっと複雑な気分だ

「ちょっと聞こてるのー? あんた男でしょーなんで、うるさいるのよー。」

まあ、普通の反応はそれだよな

「いや、いいんだよ、アスナ君！」

校舎の上のほうからタカミチ少年が答えてくれた

「よー・タカミチー！」

「あんたも知り合ー！？」

そんなにびっくりする事なのだろうか？

「じゃ、ネギ君僕はここまでだから、後はタカミチにでも世話をな
つてくれ。まあ、何かあつたら連絡はこれに」と、言つて一枚のカードを渡す
念話カードだ

「ありがとうございます」

素直にお礼をしてくれるとこはとてもいい少年であった

「そんじゃ、タカミチもまたなー！」

そう言って僕はそこから颯爽と逃げるのであった

駅での事

「久しいな、リン・イースト
エヴァが現れた

「え？ 誰？ 僕にはサボリ吸血鬼の知り合いなんていません」

「ふん、あっちには人形を置いてある

「だからって、ネギ君の最初の授業くらい出であげなよ。後、こっちでは東鈴だ」

「ふん！ あんな餓鬼興味ない「わけないよな」 ··· ··· ···

会話の途中で割り込む

「ナギさんのお息子…………となれば、お前の呪いを解く」とだつて可能のはずだ」

「ふん！そんなこと分かっている！」

「じゃ、お前は彼の敵になるのか？彼の血を求めて」

「自分のためならなんでもする！それが私だ！」

彼女は僕たちには想像もできない生き方をしてきたのだろうつ600年間生きる吸血鬼

その昔は魔女狩りで火炙りにされたといつ噂も聞いた

「それなら、僕は僕の生き方をする」

僕が昔から決めた僕の行き方

ホームに電車が到着する

「それはなんだ?」

電車のドアが開く

「護つてみせる」

そう言つて僕は自分の大学エリ亞に向かつ電車に乗り込んだ

一日が終わり自分の部屋で僕は考へにふけつていた

自分は『護る』と言つてしまつた

元々僕はナギさんに『頼む』と頼まれたのだ

なら、それに全力を入れるべきではないのだろうか

僕は弱い

そんな僕がなぜナギさんをあそこまで護れたのか
それは、きっとずっと傍に居たからだろう
ナギさんなら僕が近くにいなくとも大丈夫だつただろう
でも、ネギ君は違う

まだ数えて10歳という年齢で信念もすぐに変わつてしまつだろう
誰が、彼をどんな方法で利用するかわからない

なら、彼の近くに居るべきではないだろうか？

彼が自分で自分に降りかかる火の粉が払えるようになるまで
僕が変わりに護つてあげよ

なら、善は急げ

僕は電話を取った

「もしもし、鈴です」

電話の相手は学園長だ

『なんじゃね？』

「え～と、ネギ君のことなんですね～」

『むう』

「できるだけ、彼の近くに居たいのです」

『しかし、君には学業が』

「そんな事よりネギ君のほうが僕には大切なんです。これは、強制されたことではありますん。僕の意志です」

『う~む』

「身勝手なのは承知の上です。でも、お願ひします」

『分かった。では、鈴君には校務員として、ここで働いてもらおうかの』

「あ、あつがといひぞーまわ」

『あひ、しかしあちゃんと働いてもひいひー..』

『はー..』

そして、電話を切る

明日からまた新しい生活が始まる

大学？いや、僕魔法使いだし、大丈夫だよ

そして、次の日はすぐやつてきた

第1-3話—少年現る、それはラッキースケベの塊—（後書き）

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

第1-4話—正体をばらす時って大事だよな?—（前書き）

またしても、タイトルと内容は一致しません。いや、ちょっと関係あるくらいです。ヒッセイがー!と言つのは無視して読んでください。

第14話—正体をばらす時つて大事だよな?—

ネギが麻帆良に来て数週間が経つた
その間に起きた事はたくさんあったが、僕はそれに介入することは
ない
なぜなら、それはネギ君に危害を加えることでない限り僕はなにも
しない

そう決めたからである

たとえ、一般人に魔法がばれようと
僕は彼になにかすることはできないのだ

というより彼には僕があの校舎で働いていることすら言つていない

第14話—正体をばらす時つて大事だよな?—

今日は快晴、学生達も外で遊びたくなる天候だ
仮にも彼女等はいま中学生
体力が有り余っている時期である
そんな彼女等が昼休みに外で遊ばないはずないじゃないか？

しかし、なぜこんな問題になつてゐる？

「僕のクラスをいじめるのは誰ですか！？」
ネギ君が怒つても別に怖くないですよ？

「い、いじめはよくないことですよ！僕担任だし怒りますよー。」
だから、怒つても怖くないって
逆に彼女等にはいいえさである

今、僕の前で問題になつてゐるのは
中学生と高校生のケンカ・・・・。
なんで、ここに高校生がいるのかと疑問を抱く前に・・・・。

「大人気ないだろう・・・・。
仮にも年上なのだ

こんなたかが遊ぶ場所で争うなんて

最近の高校生はなつていしないな・・・・・

「ま、タカミチ少年にでも言つておくか
そつして、携帯でタカミチ少年に現状を知らせると
すぐ来た

通り過ぎたまに「ありがと」と言つながら
肩を持つ

「ああ、がんばれよ」

その後のことは知らん

そして、僕は自分の仕事『清掃・設備』に戻るのであった

屋上を清掃していたところ

昼見た高校生達が屋上に来た

だから、ここは中学だろーが
何しているんだこの高校生どもは

「お前等、ここで何をしているんだ? これは中学だぞ? 高校生の
前等が来るところじやない」
交渉を持ちかけてみた

「は？あなたには、関係ないでしょ」「でも行って掃除でもなんでもしなさい！」
が、断られたようだ

「ま、どうなつても知らないけど（ボソッ）」
そうして、僕は屋上の掃除を続けるのであった

その後、ネギ君のクラスが屋上にレクリエーションでやつてきたよ
うだ

「じつやら、もう一度ケンカを始めたようだ
ここにちは暇なのだろうか？
はあ、またタカミチ少年に電話するか？」

と考えたが

「まつ、ここはネギ君の解決策を見てみるか」
そう言って、その後も見守るのであった

そんな彼女等はじつやらスポーツ対決で決める」としたよつだ

しかし、数人が参加せず横で見ているだけだ
僕もその数人のいるほうに行く

「鈴？なぜお前がここにいる？」

エヴァが初めに気づいてくれました

今の俺の服装は校務員の制服に帽子を深く被っている
気が付かない自信があつたのだが

「あれ？わかる？」

「お前の魔力の質と量は憶えた。そして、お前どうした？学園長に
でも利用されたか？」

まあ、高位の魔法使いになれば魔力だけで人を判別できるだろうな
「いや、僕は自分でやっている。ネギ君が心配でね」

「ほおー、過保護だな？」

「いや、だつてね。彼は大切な親友の息子だし。権力争いにも巻き
込まれる可能性もある。そんなときなどない。そんなんじゃ寂し
いだろう」

「ふん。まあ、せいぜい頑張るんだな」
そり、言つてそのままを向いてしまつ

これは彼女なりの警戒だったのだらつ
『関わつたら敵になるだらつ』と

「鈴さん? なにをしている?」
次に気付いたのは龍宮真名だ

「ん? 真名か・・・・・・」

「どうしたんだ?」

「お前つて・・・中学生だったの『死にたいのか?』すいません・・・

・・・・・」

彼女とは時々敬語の仕事で援護をしてもらひ
彼女の腕は確かだ、もう凄い

歩く自然災害と呼べるくらいの弾丸が飛び交う

「なんで、ここにいるんだい？」

「じー」とー」

やねえのない答えを返す

「明石嬢田並でじやないのか？」

「は？ なんで？」

「いや、かわいい妹見に来たのかと
いや、妹って違うだろ

「裕奈かー」

そして、試合を見ていると色々と反則である

ボールを蹴つたり
ボールを紐でとつたり

「いやいや、あれはないだろ」

「まあ、これが麻帆良クオリティーなのだろう
分かってるじゃないか龍宮さん

そして、試合は終わった

しかし、ネギ君のクラスが全員油断していたといひで高校生がボールを投げた

それは、不意打ちと言つもので、卑怯とされるが
僕は別に否定はしない

しかし、それは戦闘においてなわけで
こんな子供のケンカであるようなものじゃない

それに狙われたのは神楽坂明日奈
きっと、リーダー格だからだろう
それとも、ネギ君と仲がいいからか？

しかし、そのボールは彼女に届くことはなかった
なぜなら、僕が止めたからだ

いや、殴つて弾いたと言つ方がいいだろ？

そして、殴り飛ばされたボールは壁に当たって戻つてくる

「はあ、仮にも年上なのだらうへ見苦しいよ？」
ボールをキャッチして彼女に手渡す

「じゃ、ネギ君。がんばってねー」

そう言つて僕はその場を去つてする

「ー・・・・・の！」

彼女にボールを返したのが悪かったのだらう

次は僕を標的に投げてくる

しかも、頭を狙つてきた

「うをー」

それを頭を急速に動かし避ける

そして、頭より後ろでボールをキャッチする

しかし、その反動で帽子がずれる

つばで、見えていなかつた顔が見えるようになつてしまつ

りまつ

「ー・・・・・え・・・・・・・・」

まわりが沈黙する

それはそだうつ

神楽坂明日奈にしたら、昨日の朝邪魔された人物だろう

明石裕奈にしたら、自分の兄のような人物だろう

それ以外にとつても、僕はどうみても高校生にしか見えないはずである

汗がだらだら流れるのが分かる
ああ・・・・・やつちまた・・・・・

「じゃ、ネギ。またな！」

そう言って急いで帽子を直し

次はちゃんとネギ君にボールを渡す

「えーなんで、りんさんが？」

次は走つてその場を去る

私には兄（つぽい人）がいる

実際の兄ではなく、昔から良く遊んでくれた近所のお兄さんだ

名前は東鈴

鈴という名前はどうか女っぽい

そして、性格もどこか女っぽい

彼は優しい

昔から私の世話をしてくれた

お父さんがないときは私の傍にいてくれたし

私の迎えにだつて良くなってくれた

本当に兄ができたような気がした

でも、私は中学に上がりお兄ちゃんと会うことも少なくなつた

時々お父さんの家に行くとき

それと、休みの時には会える

しかし、お兄ちゃんはどういうことなのか半年間くらい姿を消した
大学にもいなこと言つていた

お父さんに聞いてもなにも答えてくれない

そんな彼と会つたのは少し前の事だった

しかも、ありえない場所で

彼は女子校エリア、しかも私のいる中学の前にいた

久しぶりに会つたお兄ちゃんはいつもと変わらず元気だった

私を少しからかって、私が恥ずかしくなり別れた

これからは、きっと家にいてくれるだろ？と思
いが躍つた、またお兄ちゃんと遊べる、笑える

この感情は何だろう？

そんな彼と会つたのはまたありえない場所であつた
私の通う中学の屋上だ、しかもお兄ちゃんは校務員の格好をしていた
少ししか、見えなかつたが私が見間違つはずがない

そんなお兄ちゃんは走つて去つてしまつた

そんな彼を追いかける私がいた

「お兄ちゃん！」

「え？ お兄ちゃん？」

みんなが疑問に思つているといひだがそんなの気にしない
なんで、いじにいるのか聞こえてないといけない

ああ、危なかつた・・・・
そつ思つていたのは束の間

「お兄ちゅーん！」

「つ！」

裕奈が追つてきている！？
なぜだ！気付かれた！

やばいやばい・・・・

ここで、働いてるとか知られたら・・・・

知られたら？あれ？別にいいんじやね？

いや・・・・でも恥ずかしい！！！！

まあ、余裕で撒きましたわwww

僕がただの女子中学生に負ける分けないでしょ

一日が終わり

家に帰る

そして、ドアの前に誰かがいる

ピンポンを押してこない

なんで？そして誰？

僕エヴァみたいに気配で人は判断できないよ？

ドアまで行つてドアを空ける

「え？」

「裕奈？」

そこにいたのは明石裕奈であつた・・・・・

あ、ああ～、めんどくさいことになつそーだー

第1-4話—正体をばらす時つて大事だよな?—（後書き）

感想、指摘、誤字、脱字!なんでも受け付けます!

知り合いに作品を読ませたらすゞい直された・・・
直してないけどww

第15話—気付かれたらしゃーない、兄?として?—（前書き）

いやあ、ちょっとHACKセイと宿泊学習で忙しく一週間も更新できませんでした。これからは普通に更新していきたいと思います。

第15話—氣付かれたらしゃーない、兄?として?—

人生つて避けられないイベントつてあるよな?

受験とか、誕生日とか、成人とかさ・・・・・・

そして僕今まさに回避不能なイベントつていつもに遭遇したらいいまさかねー・・・・・・

裕奈が来るなんてな・・・・・・

第15話—氣付かれたらしゃーない、兄?として?—

「ゆ、裕奈?」

僕の前には昔と変わらず元気で外を遊びまわっていた裕奈が座っている

やばーって……
ビハシよ……

当然、裕奈は今ハッピーでなくその全く逆のアンハッピーな状態である

「ああ、やういえば裕奈バスケ部やつてるだつて？いいな、僕スポーツはいいと思うよ」
がんばって話しさうやうとします
でも、それません……」れつて運命？

「最近、お父さんびつてそこまで会つてないのか？」
それでも、頑張ります
僕運命に抗つてみます

「それがさー、この前友達がさ「お兄ちゃん」それがバカでさー「
お兄ちゃん！」はい・・・・・・・・
もう、無理なようだ・・・・・・・・

「言いたいこと分かつてるよね?」「

はい、分かつてます・・・・・

痛いほど分かつてます・・・・・でも、聞かないで!

「い、いやあ～・・・・・ 分からないなあ～」

目が泳いでいる・・・・・自分でも分かる

「本当に分からぬ?」

一層声を強める裕奈

「・・・・・・・・ 「お兄ちゃん?」はい、分かつてます・・・・・

女性つて怒ると怖いよね・・・・・

「なんで?』『男子大学生』のお兄ちゃんが私の中学の屋上でしかも、校務員の格好でいたのかな?」

いやあ、もつともです

一般人から見たらそりや問題だよな

まだ大学生の僕が働いてるのはおかしいだろ?」

「ええ・・・・・見間違え?」

自信なさ気に言つた僕は負けだらう

「私が、お兄ちゃんの顔を見間違えるわけないでしょー。」
「あ、でもそんな事聞げに言われても・・・・・・

「で、教えてくれる?」

「ダメって言つたら?」

「泣く、そして殴る」
「いや、やめてください
殴らないでください」
そして、泣かれるためなどへべての止めください

「でも、聞いたって事はあれは、お兄ちゃんだつたんだね」

「・・・・・」
「あつあつあつた・・・・・・

「で？」

もう、これは諦めるしかないのか……。
俺何か悪い事したかな？

「た、確かに、あそこにいたのは僕だが」「
何か良い言い訳おりてこーい！！！
神様お願いします！」

「あ、あれだ！そ、ボランティア！」
きたー！降ってきた気がする！

「ボランティア？つて、あのボランティア？」

「うん。いやあー、大学の単位の一つで社会への貢献が必要で。どうせやるんなら近くに学校があるんだし。やってみようかな？…と思つたんだよ」

「へえ・・・・・お兄ちゃんがボランティアか・・・・・え? そこまで意外かな。

別に僕がボランティアしてもいいんじゃないかな?

「でも、なんで私の学校に来るなら話してくれてもいいの? ・・・」

「どうやって、伝えると書いつのかな? 番号とか知らないよ? 裕奈教えてくれないから」

そうなのである

僕は出張が多いし、土田は勉強(課題やら)が多いので
基本的に家にない
勉強は図書館でやることにしている

その理由は「くらインターネットがあつても
さすがに、あそこになる本の情報量には勝らない
と、言つていいくほどの本が内臓されているのだ

「えーへ~もうだっけ? あ・・・・・本ただ、登録されてないや」

「だろ？ それで、連絡しろってほうが無茶だぞ？」

「でも。この前学校の前で会ったときに教えてくれても良かつ

たじやん

ああ、あなたがそんなこと（作者の心の声）

「あの時に学園長の許可がおりたんだ」

「そ、そつか・・・・・」

しょんぼりする裕奈

そこまで、僕に負けることが悔しいのか？

「ま、まあ。気にするなよ。次からなにかあつたら連絡するからさ
？番号教えておくよ」「

「絶対だからね？約束だよ？」

「ああ、分かってる。絶対だ、その代わり…………裕奈も何かあつたら連絡しろよ？僕は裕奈ならなんでも協力するよ？」

「うん。ありがと、お兄ちゃん！」

そう言つて、あぐらをかいている僕の腰あたりに抱きついてくる

「おこおこ…………裕奈？もう子供じゃないんだから、そういう事は控えよう？」

流石に中学2年生でそれは…………いや、普通ならいいのかも

しない

しかし、お前は肉体的に発育がいいので…………困る…

「いいじゃんべつにー」

「ふー、と言わんばかりに口を尖らせて言つ
しかし、その後すぐに笑つ

「久しぶりだなー」

未だ、抱きつきながら囁つ

「んー？何が？」

もう、僕は気にしない・・・・

気にしない！

「いいやつでや・・・・・・お兄ちゃんと2人で過ごすの・・・・・・

・

少し寂しそうに顔を下に向ける

「『』めんな？僕も色々あるからさ？」

そう言ひて頭を撫でてあげる

そうすると、裕奈が顔を上げ

「うん、それは分かってるよ

「でも、今からは僕も暇が出来るからさ。連絡くれれば遊べるよ

「ほんとー、じゃ、今からあそぼー」

いや、それって連絡してなくない？

「わかった、わかった。で、なにするんだ？」

自慢じゃないが・・・・・僕の家はなにもないぞ？

「んー、お兄ちゃんと色々話したい。ずっと話してないじゃん！」

「それだけでいいのか？ 言つてなんだが、別に買い物くらい連れて行けるぞ？」

金は、報酬とかでたくさんもらってるし

「うん、いいの。」

そう言つて、横に座りなおす

それから、裕奈と喋った
それは、もう喋った

内容は・・・・・と記す！

窓の外を見るともう暗くなり始めていた
時計を見るともう夕飯時だと、気付く

「裕奈、夕飯どうするんだ？」

時計を指しながら

「あ・・・・・どうじよっか・・・・・・」

「食つてくか？俺今から作るけど」
ま、一人分作るのも二人分作るのも変わらない……ってよ
く言ひしな

「うん、食べてく。ちょっと用事に電話するね」
そういうて、一携帯を取り出し電話をし始める

夕飯を作り始める

今日の献立は、チャーハン

一人だつたら確實に単品なのだが
裕奈がいることだし、スープでもつけるか

「ちょっと、おいしいかも」

それって、結構失礼なんじやないか？

特に最後の『かも』は失礼じやないかな？

「ま、僕も一人暮らしあじめてそれなりだからね。美味しいもの食べたいし」

「そつかー、私もこれくらい出来たらなー」

「できたら？」

「お兄ちゃんにも」駆走できたのにな

「ははは、あ、こいつかでここよ。それまで、僕がじて走るか

いひれ

やつにぬすと口を尖らせる

夕飯を食べる間も他愛もない世間話のよつなことを話し食べ終わる時計を見るともう、9時半を回っている

「裕奈、もう帰らないと。送つてこくよ
そつ置いて、キーを取る

「それ、なんのキー? 自転車?」
「自転車なんかじゃありませんよ?」

「これは、バイクの鍵

「え？え？え？バイク？お兄ちゃん免許持つてるの？」

持っていますとも

魔法使い、頼めば何でもくれます

「ああ、持つてゐる、ちょっと前に取つたんだ。裕奈が最初にのるんだぜ？」

その一言に少しうれしかったのだらう

裕奈は「はやべー」と急かしていく

そして、アパートから出ですぐのところに停めてあるバイクに跨ぐ

「裕奈、後ろ乗れ。そして、これ
と、書いてヘルメットを渡す

「ちゃんとつけるよ？見つかったら捕まるから
そう、魔法使いでも法律には勝てないようですが
ネギ君はあきらかに労働基準法に逆らっているけど

「これ、どうやってつけるの？」

まあ、そうだよな？僕も最初知らなかつたし

「はあ、ほり

そつこつて、後ろを向き裕奈のあいの下のところにある紐を締める

「ひづ・・・な」

前に向き直りグリップを握る

「ちゃんと掴まれよ?」

ちゃんと裕奈が腰に掴まっていることを確認する

夜の道を走る事5分くらいだった

その間、話すことはなかった

でも、裕奈はずっと強く、腰の周りに腕を回していた・・・・・

そして、裕奈の住む女子寮に着く

一応そこまでうるさくないバイクだが
夜に走ったからか寮生に気付かれたらしい

玄関から出できたのは数人の女子生徒
まあ、そりやそうか。これ女子寮だもんな

そこまで近くに行かなくていいだろ？
少し離れた場所で止まる

「ついたぞ、裕奈」

そう言って、裕奈を降りるなり促すが一向に動く気配がない

「裕奈？」

少し頭を後ろに向けると
規則正しい寝息が聞こえる

裕奈は寝てしまつたようだ

「つたぐ」

起こさないよひに裕奈の手を緩め支えながらおじる

そして、また起こさないよひに膝の裏と背中に腕を持つていて
持ち上げる

予想より裕奈の体重が軽かつた
なんて、言つたら殴られるだろ？
でも、裕奈も女性なのだと分かるくらい軽い

裕奈を女性として意識したことはない・・・・・
今は言つ切れないので、いつまでもやつであると思つ
いが

今までは兄妹感覚で接してきたし、今からもやつであると思つ

そう思うと、妹の成長を知った兄のような感覚だろうか
兄離れしていく妹を持つ兄のような感覚だろうか
そんな感じがした

彼女の体は温かかった

昔から彼女を触れ合っていたが
夜となり気温が下がった今彼女の体温はいつも以上に温かく、懐か
しく、愛おしくすら感じれた

体温なんて、誰も変わらないだろう？と言つかもしれないが
裕奈は特別だと思う。いや、特別だ

俗に言つ、お姫様抱っこをして、裕奈の知り合いである女子生徒
たちのほうに向かう

「こんばんわー」

と、気楽に挨拶してみるが

まあ、相手は僕のこと初対面なわけで

「い、こんばんわ

僕を裕奈の彼氏とでも思つてゐるのだろうか？

「あ、和泉さん。やほー」
知り合いがいてよかつた

「あ、い、いんばんわ」

前と同じようにお辞儀をしてくれるのは
なんて、偉い子なんだ

「裕奈、頼める?」

「あ、はい」

そう言って、和泉さんに頼んで裕奈をおぶつてしまひ
この間も裕奈は相当ぐつすり寝ているのか
起きずして移動をせりれていたのであった

「あ、あのー? 一ついいですか?」
背の高いポーテールの女子生徒が聞いてくる
「んー? いいナゾ?」

「あなたは、何者ですか?」

「んああ? 僕? 僕は東鈴つて言つただけだ。まあ、裕奈の兄? みた
いな者」

「兄?ですか。」

「はい。兄?です」

そんな事を言つていたときだつた

「ん~・・・・・お兄ちゃん・・・・・」

裕奈が僕を呼んだ

「どうした?」

裕奈に近づき聞いてみる

「ちやんと・・・・・連絡してね?」
眠そうな声で言つていたから僕と和泉さん以外には聞こえていなか
つただろう

「ああ、分かった。別にそっちからでもいいから」

「うん」

そう言って、裕奈から一歩下がり

「じゃ、僕帰るよ。お休み裕奈

「お休み～お兄ちゃん」

そう言つてすぐ帰るのであつた

え？周りにいた生徒？

早く帰つて寝たいんだ気にならない

そして、来た道を帰り

帰宅し僕は早々と寝るのであつた

その夜・・・・・僕は夢を見た・・・・・

第15話—氣付かれたらしゃーない、兄?として?—（後書き）

作者は別に大学生じゃありません。まだ高校生ですから大学の単位なんて知りませんが、僕の高校ではこういう単位があるので書いてみました。バイクとか詳しくないんで運転の描写はなしでした。すみません。

感想、指摘、誤字、脱字!なんでも受け付けます!

第16話—The Sign of Indication（前書き）

大変投稿が遅れてしまいすいませんでした。別に、これは作者の都合とはじやなく、ただ単に創作意欲がなかつたからです。まあ、そんな感じでボチボチ書いていこうと思います。まあ、学校も大変なんですけどね。

第16話—The Sign of Indignation—

夢を見た
闇を感じた

寒い空間の中僕は彷徨つた
なにか温かいものを探し求めた
人の温もりを手探りで探した

冷たい空間が果てしなく続き
僕は果てしない時間歩き
果てしない距離を進み

・・・・・・・・・・目が覚めた

それでも終わらない旅路

最近じゃ、桜も咲いて

『いやあ～、春だなー』と思つてしまつ季節になつてしまつたが

突然だが、僕は寝坊した

春眠暁を覚えず とも言つわけだし

え？ 寝てていいのかつて

別に僕朝の授業は元々ないわけだし

最近は学校の校務員なんてやつてるから大学には行つてないわけで

話によるとネギ君は無事
先生として正式に雇用されたようだ
めでたしめでたし

そんな今日この頃

ある 噂 が流れていた

満月の夜、桜通りに現れる

吸血鬼が

まあ、そんな事よりも気をつけないといけないことがある
廊下の曲がり角では・・・・・人に当たらなにように気をつけよつ
これが巷に聞く『廊下の角で美少女とぶつかつた』みたいなイベン
トなのか

しかし、これは受け止めればもつと好感度があがるのでは?
まあ、僕が寝坊してボランティア（と言つことにした）に遅れると
ころだつたから少し走つていたのも理由なんだが

だから、心の中で次に美少女にぶつかつたらちゃんと受け止めてあ
げよつと密かに誓つた瞬間であつた

そんなことを言つのは僕がたつたいまそんな状況に陥つているから
である

下に見えるのは青い髪

背の小さい青い髪の知り合い＝和泉さんである

「キヤッ」

僕にぶつかり和泉さんが転ぶ

「だ、大丈夫ですか？」

そつと即座に反応するのは野の性だらつ

「は、はい。大丈夫ですつて？鈴さん？なんでここにいるん？」

まあ、そりやびっくりするよなー
友達の兄？な人が女子校にいたら

「んー? 説明めんどくせこんで省きます」

「ええー? それじゃ、何もわからなーやん!」
「ま、そこは気にするな少女よ」

「あ、その紙、今日の身体測定のだろ? 運ぶの手伝ひよ?」

「え? でもー」「ぶつかつたお詫び」「じゃあ、お願ひするわ」
そう言ひて、紙を持ち彼女の速度にあわせて歩く事に
でも、なにか忘れてないか?

「ね、和泉さん? なんで走つてたの?..」

「え・・・・・・ そうやった! ネギ先生ー・まき絵がーー」
そう言ひて、走つてこつてしまつ

「やれやれ」

めんどくせこが、紙を持つてこる以上ついてこくしかなによつだ

そう言って走って追い、並ぶ

そして、教室に着くや否や、嫌な予感が！

「「「「何！まき絵がどうしたの…？」」」
一斉に扉と窓が開いた！

しかし、僕はすかさず首を扉と窓とは反対の方向に曲げる
それはもつ尋常でないスピードで

「見ません」

そう、僕は主張した

これが、僕の平和な朝の一描写でした

そして今は夜

桜通りの吸血鬼と言うのは
まあ、十中八九エヴァだろ？
というか、エヴァ以外だったら怖い

「と、まあ。なんでネギ君はこんなにあからさまに飛ぶのかな？」

つて、言つてもこの時代『ヒーロー』つて「まかせると悪ついだね

そして、飛んでいるネギ君に少しついて行くこと数分
どうやら屋根に落ちたようだ（エヴァが）

そして、エヴァの従者である茶々丸がネギ君の詠唱の邪魔をしていり
そして、ネギ君の血を吸おうとしたその瞬間
まるで、正義のヒーローのように神楽坂明日菜がエヴァの顔面にと
び蹴りをお見舞いした

流石にあれは痛いだろ？と吹き出すといひだつた

「くつ！なんだこれは！か、神楽坂明日菜！」

やつぱり、痛かつたらしいエヴァが自分の頬をわすりながら睨む

「えー？ エヴァンジロリンさんと茶々丸さんーあんたらが、今回の
犯人だつて言うの！」

明日菜としてはものすごい意外であつたのだろう
クラスで目立たないエヴァンジロリン（キャラ的に）と、茶々丸が
今回の犯人だつたのだと言つことが
それ以前に明日菜はネギ君以外の魔法使いをあまり知らないのだ

「ぐつ、一人くらい増えただけで私が引き下がると思うなよ
それでも、引き下がる気配がないエヴァ
しかし、ここで騒がれると困る
なにが困るかつて？」

屋根の下の寮の人達が困ると思うんだよね？
僕間違つてないはずだ

その思いを心に

僕はエヴァの目の前に瞬動で移動した

瞬動術も最近は使い慣れてきた

瞬動に使う魔力は

移動開始時（一步目）とブレークのときだけだ

そして、今回は屋根の上

非常に狭い床の上に見事ブレークをかける事に成功した
まあ、普通は出来るんだけどね

「エヴァ、今日は引いてくれないか？」

「鈴・・・・なぜだ？お前までなぜ私の邪魔をする？」「
エヴァとしては気に食わないのだろう

自分の呪いは本当はもう解けているはずなのだ
でも、とくことも叶わずに今までずっと待ってきたのだ

「」そこちわ東鈴さん

茶々丸はなちやんと挨拶をする良い子です

「え？ あんたこの前学校にいた・・・・」

と、神楽坂明日菜は自分の記憶を掘り起してくるもつだ（そんな
前じやないけど）

「騒ぎすぎだ。もしかしたら一般人に見られるかもしないだろ？」

「ふん！ そんなもの関係ない！ 私の呪いを解くのだ！」

まあ、そりや15年間待たされてるもんな

「ええ、じゃ、明日からエヴァは『下着で外を歩く幼女』みたいな
風に呼ばれるかもなー？ 今のまんまじゃ」

そう、エヴァは今媒体であつたマントをネギ君により吹き飛ばされ
下着姿なのだ

「いいのかなあ？」
笑いながら言つてみる

「う・・・・・」

相当嫌らしい

渋々だが引いてくれるようだ

「ありがとう、エヴァ」

そう言って手を振つて見送る

始終ネギ君は放心状態だったけど

「じゃ、僕も帰るから。ネギ君のことよろしくね神楽坂さん
そいつ言って僕は再び瞬動術で夜の闇に消えるのであった

数日経つたある日

僕は休日と言うことで買い物に出ていた

買つものと言つて、服、食品など日常生活用の物なのだが
なにせ休日、しかも学園都市麻帆良学園だ
人が多い

「はあ、憂鬱だ」

そう、僕は人ごみが嫌いだ
色々トラウマもある
例えばこの呪いとか
人ごみ・・・・・

服を買いに行き着きの洋服店に向かう
その途中であった
この時代にすごい珍しいものを見た

そう、ナンパである

それもなんかおもしろいほどの決まり文句の

「よお、ネエチヤン達なかなかかわいいじやねえの
「ビー？俺等と一緒に楽しい事しようぜ？」

などである

「はあ

深く溜め息をする

まあ、どうせこの世の中こんなものに引っかかる人はいない

しかし、その相手を見たとき

僕はさらに溜め息をすることになった

そこにいたのは、少し前ぶつかった和泉亜子、長身でポーラードールの女性

そして、僕の妹のような者、明石裕奈であった

渋々、しようがなく！

僕はナンパをしている人の後ろに行き肩を叩き

「あの～、迷惑だと思つんですけど～やめてもういいでじょ
うか？」

と、下手に出てみたのだが

まあ、それはいつも通りと言つた

「はあ？お前何？お前もこの子達狙つてたわけ？で、ごめんねー！
俺達が先だからー！」

ナンパAと名づけよう

「つか、餓鬼がいきがつてんじゃねーよー！」

ナンパBと名づけよう

「たしかにーぎやははーー！」

なんか、すゞしきついなー・・・・・・

「はあ、折角人が下手に物を頼んでるつて言つの……」

「は？何言つてんですかー？餓鬼は帰つて寝てろ！」

そう言つて、強引に押し退けようとするとその瞬間僕が一歩下がりナンパAの体制が前に崩れる

そこにすかさず腹を殴る

これ、常識！

「うぐ・・・・・・」

ナンパAが倒れる

「は、はつちゃん！お前！よくも！お前等！やつちまえ！」

そう言つて人々の中から数人のナンパーズが出てくる

「　　おらー　　」

3人が同時に殴りこんでくるがしゃがみ込むだけで自滅していった

そしてまた数人を足に引っ掛け転ばせたり
壁にぶつけたりで倒していく

最初にいたナンパBが残る

「ぐうー」

少し腰を落とし臨戦態勢らしい

「うあー..」

そうして突進しながら拳を出してくる

それを軽々と左手で弾き

「まずは、餓鬼、餓鬼とか言つてゐるナビセー..」

僕19歳なんだよねー..」

がら空きの顎を下から
アッパーをかました

たぶん、最後のは痛かったと思つ

「大丈夫か裕奈？」

「ありだとーお兄ちゃん！」「

まあ、裕奈だから助けたんだけねー
他の人だったら見て見ぬ振りだ

「まあ、かわいい妹のためだと思えば女いよ

やつぱり、無でござる

「うょっとせめてよ！みんないるのにー」

そこは普通『子供じやないんだからー』とかじやないのか？

「裕奈・・・・・・その言い方だと、『みんながいなければ良い』
と言つてくる様なものだぞ？」

指摘してあげよう

さあー恥ずかしがれ裕奈よー

「べ、別にお兄ちゃんなら・・・・・・いいよ？」

そんな顔を赤らめながら上目遣いで見ないでくれ

そう言つて裕奈の両肩を両手握る

「あのな、裕奈

「今のは冗談だ。真面目に答へなくてよかつたぞ

と、いつか聞いた僕が恥ずかしくなつてゐるんだが

「い、今のは冗談に決まつてゐるでしょー…もつ、お兄ちゃんつたらー。」
少しじ機嫌斜めにしながら僕に背を向ける

「みんな行こー！」

他の女子生徒を連れて離れていく

なんだか、裕奈との別れかたはいつもこんな感じだ
次からはもつと別の別れかたをしてみよつ

そして、その事を心に誓おうとして空を見上げたときだつた
青い空を横切る一つの影を見かけたのは

その影は長い棒に乗り

まるで、魔法使いのように空を横切つていった

(ああ・・・・・またネギ君か・・・・・)

次は何をやつたのだるうと

若干ヤレヤレ氣分で後を追つのであつた

そこは、森の中

麻帆良から程遠い山の中

熊や「オオカミ」が生息すると言われている森なのだが
ネギ君はその森に迷い込んだらしき

らしいといつと

途中まで僕も追えたのだが

途中森に入るところで木に思いつきり当たってしまい
自分の魔力探索に頼るしかなかつたのだ

別に僕の能力が低かつたのではなく

空中に漂っている魔力（杖が飛んでいるときに出していく）を追う
のは大変なのだ

濃度がまず、薄いそしてすぐに風邪でとぼされてしまつ
だから、「うしー」

「ああ、どこに行つたのかなあ」

そうして、探す事30分

お、いたいた

と、ネギ君を見つけたと思つたら

なんか、忍者といふんだけビ

どじょひ、あれつてあきらかに隠れつとしてるけど隠し切れてな
いよな

どじょひの忍んでない忍びなのか

ああ、つっこみたい！でも、つっこめないーーの気持ちは何だらうー。

「どうしたで、なぜか？」

「？」

少女の顔がする

でも、あの忍んでない忍びはあつちにこたわけ

と、隣を見みると

「をああー。」

その忍んでない忍びが隣に立っていた

「どうしたで、なぜか？」

いやいや、普通驚くだらうへな？

「こやあ、流石は忍者って感じだね」

「…………指輪は忍者じゃなこで、なぜか？」

「え？」

嘘だろー。

「拙者は忍者ではなこで」*じぞう*が

「あ、そつだつたのか。悪かつた」「なんか凄い威圧感と言つものを感じました

「分かればいいこで」*じぞう*が。それで、お主ははじで句をしてるので
「*じぞう*るか?ネギ坊主を追つてきたので」*じぞう*りつ?
「

「こやあ、もうここや。ネギ君も良い生徒に恵まれてるみたいだし。

」
そう言ひて、忍者を見る

「こやあ、それは譲れるで」*じぞう*な

「ま、そういうことです。では、僕は退散します。ネギ君の事はよ
ろしくお願ひしますね」

「うむ、頼まれたで」*じぞう*が
そつ言ひて立ち去るが

「お母、なぜなんでいるのか？」

「僕の名前は東鈴。みくではないけど、女っぽいって言われてる」
「そう、この名前、一般的に女の子の名前であるが
まあ、学園長がなんの意図でつけたのかは知らないけど
時々、女っぽい名前だって言われる

そしてそれが理由でなにかあるかと詰つと・・・・・ない！

「確かに、鈴とは女子の名前のほうが多うござるな。だが、そんな事はどうでもここはござるよ。」

「もう言ひて、もう言ひて、今度は聞かせて貰いたいよ。」

「ひむ、こつか手合せ願ひ

それは！」めざだ！

「ま、考えておくよ

心の中では違うと言つても
表では、ちょっといいキャラを作る僕は偉いと思う

そして、忍者である彼女以外誰にも見られていないだらうと確信し
たので

瞬動で帰つていった

ネギ君もいい生徒を持った
ま、少し見た目とかが怪しいが
きっと、僕なしでも立派な魔法使いになつてくれるだらう
これで、一安心

そして、次の日がやつてきた

『これより、学園内は停電となります。学園生徒の皆さんには極力外
出を控えるようにしてください』

そんな、放送が流れ僕たち魔法使いは前から伝えられていた位置
につく

そう、今日は停電の日

停電と言う事は学園結界も効力が弱まってしまうのだ

そうなると、いつもより大人数、というより、人員全員で警備をし
なればいけない

僕は、一人である
なぜだろうね？僕弱いのに
ま、僕は一番敵がこなさそうなエリアを選んだんだが
本当に予想が当たつたらしく誰も来ない

そんな感じで、ホケーっとしながら空を眺めていると
なにか点が見えた
その点は徐々に大きくなり
そして、僕の顔の寸前まで来たといふ、僕もよつやく気付きたつさ
に後ずさる

それは、人間だった
それも、良く知る人間だった

そこにいたのは、メイド姿で、犬歯をこちらこちらつかせる
旧世界で、最愛の妹

裕奈が立っていた・・・・・

感想、指摘、誤字、脱字…なんでも受け付けます！

第17話—譲れないモノ—（前書き）

最近気になつたんですけど。ネギつて飛び級して10歳で卒業したんですね？なら普通は何歳くらいで卒業するんでしょうか？明日歯を抜くからその間全身麻酔で眠る間に考えてみよう。

第17話—譲れないモノ—

チクタクチクタク

頭の中に鳴り響く

力チコチカチコチ

着々と進んでいく時間

しかし、僕はその時間の中一人だけ取り残されていた。
分からなかつた。信じたくなかつた。認めたくなかった。

なぜ、裕奈がここにいる！？

第17話—譲れないモノ—

夜道で会つ裕奈は一回目だ。

一度目は送つてやつた。

そして、二度目は今。

目の前に半吸血鬼かした裕奈が立つてゐる。

「ゆ、裕奈？こんな時間に何してゐるのかな？」
認めない・・・・・

「流石に、この時間だと明石教授にちゃんと報告するよ？」
信じられない・・・・・

「まあ、今からすぐ帰るつゝのなら」マスターが呼んでいた
「許すけど。」「
ますたー？コンティル？
知りたくない。分かりたくない。
でも、分かつてしまつ。これはエヴァの犯行だ。

実のところ、僕は裕奈には一生魔法なんて言葉聞かせたくなかつた。まず、一に危険、二に危険、三に危険だからだ。

既に長寿となつて20年余り生きてきて分かつた。

こんな世界生きていて良いことなんてない。

それなら断然普通に生きてもらつたほうが幸せだし。

きっと、明石教授もそう思つているだろう。

そんな、心配を壊してくれたのは、他でもないネギ君だつた。もう、彼が来たときから僕には変えられない、巨大な力で定まつた事だとわかつた。

裕奈に魔法はばれるだろう。それも、時間の問題だ と。

明石教授が何も言つていなあたり、彼はこれを了承したと見る。でも、それでも、僕は反対だつた。誰にも言わなかつたが、心のそこでは裕奈にはこんな世界見せたくないなかつたし、僕のことをずっと普通の兄としてみていてほしかつた。

そして、今現実として田の前にあるのは、『ばれる』なんとものよ
りひどい。

巻き込まれている。裕奈がエヴァの駒として動かされている。

裕奈のことだ、ネギ君が頑張つていると知つたら自分も助けようと
考へるだらう。

きっと、彼女は自分から魔法に進んでいくだろ。

それでも、許せなかつた。彼女を巻き込むというのが、僕には許せなかつた。

怒りがふつふつと湧いてきた。心のそこからいやな感情乱れてくる。

それでも、それを抑えた。

握りこぶしからは血が流れ。唇の皮は破けた。
何時かの事を思い出す。村が焼かれたあの日。僕が守れなかつた人々。自分の家族。

僕は小さく唱えた

「大氣よ水よ白霧となれ、彼の者に一時の安息を 眠りの霧・・・」

目の前に白い霧が雲散した。

裕奈はその中で小さく寝起きを立て眠りについていた。

そんな裕奈を見て僕は安堵した。
ほとんどの可能性、彼女はこのことを覚えていないだろう。
エヴァも一流の魔法使いだ、記憶が戻るなんてミスはしないだろう。
そして、眠ったということでその確立はほぼ100%だ。

裕奈を抱き上げ走り出す。

目的は元凶 エヴァンジェリン・A・K・マクダヴェルとネギ・
スプリングフィールド

おおよその場所は最初から分かつていた。

元々、警備の配置で橋だけが除外されている時点で、数名は察していたようだが。橋で戦闘が行われている。しかも、それは学園結界が機能していない夜。と言う事は、エヴァの力はおそらく幾分か戻っている。学園長が仕組んだとか、そんなことどうでもいい。僕はナギさんとの約束でネギ君の世話を頼まれている身だ。乱入しても大丈夫だし、きっとエヴァも乱入させる気だ。でなきや、裕奈を送つてくる意味がない。そして、僕がこれを快く思わないことも分かつているはず。

何時になく速度が速かつた。何時になく力が溢れた。
自分が許せなかつた。また 守れなかつた。エヴァでもない、
ネギ君でもない。
自分が許せなかつた。

「おおおおおおお！」

幾度となくあの日が頭の中で再生される。

燃え盛る大地。崩れていく人々。切り刻まれる悪魔。
僕はその中、死なせてしまつた。大事な人々を。

一気に魔力を解放し、天高く跳ぶ。
橋の上で戦闘が行われているのはわかる。

そうとなれば、そこに行きたいという願望が強くなつた。

虚空瞬動で橋の手前まで飛ぶ。そこにそつと裕奈を置いていく。
彼女の寝顔を見たのは久しぶりだったが昔と変わらずそれは幼さが
まだ残るものだつた。

彼女の寝顔に微笑み、そして反転して橋の上を目指す。自分でも分かる、心がじわじわと侵食されている。僕は今怒りを感じていた。

ネギ君の決闘？ 知った事か。

学園長の計画？ どうでもいい。

僕は僕の大切なものを傷つけたものを絶対に許さない。

「H・ヴァン・ジエリン・A・K・マクダヴェル！――！」
その名前を叫んだ。自分の大切なものを傷つけた者を。

「リンさん！？」

「誰！？」

ネギ君とその従者の神楽坂だろう。

「くつくつく。やっと来たか東鈴。いや、リン・イースト。」

「やはり、お前が仕組んだんだな。裕奈を使って……」
怒りが自分で増幅される。

「なんでだ・・・なんで、巻き込んだー?」

「なぜ?そんなことを聞くのか?いや、まず巻き込まれないはずがないだろ!このぼーやのクラスにいる時点で巻き込まれるのは確定だ。」

そんなこと分かってる。自分でもそう思っていた。

「それでも!なぜ、行き成り巻き込むんだ!別に巻き込まなくともいいだろ!別に、裕奈を使わなくてもいいだろ!」

「なら、他のやつ等は使っていいと?お前は自分の大切なものが安全なら他はどうでもいいのか?」

その質問は僕に聞いていた。『立派な魔法使い』なのかどうか。他者を大切にするのなら『立派な魔法使い』。利己的なものは『悪』に近い。そう、思われるだろう。でも、僕は間髪要れずに答えた。

「ああ、どうなってもいい。僕は、僕が守ると決めたものしか護らないんだ。」

僕の存在意義。護る。それは、僕がそう誓つたものにしか適応されない。

「ほづ？立派な魔法使いの見本が聞いて呆れる。」

「こっちからも質問だエヴァンジエリン。なぜ裕奈を巻き込んだ？」

直感で分かっていた。彼女の理由。そして、戦闘の開始。

「決まっているだろづ？そっちのほうが　おもしろい　からだ。」

「

戦闘の合図の用にその言葉が終わつた瞬間僕は動いていた。原動力は怒り。振るうものは力。目的は　なかつた。

瞬動からの氣で強化した拳を叩き込むも、エヴァに通用する事もなく受け止められる。

一体、どこからそんな力が出ているのかは自分の中では七不思議に入る。

「ふん、これが英雄の力か？身の程を

彼女が拳を作り力を溜める

知れ！！」

それを殴らなかつたほうで受け止めたと思ったが、威力を殺しきれず体が吹き飛ぶ。

吹き飛ばされながらも体制を整え吹っ飛んだ方向の木の幹に着地（？）する。

「なかなかの身のこなしじゃないか？しかし、英雄には程遠いぞ！」

それを追つてきたエヴァが突き一つで気を一刀両断する。

「つく

そして、間一髪で木の幹から離脱した僕は地面に転がりながら唱える。

「我ここに願わん、武人としての極みを・・・武神の舞！」

すべての動きがスローに成っていく。

エヴァの行動が見える。視える！

「ふつ！」

一気に瞬動で彼女の懷に入る。

ブレークを一気にかけ、慣性の法則でたまつた力を拳で彼女の横腹に当てる。

彼女も僕をふつ飛ばしたように吹っ飛び。

その隙にアーティファクトを出す。

「アデアツト。我難ぎ払う、我の敵全てを」

今回作るのは、刀ではない。

もつと攻撃的なモノ。

作るモノは最凶の姿。

作るものは狂った斧。それは、柄がないものだつた。全てが無粹な鉄で作られた斧。

「ふん、その武器はなんだ？『護り人』が使う武器ではないな？」
まるで、何事も起こらなかつたように悠々と立っていた。

「護るの本質は壊すこと。壊す事なくして護れるものはない！」
そう、言つて斧を担ぎ移動する。

この夜はあの夜にどことなく似ていた。

敵との対峙。護る決意。自分の中の怒り。

あの夜に戻ったような感覚。自分の何が変わったか分からない。いや、きっと何も変わっていない。だから、自分に怒りを感じている。

「あ、あああああーーー！」

一気に振り下ろすと、下にあったコンクリはやすやすと壊れる。そんなものをまるで木の棒でも振られたかのように避けていくエヴァア。

「おお、怖い怖い。」

「冗談を言つほど余裕があるらしい。」

しかし、冗談を言つている間も彼女の攻撃は止まらなかつた。僕の足首を掴み、一気に上空に投げられた。行き成りの事で体制を立て直す事もできない。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！氷の精靈25頭集い来りで敵を切り裂け！魔法の射手・連弾氷の25矢！」

飛来してくる、一本一本に致死の威力がこもつた氷矢。

それをすべて斧でガードするも、すでに限界だと訴えてくるひびが走る。

それでも、彼女の詠唱は止まらない

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！来れ氷精大気に満ちよ！」

白夜の国の凍土と氷河を！こある大地！！」

まるで、本当に大気が凍つたかのように思わせる温度。

僕は覚悟を決め呪文を唱える。

「我的盾、我を害するものすべてを弾く！」

僕の周りに結界が張られる。

「そんなものお！！」

二つの呪文が重なったとき火花が散った。

削れる氷河、響く轟音。しかし、その進行を止めることはできなかつた。

僕の盾はこんなに脆かつたのだろうか？
なぜ、僕は守れないのだろうか？護れたのだろうか？

僕の力は僕の心。

僕の心が弱かつたのだろうか・・・・
だから、僕は負けるのだろうか・・・・

迫る死の予感の中僕は考えていた。

テオになんて言えぱいいのか？ナギさんになんて誤りう。詠春にだつて会いたい。

今なら、あのアルだつて恋しく感じる。

僕の中で一つの気持ちが浮かんだ。

死にたくない！

チクタクチ・・クタ・・・・ク

時間が遅くなる

目の前の光景が薄れていく

カチ・・・・コチ・・・・カ・・・チコ・・・・チ

ああ、僕は死ぬのだろうか？
死にたくない。死にたくない。
まだ、やる事はたくさんある。
神じやなくていい。悪魔だつていい。何だつていい。
僕を生きさせてくれ。死なせないでくれ。やり残したことやらせ
てくれ！

カチン・・・・・

そして、死の恐怖が僕を飲む前に。
時間が、世界が、僕が、彼女が、

すべてが止まつた。

第17話—譲れないモノー（後書き）

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

なんだか前回の投稿から時間がたつてしまいました。やつぱし、学校忙しいですwwエツセイとかレポートとか。休み前になると課題とか色々固まるから無理くさいわww

第18話—静かな場所—（前書き）

いやあ、なんか歯を抜いた後、思つた以上につらかったです、初日は隣の家のベル、呼び鈴がずっと鳴つていたので寝れなかつたし（夜中中）。その後も、口の中縫つてたせいで食べにくい、喋るにくいで。あ、そうだ！全身麻酔！眠つてるつて感じじゃありませんね！氣絶つて感じでした。

第18話—静かな場所—

死んだ・・・・
分かる。血の気が引いていく感覺、全身が冷たくなる。意識が朦朧となる。記憶が流れ出す。

小さこときの事。

よくみんなと違つて虚められたつけな

ナギさんとの事

僕の唯一の友達だった

旅のこと

みんなで騒いだ事

テオの事

まだ言いたい事はたくさんあるのに

裕奈の事

護つてあげなきゃ

自分の事
あいつの事

自分の事

あいつの事

誰の事？

思考が止まる。

意識が鮮明になつてくる。

そして、やがて・・・・・

田を覚ます

第18話—静かな場所—

「ああ、僕死んだのか・・・」

田を覚ました時に最初にはいた台詞はなんと典型的なものだつたん

だろうか。

いや、目を覚ましたという表現は望ましくないかもしだれ。自分が本当は死んで死後の世界に向かっている途中のはずだから。

しかし、予想に反して体は動いた、すんなりと。

「死んだ・・・・のか？」

目を開け、自分の手を見る、そして足を見る。
足が・・・・ある！死んでない！

そんな感じで喜んでいるといふと、今時分がどんな状況にあるのかが不安になってきた。覚えている範囲だと、エヴァと戦つて、魔法が当た・・・った？

そう、その後何かがあつた。自分の現在の状態を考える事に必死だったのか、今自分が居る場所を確認する事を忘れていた。

自分の居る場所を確認するために立ち上がる。

素足の裏に感じるのは砂。耳に届く穏やかな音は波。
そこは、砂浜だった。

上にはちゃんと空があり。今さつきまでと同じように暗い空、星が輝いていた。

その空間は静かだった。

その空間に佇む一人の影。

自分の物ではない。いや、自分に影がない。

「やつと・・・・・・来ててくれたか。待ちわびたよ」
その影から声が発せられたのか、それとも直接頭に話しかけてきて
いるのか。

その声は、あまりにも穏やかで人間の物とは思えなかつた。そして、
反響した。

「待つっていた？僕を？ここで？」

自分の疑問をそのまま影に投げつける。

「ああ、待つていたよ。ここで、お前を。もうどれくらい経つか分
からないよ。でも、お前は来てくれるって信じてた。」

穏やかな声。まるで、母親、父親、祖母、祖父の優しい声のような
ものに聞こえた。

「そつか・・・・・・それは、よかつたよ。で、質問いいかな？」

「ああ、いいとも

「いりはまどいだ？」

そつ、ここがどこなのか未だに分からないままだ。

「ここは・・・・・オレの世界と言つべきかな。」

「キミの世界？それはまたスケールがでかいな。」
世界を語るのは、ナギさんと神様だけだと思っていたが、ここにも大物がいたようだ。

「でも、ここは小さい世界だ。オレはここから出られない。お前の協力がないとな。」

僕の協力？なにをすれば？それより、僕がこの世界に大きな影響を与える？自分はそんな大物ではないはずだ。

「僕の協力か・・・・・良いよ、協力しよう。何をすればいい？」

「そんな、簡単に引き受けて良いのか？どこかも分からぬ誰かも分からぬ相手だぞ？」

「ま、外の世界じゃ僕は『立派な魔法使い』なんて呼ばれてるけど。僕お人よしだからさ。」

頭をかきながら、悪い癖だよ と付け足す。

そして、影に近づいていく。一步一步。

そして、もう一步で触れるであろう時に影が動いた。

いや、影だけじゃない。世界そのものが動いた と言つべきか。
一瞬で影は僕から離れていた。

「触んじゃねえ！うつるだろ！…」「うつる？感染みたいな感じか？」

「うつるって何がさ？僕別段健康だよ。」

健康管理には自信がある。早寝遅起き…

「ああ…うつるんだよ、人間がだよ…」

そう言って、僕に今さっきまで穏やかだった波たちが襲い掛かってくる。

「うわっ！ ふは

一気に流され、砂浜に仰向けに倒れる結果をうむ事になった。しかし、それでも影とはそこまで離れていない。

「まあいい……………」一いつ、オレからも質問だ

意外なことに影も僕に質問があるようだ。

「お前は、なぜここに来たでしょ？」

僕がなぜ此処に着たか？なんで……知らないわ。

「知らない、分からない」

そう、理由なんて自分には分からぬ。

「キリは知ってるのか？」
逆に聞き返してみる。

「知ってるとも、オレ此処は俺の世界だぜ？教えてあげようか？」
あ？あ？とケンカでも売つてかのような仕草はうざかつたが教えて
もらひ事にした。

「まあ、要するにだ！お前は、自分が弱いと思つてる。正解？」

「まあ、強いとは思つてないな・・・・・・まあ、弱いって思つて
るよ」

「お前は、此処に前強敵と戦つていた。正解？」

「ああ、吸血鬼の真祖と戦つてた。」

「で、お前は勝てない、負ける、死ぬ、死にたくない、などの感情
を抱いた。正解？」

「なんで、お前がそんなこと知ってる？まあ、正解だ。正直死ぬかと思ったよ。」

いや、僕がまず生きているのか？それすらが危ういんじゃないかな？」

「まあ、答えはこれだ。『お前はそこ』に自分の限界を感じた。だから、此処に来た。いや、来なきやならなかつた』」

「なんだそれ？限界？来なきやならなかつた？なにそれ、予測されていた？」

意味が分からぬ。何を言つてる？僕が此処に来る事は決定された事項。そして、僕が限界を感じるのも決定事項。

「まあ、落ち着けよ。お前は、結果を出す前に『諦めた』」

諦め・・・・・

「そして、オレが現れた。」

そこで、説明が終わつた。

いや！何も分かつてないからな！

少しの沈黙の後、影は答えてくれた。

「なあ、真理つて何だ？正解つて？当たりつて？」

行き成り、哲学的なことを聞いてきた影に何の意図があつたのかは僕には計り知れない。

「そんなの・・・・・・知らない・・・・あえて、書いづなら。『誰も知らない』」

自分の考えを述べた。それは、まるで、小学校の国語の時間で答えるかのような細切れの答えだった。

「そう！誰も知らないんだ！なら、なんでお前は諦めた？なぜ、自分が負けると思つた？」

「それは・・・・・・」

それは　　自分の限界が見えたから・・・・・・

この影の言つている事は合っていた。

僕は自分の限界を定めてしまった。だから、諦めることができた。

「限界、だろ？」

「ああ」

影にはすべてがお見通しのようだ。

「まあ、いいで問題だ。」

問題？質問ではなく問題。それは解くものだろ？。

「オレとお前との距離はどのくらいだ？」

は？そんなの少し見て、憶測すれば分かる事だ。

「まあ、せこぜこ6・7メートルってところだな」

やつ、普通に答えると影はこやつと笑つた。

「はたして、本当にそつかな？」

「何を言つてゐる？明らかに、それくらいだろ？」

「くつくつく。言つただろ？『此処はオレの世界だ』と。お前が
感じている距離が本物だとなぜ分かる？」

「なつ！」

確かに、此処は影の世界。自分の感覚を頼りにするのは言られてみ
れば分かる事。

「もしかしたら、オレとお前との距離はあの星とあの星くらいある
かもしれないし、もしかしたらすぐ隣にいるのかもな？」
天に手をかざし横に平行移動させて一つの星を指した。

きっと、実際の距離は本当に遠いだろ。いや、それもまた僕の感覚。

「でもな？ 真理とか正解とか当たりてモノは蓋を開けてみればわかる。」

蓋を開ける？

「さう、理科の実験みたいにな。ある事象が本当だと言つてそれを実験によつて証明する。蓋を開けるとその事象は真実だった。」

「じゃあ、この場合は……？」

頭によぎつた言葉は『「つるだらー。』』

そう、影はオレに近寄りたがらない。

「誕生日プレゼント同じだよ。」

一步影に近づく。

後5メートル

「開けるまで中が何か分からぬ。」

もう一步。

後4メートル

「もしかした、欲しいものかもしれない、でも、もしかしたらいろいろなものかもしない。」

もう一歩。

後3メートル

「プレゼントの入った箱の蓋を開けるまでは何も分からぬ。
真実とは何か。」

後2メートル

「つまり、可能性は無限だな。そして
後1メートルのところでまた世界が動く。」

影が離れたと言つ事は

「お前も真実を分かつたわけだ。」

僕と影の距離は自分で感じていた距離と同じ。

蓋を開けるまで分からぬ。
それは、可能性を信じる事。

「でもな、リン」

初めて名前で呼ばれた。

「真実って言つのは、知らないほつがにこものもある。」
それは、分かるよつな。

「今までの行いは正義だったのか？それとも偽善だったのか？」

「今までお前等がやつてきた事は、本当に正しかったか？」
まるで、説教をされているようだった。

「ああ、僕はそつ思つ。」

「まあ、そつだうな・・・・・でもな、オレはそつ思わないと
したら？それはゞつやつて証明する。」

「なつ・・・・・そなものの証明できないー！」

「そつだよな？なら、それが真実だと誰がわかる？本当に人は助か
つたのか？」

「助かつた！この目で僕は見てきた！感謝する人たちを！」
行き成り熱くなってきた。僕の何が分かる！お前に！

「お前はその手は幾回もの命を殺してきた。それらはどうなる?感謝するのか?ばかばかしい!お前は恨まれているんだ!感謝される以上に!」

「」

それは、覚悟していた事だった。でも、しゃがれると痛い……。

そして、最後の発言が来た。

「本当にナギ・スプリングフィールドをお前は護つたのか

?

それを最後に世界が消えた。
影も消えた。すべてがくろに染まつた。
でも、意識がはつきりしていた。

最後の質問のせいだ。

僕は、本当にナギさんを護っていたのか・・・
護っていた、ナギさんがそう言つてくれた。でも、そつ『言つてくれ
れた』。

それが真実かどうかなんて分からぬ。意味が分からなくなつてく
る。

自分の存在意義が一気に崩れる音がした。

本当は、護つてなんか居なかつたのかも知れない。
本当は、護つてほしくもなかつたのかも知れない。
本当は、護つてもらつて居たのかも知れない。

精神が段々悪い方向に流れしていく。

分からぬ、分からぬ、分かれぬ。

真実、正解、答え、正義？

すべてが、分からなくなる。

自分が一体なんだつたのか・・・
忘れてしまいそうだよ・・・ナギさん

そして、やつと意識が落ちていった。

* * * * *

3人称SIDE

リンがあの世界に行っていたのは、現実で言つ数秒の出来事だった。今、リンはエヴァの魔法によって落ちている最中である。本来ならもつと深手を負っているはずではあったが。

「リンさん！」

リンを心配するネギ。

「だから誰なのよ！」

未だに状況について来れない神楽坂。

しかし、エヴァは満足していなかつた。
あの威力からして体の損傷が少なく見えたからだ。

よつやく、リンの体は地に落ちた。

リンにとつては数十分ぶりかもしない。

誰もが、予想していなかつた。まさか、彼がまた立ち上garることを。

そう、彼は立ち上がつた。

平然と、まるで何もなかつたかのよう、服についた埃を払つてい
た。

「なつ！なぜ、平然としているリン・イースト！お前は私の一撃を
食らつたはずだ！」

エヴァが訴えかけた疑問は普通の物だ。しかし、彼にとつては愚問
だつた。

「真実とはなんだ？真祖」

それは、まるで彼ではないような口調だつた。

「真実？そんなもの知るか！答える！リン・イースト！」

更に強く言つ。

「オレとお前、どっちがこの勝負勝つと思う？」

この質問は答えるまでもない、といつたふうにエヴァは答えた。

このとき誰か気が付いているだろうか、彼の微妙な変わりに。

「はん！ そんなの私に決まっているじゃないか！ 私は真祖の吸血鬼だぞ！」

「そりが……くづくづく。」

そう、彼は笑った。笑っていた。

「何を笑っている！ お前はどんな状況が分かっているのか？！」

彼女は、戸惑っているのか、それとも怒っているのか。
いや、きっと両方だろう。当然の事だ。絶対勝利と思つた場面。相手が立ち上がり、次第に笑つたらどうだろう。強く感じてしまつだろ。バカにされている気分になるだろう。

「残念だったなあ、真祖！ ……この勝負『蓋を開けるまでは』結果なんて分からねえんだよ！ ……！」

まるで、狂気に犯されたかのように、彼は吠えた。

まるで、それは彼でないようさえ感じるほどだ。

第18話—静かな場所—（後書き）

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

第19話—長い夜の終焉（前編）

いやあ、今長い休みに入ってるんですけど……暇で暇でWでも、なんだかすべてのことによる気がなくなってしましましたね。でも、なんだか最近他の二次創作の更新も遅くなっている感じでがして、早く次が読みたいと思ってしまいます。もしこの作品にそう思っている方がいたのなら、すみませんでした。

第19話—長い夜の終焉—

精神が乗っ取られる。

自分の体が自分の言つことを聞かない。
まるで、意識の奥で鎖に繋がれているようだ。

身体が思い、口すら動かない。

口を開け、喉を動かす。しかし、それは音として出でこない。

暗闇の中僕はじっと待つしかなかつた。

このすべてが悪い夢だと。

実は、全部嘘でした、と誰かが言つてくれるのを。

リンが地面を蹴りエヴァに近づいたのは一瞬の出来事だつた。

以前よりも、より速く、より正確になつていていたその瞬動に驚きを隠せないエヴァだったが、さすがは600年生きた吸血鬼。

完全な死角からの攻撃を咄嗟の判断で受け止める事に成功した。しかし、それでも勢いを殺しきれずダメージは通つていた。

「お前は何者だ！リン・イーストではないな！」

そう、今さっきまで戦っていた人物ではない。

瞬動の速さ、死角からの攻撃。どちらをとってもその人物とは似付かなかつた。

「オレが誰か？それは愚かな質問だな！オレはオレだ！」
さも、当然とも言つようになその人物は答えた。

そして、手を前に突き出した。

その動きに警戒してエヴァは構えを取る。

「我難ぎ払う、我の敵全てを」

それは、紛れもなくリンのアーティファクトの能力であつた。
そして、作られるのもいつもの刀だった、しかし。
ある一点においてそれは違つていた。

リンは不敵な笑みを作りそして刀の柄を握った。

その時異変が起きたのだ。その刀全体にひびが入った。

しかし、リンはそれを気にせずさらに握る力を強くしていく。

そして・・・・・最後に砕け散つた。

その破片は壊れたという事実に反し、きれいだつた。

光のかけら達が雪の用に散つている。

しかし、その量は小さなものであつた。刀を割つたのならばもっとあるはずだ。

案の定、リンの手の中には一本の刀があつた。

全てが赤く染まっている。

柄から鞘の先まで全てが赤。

「なんだ、その不気味な刀は？それに、それはリン・イーストの能力じゃない。」

「ああ？これが。まあ、あいつにこんな事できるはずねえよな。
そして、その刀をズボンのベルトにかける。

「オレに気付かないんだからな。」

そして、刀を鞘から出す。

鋭い音が周囲に流れる。

それと同時に、ボオツツと何かが燃え上がる音がする。

紅い炎とともに寸前まで黒い髪が、金色に変色しあじめる。

そして、刀を半分抜いたとき変化が終わった。
金色の髪に金色に眼。それは、異様だった。

見ているもの全員を戸惑わせた。
なにをもってして変化が起きたのか。
見た目以外に何が変わったのか。

「これが、オレだ！」

そして、刀をすべて抜く。

また一際大きな炎が刀身から紅く燃え上がる。
やはりと言つべきか、その刀身は真っ赤だった。

そのとき、空気が変わった。

空気が揺れ、塵が待つた。

圧力といつても過言ではない変化。

リン・イーストの魔力量が一気に跳ね上がったためである。

「なつ！」

これにはエヴァも驚くしかなかった。

「うあー！」

驚いているエヴァを気にすることなくリンは切りかかる。
間一髪でエヴァはそれを横に飛び避け、滑らかな動きで受身を取る。

「ちー！」

今までのコンなら詠唱する暇があつたが、今のリンでは詠唱をする隙がない。

「その程度か真祖！」

しかし、リンの攻撃は続いた。

猛攻。

「なめるなあ！『断罪の剣』！」

その剣はこの世界でなら触れたものすべてを切る剣だ。しかし、リンはそれを刀で易々を受け止めた。

エヴァにとつては驚愕の連続である。

人が変わっていること。

魔力の増加、断罪の剣が受け止められる。

「残念だつたなあ！オレの刀はこの世の理じゃねえんだよ…」
そしてまた切りかかる。

驚きながら後ろに飛び攻撃を避けたエヴァ。

これを可能にするのは彼女の経験の豊富さだろう。

「なんだその刀は…・・・」

口から出たのは、激しい怒りではなかつた。

ふつふつと自身のそこから湧いてくる静かな怒り。

「「」の刀か？緋陰ひかげつていうんだけどよ。」」こつはなー

刀を振るつとはとても言えない雑な振り方で襲い掛かる。

血に飢えてるんだよお！」

そして、戦いはエヴァにとつて防戦一方になり始めた。いくら百戦錬磨のエヴァでも、今は力が大半封印されている状態だ。それに加え、相手は攻撃し続けている。この状態で魔法を行使することはできない。

必然的に、すこしずつだがエヴァは体力を消費していくのであった。

「どうしたーどうしたあーさつきまで威勢はどうにいつたんだあ！
ああー？」

容赦などない。少しずつ弱っていくのが分かつていながらも攻撃の手を緩めない。

刀を振れば木々が倒れ、地面に亀裂が走る。
エヴァがその斬撃に当たれば腕の一本や一本がすまないだろう。
最悪、身体が真っ二つ。

「くつ

すでに言い返す暇すらないエヴァ。

そして、それを少し離れたところで見ているネギたち。

「だ、誰よあれ？え、エヴァちゃんつて強い魔法使いじゃないの！」

なんの事情も知らない、ましてや魔法に触れて間もない神楽坂だ。驚いて当たり前だろう。エヴァのことは「強い悪の魔法使い」くらいしか知らないだろう。

「あ、あれは僕の知り合いのリンさんで、魔法使いです」
自分の知っている限りの情報を与えるが、元々自分もそこまで知つ
ているわけではないのだ。
自分の家の世話をしてくれた人。それくらいしか知らないのであつ
た。

レバノンの政治情勢とその影響

て

そう、それだけが不可解な点であつたのだ。

者には、彼か『あの』リン・ヤーストだと『言』いていた。

そんな疑問だらけの一人とは違い、エヴァは苦戦していた。しかし、負けると思つていなかつた、いや、そう感じていた。長い経験の中で彼女は自分の勝敗までもが直感で分かつていた。だからこそ、自分の感覚に頼り耐えていたのだ。

一発逆転の好機を。

そしてその時が来たのだ。

「ぐううううー！」

行き成り、リンが自分の胸を掴み苦しみ始めたのだ。刀はすでに地面に落ち、彼の膝も地面についていた。

そこにすかさず切り込むエヴァ。

断罪の剣を思いつきり上から下へ振りぬいた。

苦しみながらもリンはそれを後ろに大きく飛び回避するが、そこで身体が硬直してしまった。

SHDEリン

鎖がゆるくなつていく。

手足が動き始める。

視界もクリアになつていく。

まるで今自分がやつてていることを第3者の目から見ているようだ。自分が動いているのは分かつてているのだが、まるで他人が動いているように見える。

そして、鎖が完全に解けた。その時、僕の動きが止まつた。

エヴァが攻撃してくるのが分かる。

自分の視点からそう見える。戻ってきた。自分の世界に。

咄嗟のことだつたが、後ろに跳ぶことで回避する。そこから横に回避しようと思いついたのだが、あることに気付いた。自分の背後にある存在に気付いたのだ。そう、そこにいたのは眠っている裕奈だつたのだ。

ここで、もし僕が避けてしまえば、斬撃の衝撃波が裕奈を襲うだろう。だから、僕は避けるわけにはいかないのだ。

そこで気付く、武器を何も持っていないと。

さつきまで持つていた刀は地面に落ちている。

しかし、そこが謎なのであつた。自分のアーティファクトで作られた装備は少しは意識していないと保たれないものだ。

しかし、地面に落ちている刀はまったく意識していない。

そこから導かれる答えは一つ。それが本物だということだ。

しかし、自分の能力に無から有を作るほどの力はないはずなのだ。

しかし、今はそんなことを考えている暇はないのだ。

今この斬撃を防がなければいけない。

「我の盾、我を害するものすべてを弾く」

次こそは、と思い結界を作る。

しかし、また・・・・・失敗に終わつたのだ。

攻撃の途中で結界は壊れてしまい斬撃を逸らす事しかできなかつた。逸れた斬撃は肩に当たり肉を裂いた。

しかし、裕奈にあたる事はなかつた。

地面を抉り、方を裂き、後方の木をなぎ倒した斬撃はどこで止まつた。

思っていたより肩の傷は痛むことなく、血が流れているだけの用に感じた。

しかし、自分の感覚が鈍り始めているのだと分かった。

「ああ、またあの世界に戻るのか？」

そう思いながら最後に言葉を紡いだ。

「ちょっと迷惑かけたみたいだなエヴァ……………」「ごめん」
そして僕は意識を手放し、地面に・・・・・かっこ悪く顔から倒れたのだ。

第19話—長い夜の終焉—（後書き）

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

第20話—優しい—（前書き）

なんというか、全然投稿していなかつた。

最近は、東方とかのssにはまつてしまっていたらネギまのssをまた色々読んでいた。なぜかは知らないwwそれで、自分のssを読み返してみたら糞みたいに笑える文章で、最初のほうから少し修正していたら、なんか新しい話が書きたくなつたのでちよつと書いてみました。

第20話—優しい—

あの夜が明けてから数日間経っている。結局あの後、ネギ君とエヴァが戦いネギ君が勝つたらしい。そして、僕のことだが 何も報告がない。どうやら裏でなにか取引やらなにやらがあつたようだ。たぶんエヴァがやつてくれたんだろう。

やっぱり、エヴァは優しい人、基、吸血鬼だ。

第20話—優しい—

今田はなぜか、本当になぜか… エヴァに呼び出された。まさか、朝っぱらから仕事用の携帯に着信があつたかと思うと、そこに表示されていたのは『学園長』の名であつて、決して『エヴァンジェリン』などではない。

しかし、その主はエヴァンジェリンであり、何かかすかに学園長のうめき声などが聞こえたのは聞かなかつた事にしよう。用件はこうだ

『今日、私の家に来い。話がある。ブチッ……』

行き成り且つ印象深く、そして相手が肯定も否定する暇さえ与えない。

まあ、それでも彼女の元へ行くのだが。

エヴァンジェリンの家は学園の女子寮では、なく、彼女自身のログハウスを持っている。

そこにはエヴァと絡繰茶々丸という同級生、どう見てもロボットではあるが、が住んでいる。

歩く事數十分。

未だあのエヴァとの戦闘の疲れが抜けていない身体には少し辛い距離であったかもしねれない。

少しだけ肩を上下させながら呼び鈴を鳴らすと『明らかにロボットだろう』と思わせる耳を持つ少女がドアを開けた。

「いらっしゃいませ東様」

礼儀正しく、お辞儀をしてきたのでこちらも会釈してしまった。

「よつやく、来たか阿呆が

それとは対極的に登場早々罵倒してくるエヴァだが、まあそれは彼女の持ち味なのだろう。

個性は大切にするものだ。そう思つておひづ。

「やあ、H'ヴァ」

ヒルヒルは普通に挨拶する。

その答えが気にくわなったのか、フン、と踵を返して室内に戻つてしまつ。

きっと、これは『付いて来い、阿呆』みたいな感じの意味だひつ。

そして付いていきリビングに着き、H'ヴァがソファに座つたのでその隣に座る。

「なぜ隣に座る」

疑問に思つたのだろうか。それとも、本当にいやなのだろうか？

「普通、ヒルヒルときは対面に座るだらうが」

そして、対面にある椅子を指差す。

これが格差社会か？と想像をせぬよつて、ソファのほうがすわり心地がよさそうだ。

「いや、その椅子すりこり座りにくそうじやないか？」
率直な意見を述べるとまた、フン、と鼻で笑われた。

「当然だろ？ そういう風に作つたんだ」「いや、何が当然かしらないけど、なんなんだらうこの扱いは？」

「座るなら僕はすわり心地のよさそうなまうがいいね
そつこつて、一層くつろぐ様に座り込む。

「それとも、エヴァ。僕が隣に座るのが嫌なのかい？」
一応聞いてみる。

「ああ、嫌だね」

即答された。聞鬱いれずに言われたよ。

「そ」

短く返事をする…しかし、決して動かない。

沈黙が流れる。じゅらりも話さない。

「つて、動かんか！」の阿呆が…

しかし、エヴァが我慢の限界に達したのか怒鳴つてきた。

「いいじゃないか、別に」

「嫌だと言つただろ!つー」

「嫌と言われたから座つてるんだが？」
少しからかつてみる事にしよう。

「じゃあ、ものすごく座つてほしー!ほり、あっちの椅子に座れ!
早く!」

「なんだエヴァ。そんなに僕に隣に座つてほしかったのか。そうな
らやうと言えばいいのに」「
そつ言つてまた動かない。

「がああ——!—!

そしてもう怒りの頂点に達したのか言葉すら出てこない。

そんなときには救世主は現れた。メシア

「お茶を持つてきました。どうぞ」

とてつもなく礼儀正しく、ロボットと言われないと分からぬいく
らい人間らしい動きをする茶々丸が紅茶を持ってくれたのだ。

「あ、ありがとう! やってます絡繆さん」

「どういたしまして」

そうして、まだどこか別の部屋に出て行つてしまつ。

その後、エヴァにも紅茶を進め、少しティーブレイクを洒落込んだ

後に彼女は話し始めた。

どうやら座る位置は諦めてくれたようだ。
世の中諦めが大切な事もある！

「で、話というのだがな」

それと同時に一枚の写真を見せてくれる。

それは数日前の戦闘のときの写真だ。きっと茶々丸さんが撮ったものだろう。

「自分で、どう思う？」

そこに写っていたのは僕。

それは紛れもなく僕。直前の僕と同じ服装。
同じ顔、同じ目の色。でも決定的に違う。
髪の色が金に燃えている。

「自分で、分かりません」

わからない事だらけ、しかしあかる事

「でも、僕が意識を失う直前。エヴァの視点だと僕が吹っ飛んでいるときだ。そのとき、おかしなことがあった」

そこで出会った人物。名乗らなかつた人物は『彼』と呼んだ。彼の世界。彼の問い。

世界の風景。そのときの感情。

「そして、意識を取り戻したときには裕奈を守つて、すぐに意識を失いましたね」

神妙な顔つきで僕の話を聞くエヴァ。

その口がゆっくじと開く。

「さうか」

そして、手を顎にあて考える。

「付いて来い」

手を振り歩いていく彼女につれてこよな地下だった。

ああ、どこにあつたか?などと言いながらそこに積み重ねてあつた荷物をどかし始める。

そして、探し物はすぐ見つかったのか、じつちうに持つてきたのは通称『別荘』、外と中の時間を変えてしまつところマジックアイテムだ。

そして強制的にその中に連れて行かれる僕。

「ほれ」

と言われて、何かをじちうに投げてくるエヴァ。

手元に綺麗な放物線を作り飛んできたのは一本の刀であった。
真っ赤な真っ赤な刀。

「ひかげ
緋陰といふらしい」

「といふらしい、とは？」

意味が分からぬ。

エヴァほどの人物なら自分の持ち物の名前以上は知っているはずだ
るべ。

「まつたく… その刀はどんな魔法で検査しようともまつたく分からん
のだ。緋陰という名前もお前が口にしただけだ」「
僕、というのは意識を失っている間に戦っていた僕だらう。

「しかも、私ではそれを抜く事ができん。まつたく、意味が分から
ん… ほれ、お前が抜いてみろ」

刀を抜くように促してくるので、素直を刀を抜こうとする。
そしてあっさり抜けた。

鞘と同じ真っ赤な刃があらわになる。

「やはり、貴様しか抜けんようだな」

「ああ、そうみた　　」

台詞が途中で阻まれる。

身体の中に走る稻妻のような痛み。
身体がグラつき片膝を付いてします。

ボオッ

何かが燃える音がした。

自分お前髪が少し見える、でもいつもと違う。
その髪は　　金色であった　　。

「ぐあ……」

痛い痛い痛いいたいいたいイタイイタイ！！

全身が悲鳴を上げる。

そんな時、脳裏によみがえる記憶。

焼かれた村、殺された家族、石にされた妹……

殺せ……

許すな……

「ひむ…

ゆるすな…

自分に語つてくる影が見える。

でも見えない…どこの誰で、性別も年齢も分からぬ。

夢に取り込まれる…もうだめだ。

そう思つたとき僕を呼び戻したのは

「落ち着け、ゆっくり刀を鞘に戻せ」

落ち着いた、エヴァの声であつた。

我に返ると、痛む身体を無理に動かし刀を鞘に戻した。
鞘に完全に収まると、髪の色が次第に戻つていき、身体の痛みも引
いていった。

「大丈夫だ」

そつと背中を撫でてくれるのもエヴァだ。

エヴァが優しくて、なんか涙が出てきた…

それから少し時間が経ち、本当に落ち着いたのでエヴァが話し始める。

「分かつただろうが。あれはお前だ。あの姿になる条件はおそらくその刀を抜く事だろう」

あの姿。金髪の自分。跳ね上がった魔力量。

「私の推測だが

一度区切り僕の目を見て言う

「お前は魔族に侵されている」

その事実は、なんとなく分かっていた事であった。

人間の僕は、あるとき大きな負傷を受け、魔族の血で生きながらえた…らしい。

「いつものお前からは魔の匂いは微かにしかしないが、解放時のお前は魔族のそれだ」

エヴァが言つのだからそういうのだろう。なんたって、吸血鬼の真祖

だ。

「… そ、うか」

「お前は別段魔を拒否している様子もない。あの、痛みは拒否反応だ。だとすると、魔がお前を拒否している」

その後、何か心当たりはないか？」

と付け足した。

心当たりはある。

あの世界に赴いたとき。

『彼』は言った 『つづるだろー』 『人間がだよー』

これは拒否されているのだろうか？

その事をエヴァに話すと。

「その魔族、どうやら本当に人間の事を毛嫌いしている奴らしいな
お前のせいじゃない、と慰めてくれた。

「しかし、お前がその能力を使いたいのなら、どうにかしてその魔族を取り入れなければいけない。」

「そんなこと可能なのか?」「少し考えた後エヴァは答えた。

「魔族は基本、強者の言つ事は聞く。もし、もう一度『奴』の世界にいけたのなら。次は、殺しあう事になるだろつ。その勝者がお前の体の持ち主となる」

今度がいつかは分からぬ。でも、そのときまでにドアのことはできるだけやりたい。

「ならエヴァ、」

そう言つて、エヴァに向き直る。

「俺に稽古をつけてくれ」

そして頭を下げる。

「フン、別に言われなくともつけてやる、お前の血は微妙に美味しいからな」

そう言つてそっぽを向いてしまつ彼女は本当に優しいと思つ。

かくして、僕とエヴァの稽古が始まる事になった。

第20話—優しい—（後書き）

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

エヴァってこんなに優しかったっけ？
まあ、別にいいけど。

第21話——テートじゃない！断じて違う——（前書き）

引き続き、修学旅行前の話です。

なにか調子にのつて連続投稿してしまいました。本当になんでこんなにエヴァが優しく見えるのだろうか。

久しぶりの更新なのにたくさんお人が読んでくれて作者は幸福値上昇中。

ただいまの状況

PVアクセス200000突破

ユニーク20000突破

です

すごくないと思うけど一応。

今後もよろしくお願いします。

第21話—テートじゃない！断じて違う！—

あの日からまた数日経つ。

その間僕はエヴァの別荘の中でずっと鍛錬に励んでいた。
もちろん講師はエヴァだ。

エヴァの下で、魔法、体術とその他もうもの知識や判断の仕方を
学び。

エヴァや従者の茶々丸やチャチャチャゼロと模擬戦などをしていた。

第21話—テートじゃない！断じて違う！—

「今日もお疲れエヴァ」

別荘から出ると本当に不思議。

中で一日過ごしたのに外では一時間しか経っていない。

タカミチ少年はこれを使いすぎて老けたらしい。

「礼などいらん。それより早くチャチャチャゼロにべらり勝つてみる」と、無理な注文をのたまつたのだ。

チャチャゼロ。普通の小さな人形に見えて、凶悪にして凶暴。刃物を振り回し、その力は化け物じみている。

「ここ数日ずっとこの調子だが、一つ気になる事がある。

「なあ、エヴァ。なんでお前は僕にここまで協力してくれるんだ？」
エヴァは吸血鬼。しかも真祖だ。
人間はあまり好きではないはずだし。ましてや、こんな弱い僕に協力するのは分からぬ。

「言つただろ？　お前の血は微妙に美味しいのだ」
いつ聞いてもこの一点張り。

エヴァの家からの帰路、タカミチ少年に電話してみた。
もちろん生活用の携帯でだが。

「よつ、タカミチ少年」

『こんにちわリンさん』

何か元氣のない返事が返ってきた。

「どうしたんですか？元気がありませんね？」

『ちよっと…仕事が。で、どうしたんですか？』

相当大変らしい。

タカミチ少年が老けたのは別荘のせいだけではないようだ。

「ああ、最近エヴァが妙に優しいんだ。話しただろ、僕の体がどう
じつの話」

一応学園長と昔の仲間であるタカミチ少年には体の話はしてある。

『ええ、それはたぶん』

それからタカミチは語った。

エヴァは人間から迫害されていたらしく。

だから、魔族に対しては割りと優しいほうだと。
そして付け加えた。

本当に血はおいしいらしい。

それと彼女は最近暇らしい。

最後の一いつで台無しだった。

「そかそかー」

そつ言つて電話を切つた。

その後すぐの事、一通のメールがやつてきた。

* * * * *

次の日の朝

ベンチに座りながら本を読んでいたところ。

「やつほ~」

と、和やかな挨拶をして登場したのは我が妹分の裕奈だ。

どうやらこの様子を見るとなにか記憶はないらしい。
安心である。

「おはよう

本を閉じ立ち上がり、裕奈の来た方向を向く。

今日は休日、故に裕奈は私服。当然僕も私服だ。

「じゃあ、今日ようじくねー。」

「うひひひひ」

今日の予定、それは裕奈との買い物。

来週から修学旅行へし、そのときのための買い物らしい。男の僕からしたらそんなこと必要に思えないが、乙女心…男には分からないものだ。

それから裕奈に連れられ、洋服店に行き。

これがいい？ それとも、こっち？

などと、たくさん質問をされながら買うもの買うものを持たされる。小物店なども散々回り、その後昼はんを食べるためにカフェに入る。

裕奈はどこからこの資金を調達したのか… それは謎であった。そこで事件が起きたのだが。

「これはまた偶然だな」

と、自分たちの数テーブルほど先の客を見る。

どうやら、あちらはこっちに気づいてない模様だ。

「どうしたの？」

どうやら話しかけてこない僕を見て不思議に思つたらしくので、客を指差す。（行儀が悪いから真似はしてはいけない）

「え……」

そこに座っていた人物。

それは

「『のかと…ネギ君！』

近衛このかとネギ君であった。

その後、裕奈が『これは禁断の恋の予感！？』などと言い始め、結局ネギ君たちの後を追うことになった。

「『いいフンイキー！』

となぜか隣に立っていた人物と台詞が被つた。

「裕奈！？」 「桜子！？」

と、どうやら知り合いのようであった。

なんか嫌な予感しかしないんだが。

と、いうか。何が『禁断の恋の予感！？』だ。

それが本当だつたら、僕が学園長とかに報告しに行かないといけないじゃないか。

「裕奈は何をしてるのかな？」

「え！？」

その問いに赤面する裕奈。

「おい、それは誤解されるだらけ。」

「ちょっと買い物に付き合つただけですから、なにかよからぬ誤解はしないでくださいね？」

「こいつ」と代わりに僕が答えておきました。

「あ、この前からちょくちょく学校で見るようになった人じゃん」
勘がよろしいではないですか黒髪の人。

「はい、私は東鈴という者です。麻帆良女子中で公務員のボランティアをさせてもらっています」

「へえ、そんなボランティアだつたんだ。あ、私は釤富円、^{くざみや} 裕奈の
クラスメートだよ」

なにやら落ち着きのある黒髪の女性は釤富さん。

「あ、私は椎名桜子。^{しいな}_{さくし} 気軽に桜子つて呼んでねー」

元気いっぱいによろしいけど少し騒がしい女性、椎名さん。決して
下の名前では呼ばない。僕の些細な抵抗だ。

「私は柿崎美砂。^{かきざき}_{みさ} ちなみに3人ともチアリー『ティング部所屬だよ』
そんな部活あるのかこの学校、いや、普通あるのか。」

「自己紹介もいいんですけど。ネギ君たち行っちゃいますよ？」
指を指しながら指摘してあげると、その後すぐに後をつけはじめた。

近衛さんとネギ君の恋を応援しようとしていたのが、いつの間にか、委員長の私利私欲を応援することになっていた。

かわいそうなことに毎回邪魔されるネギ君と近衛さん。しかし、そのたびに何かを買う羽目になつてゐるが、お金とか大丈夫なのだろうか？

いや、もしやばくなつたら僕が払うけど。

そして、最後にたどり着いたのは静かな場所。

今現在はネギ君が近衛さんに膝枕をされている。

羨ましくない…と思つていたがやはり少しだけ羨ましい。

「私がしてあげよっか？」

と、僕の眼差しを読み取つたのか、誘いを受けるが。

「丁重にお断りさせてもらいます」

と、辞退する。何が恥ずかしくて膝枕をしてもらわないといけないのでしょうか？

「ええ、いいじゃんいいじゃん。私がしたいのー」と、すこしじゃれでいる。

「もうそこのかップルは黙つてよー。」
と、椎名さんに指摘を受けたので。

「いや、カップルではなく、裕奈は僕の妹のようなもので
「かかか、カップル！？」（え、そうみえるのかな？）

という感じでこいつちをちらちらみてくる裕奈。
ちゃんと釘は刺しておく。

「冗談ですか？ 信じちゃダメですよ？」
そういうこと、すねてしまった。

その後、何か近衛さんがネギ君にキスしそうに迫る…？
などがあり、結局は皆の早とちりということで、今回の買い物はなんと明日菜さんへの誕生日プレゼントだったのだ。
ついでに、妨害するに当たって色々買っていたチアリーダー3人組もその品々を渡している。

「それでは、僕からも
と、指輪を一つ渡す。

ただの銀色の指輪。実は内側にはバツ印が書いてある。
その意味は、また別に機会に。

「あ、ありがとう」

ちやんとお祝でれる子は偉い子ですね。

そんなことをしてると隅のまつで拗ねている裕奈が居たので近寄る。

「なによ」

口を尖らせて机を向く裕奈に一つ箱を渡す。

「プレゼントですか」

「え？」

と、一瞬驚いた裕奈だが、渡した箱をまじまじと見て問う。

「でも、私今日誕生日でもないし……」

「去年の誕生日を祝つてあげていませんから」

去年は色々な都合により麻帆良から離れていた。

その時の裕奈の怒り様と言つたら、明日菜さん並みに暴れました。

「で、でも。あの後、ちやんとプレゼントも貰つたし」

「まあ、いいじゃないですか」

そう言って箱を開けるように促す。

箱に入っていたのはネックレスであった。
ぶら下がっているのは銀の十字架。
中心には青い石がはまっている。

「お守りだ」

箱から出してかけてあげる。
少し頬を朱に染める裕奈。
しかし、こちらに気づかないネギ君とその他。まるで、別の世界にいる感覚。

「あ、ありがとう」

それ以降彼女は僕に話しかけてこなかった。
しかし、その口元は微笑んでいた。

その日の夜、またしても僕はエヴァの家を訪ねていた。

そして別荘の中に移る。

そこで少しエヴァと軽い戦闘をこなす。

今日の課題、それはつまり『暴走』^{オーバードライブ}を扱うことだ。

暴走を扱うというのは少し矛盾しているは、用は暴走状態に慣れることが重要だ。

僕の変化、魔族化と呼んでいるが、は一気に膨れ上がった魔力に体がついてこれないのである。

そのためにも大量の魔力を体に与えることでその大量の魔力に体を慣らそうという訓練が開始された。

かなりの荒療治である。魔力の限界値を突き破り、無理矢理限界値を押し上げるのだ。

本来であれば、もつとゆっくりとやるもの僕は力技でやる。

魔力の供給はエヴァがしてくれる。

「じゃあ、よろしく」

椅子に座りながら、は誤りで、椅子に縛り付けられている。

「本当にやるのか？言つちやあ何だが、死ぬほど痛いぞ？」

そう前回も体の痛みを体験したが、あの時ですら無様に片膝つくほどの痛みだったのだ。

それを持続的に受けけるとなると、字の如く、死ぬほど痛い。暴れだす可能性を考えて椅子には縛り付けてある。

「ああ、やるよ」

さあ、やつてくれ

と付け足す。

エヴァが僕の腕を掴む。

そこから魔力の奔流が暴れる。

最初はゆっくりと指の方に痛みが走る。
じわじわと腕をつたつてくる　　痛い?
疑問に思つてしまつほどものだつた。

一瞬氣を緩めてしまつた、その時だ。

「耐えろよ」
エヴァが静かに言つてくる。

その直後、心臓が掴まれた　　魔力に。
全神経が痛みを感じる。頭が痛みに支配される。
何も考えられない、イタイイタイ
骨を粉々にされるような激痛を絶え間なく味わう。

「ぐつ…ああああ……」

身体が痙攣を起こす。

それでも、耐えなければいけない。
力が必要だ。力がなければ守れない。

友人に頼まれた最後の頼みだ。

きつと、ナギさんみたいに敵が多いはずだ。それと同時に味方もたくさんつくる。

その中にきっと裕奈もいるだろ?。用意に想像できる。
なら守ろ?。僕が守ろうと思つたものすべてを守ろ?。
叶わない夢だつてことは分かっている。しかし、だからこそ。

最善を死ぐなんて甘い。それは最初からできないと知っているのと同じだ。

だから、僕は誓つ。心に、魂に。

「ぐうううううう！」

椅子の肘掛を力一杯掴む。

割れるかと思うほどどの力が入る。

その状態が続くこと数時間。
エヴァの魔力が切れたらしい。

「大丈夫か、阿呆が」

心配してくれてるのは分かるが『阿呆』はどうなんだ？

「フン、こんな無茶をするのは阿呆以外いないだろ？」
そう言って椅子を見る。

真っ赤だ。

自分の血で真っ赤に染まっている椅子がそこにある。
肉が裂け始めたのは始まって一時間くらいの時だった。
それでも自分の魔力を死ぬ気で扱いなんとか自己治癒能力で塞いでいく。

また裂ける、治す、裂ける、治すの繰り返し。

「まつたく。少し横になつていろ

つて、最初から横になつてますけど。

ベッド、というより大きなソファに寝かされている状態だが、全身包帯だらけだ。

戻ってきたエヴァはなにやら指輪をはめてきた。

「これは、七転八起の指輪と昔私がふざけて作った代物だ」
その能力はただ痛みを緩和するだけらしい。

吸血鬼である自分にはまったく必要ない、と言ひ事で痛みは和らぐだろうとくれるらしい。

「ありがとう、エヴァ」

「そう、色々ありがとう。」

こんなに世話をしてくれて。

弱い僕を強くしてくれて。

そして、意識は暗転していった。

目を覚ましたとき自分の部屋に居た。
本当に不思議だ……

第21話—テートじゃない！断じて違う！—（後書き）

感想、指摘、誤字、脱字…なんでも受け付けます！

第22話—線上 on the border —(前書き)

今日から一週間弱、キャンプに行くので更新できません。すいません。

第22話—線上 on the border —

自分の部屋で瞑想すること数時間、その静寂を妨げたのは一つの電話であった。

仕事用の携帯の表示は『学園長』と点滅している。

「はい」

瞑想して張り詰めていた精神を落ち着かせるために深呼吸をしてから答える。

『おー、鈴君。どうしたんじゃ？少し元気がないようだが？』
学園長にはあの訓練のことは教えていない。

学園長は仮にも組織の長。心配事は少ないほうが多いだろう。

「いえ、今起きたばかりだから寝ぼけているだけだと」と、誤魔化すが誤魔化しかけたかどうかは微妙である。

『そーか、そか』

『で、電話の用件はなんなのでしょう？』

『つむ、実は頼みたいことがあっての』
学園長がじかじかに頼むこと…
ネギ君のことだらうか？

『ネギ君の修学旅行についてでの?』

予想は的中。そういえば、裕奈も修学旅行に行くと言っていたか。

「あ……あ、でも修学旅行には流石に行けませんよ?僕、尾行とかできませんし。見つかったら面倒ですし」

流石に京都に行つて『ああ、これもボランティアボランティア』などの言い訳は通じない。

神が許しても、裕奈が許さないだろう。

『はあ……そうじゃよな』

「あ、でも一応対策はしているので大丈夫です。本当に危険なときになれば駆け付けれます」

もう策は投じてあるし、大丈夫のはず。このために大金をはたいたのだ。

『そりかの。なら、大丈夫じゃ。電話してすまんの』

「いえいえ、別に大丈夫です。では」
そう言つて電話を切る。

第22話—線上 on the border —

ネギ君たちは京都に出発したその日、今日もまた僕はエヴァの別荘で訓練中であった。

「はあ…はあ」

膝に手を置き、前に屈む。

吐き気がする。呼吸が間々ならない。足が動きそうにない。

「休んでる暇はないぞ！」

そして飛び掛つてくるエヴァ。

魔力で強化された彼女の身体能力は凄まじい。
ただの拳が岩を碎く。一步で数メートルの距離をつめる。

「まだ…まだあー！」

体を横に逸らし、相手の腕を脇に閉める。

腕を固定したところで思いつきり蹴りつけようとするが

「甘い…！」

腕を振り上げそれと共に跳んでいく僕。

エヴァの小さい体のどこにそんな力が…魔力ですね…

地面に受身を取れずにのた打ち回る。

それを許すエヴァでもなくまた殴りかかってくる。

その光景がゆっくりと迫る。

* * * * *

一度エヴァに聞いたことがある。

弱い僕はどう戦えばいいのか？

強大な敵にどう立ち向かえばいいのか？

その問いに彼女は答えた。

フン、弱者の気持ちなど知つたことが
突き放し、そしてその後に付け足す。

見下しながらも、その田はぢちゃんと僕に向かっていた。

しかし、リン

勝たなくたつていい。
殺さなくともいい。

足掻け

諦めるな。
足を止めるな。
前に足を出せ。

泥を蹴つてでも足掻け

『弱者なりにな』

* * * * *

ああ…なら、足掻いてやろうじゃないか。
勝てないほどの相手に勝つ可能性は低い。

ならば、その可能性を高くするだけ。

どんな手段をとってでも勝て。そして生きる。

腕を振るひ。

自分の手に付いた血がエヴァの顔面に迫る。
しかし、エヴァの手によつてそれは阻まれた。

口の中が切れている。

口の中の血と唾液を集める。
少し息をして吐き出す。
霧状となつてエヴァを阻む。
それでも、止まらない。

横に転がる。無様に、滑稽に。

それでも、僕は生きている。

体に力が入らない。それでも、生きているんだ。

拳が床を碎く。

そしてすぐに二つちを向く。

「光よ…」

初級者魔法。

自分の指輪から強烈な光が放たれる。
エヴァが光を直接目に受けた。

自分も目を瞑り、詠唱をする。

「私は偏在する、数多の敵を止めるため」

この分身は通常の自分、服が汚れていない状態の自分を映し出す。
どれが本物かは一目瞭然。

それでも、使わない手はない。

全員が上着を脱ぐ。

それをエヴァに投擲。

「リン・ウォン・ラ・リオン・リリサン！来れ、虚空の光、射殺せ
！光の槍！」

光の槍をその服に向かつて投擲。

しかし、それを片手で服もろともなぎ払われる。

そこに迫る分身の一人。

そしてそのまま後ろにもう一人。

「こんなもの！」

前の一人が分身だと気づかれすぐに殺され消える。

その瞬間を狙う！

「らあ！！」

今の自分が放てる最善の拳。

吸い込まれるようにエヴァの顔に向かつていく。

音速を超えた拳が放たれ、かわされる。

そして、腹に衝撃が走る。

気づいたときには床に転がっていた。

しかし、エヴァは攻撃してこない。

「できるじやないか?」

頭を少し動かすのも億劫な気持ちを抑え、見上げる。エヴァが居た。どの頬にはかすり傷が一つ。少し血が出てる。

「まあ、これでも一撃は一撃だな」

そう言って、得意でもない治癒魔法を使ってくれる。

その中僕の意識はだんだん薄れしていく。

「お、おこ。寝るんじやないぞ」「あ、もう田も開けていられない……

このまま寝てしまおひ。やう思つてしまつた

その魔法は、とても暖かかったから……

* * * * *

連絡があつたのは、ネギ君たちが修学旅行に出て3日目のこと。

『どうやらネギ君のほうでトラブルがあつたよひじゅ』
と、学園長からの連絡だった。

なにやら、色々な妨害を受け、近衛さんが一度の誘拐に会い、一度殺されかけ、ネギ君は親書を届ける妨害を受けた。
そして立つた今、西の本山に敵襲があつたらしい。
と、いうことで増員として僕が雇われた。

その連絡にすぐ、はい、と答え移動の準備をする。
今回の移動方法は『転移』の魔法。

僕はそんなすごい魔法が使えるわけもなく、これは僕が特注で作つてもうつた転移符だ。

『バツからバツへ』

そう呪文を唱えると、僕は忽然と麻帆良から姿を消した。

* * * * *

あらわれた場所は湖の中心。

そこには光り輝く巨大な鬼がたたずんでいた。

あの転移符、バツの印を付けてあるものの半径50メートル以内に転移するものだ。

神楽坂さんがバツの印を持っていたので、彼女の半径50メートル以内に転移しているはず。

と、周りを見渡し彼女とネギ君を探す。

彼女たちが立っていたのは湖の中心に続く木でできた廊下の上。どうやら彼女は転移させられたばかりのようで、自分の運がよかつたことに感謝する。

ネギ君の対峙している敵を見る。
白髪の少年。忘れるはずがない。

アーウェルンクス

20年前の大戦のときの敵。
あの大戦の残党。

「アテアット」

指輪が指にはまる。

「我難ぎ払う、我の敵全てを」
魔法の矢がアーウェルンクスに飛来していく。

しかし、予想通りというべきか、それは当たる前に障壁に阻まれる。

虚空瞬動で廊下まで移動する。

「下がつていってください」

後ろにいる2人に忠告する。

「ここからは、君たちの立つべき場所じゃない」
そう言って、刀を一本作り出し、正眼に構える。

「まさか、こんな所で会つとはね リン・イースト」
一歩ずつ歩いてくる敵を見据える。

「僕もまさか、会つとは思つていなかつたよ フェイト・アーウエルンクス」
自分では太刀打ちできないような相手。
見なくとも分かるくらい強固な魔法障壁。

戦闘の切欠なんてなかつた。
僕の本能が、なけなしの経験が警告を促す。

来る！！

「我の盾、我を害するものすべてを弾く」
突然、響く激突音。

フェイトの拳が結界に当たつた音だが、拳が出せるような音では到底ない。

「やつだつたね、君の結界は固いんだつたね
そつ言つて何度も殴つてくる。
どうせ、分かつている。

僕の結界は中途半端に固い。弾くことはできる、でもいづれは壊されてしまつ。

その結果は変わらない。むしろ、フェイントの攻撃を防いだことは褒めて欲しいものだ。

ピシッ…

結界にひびが入る。

僕の後ろにこはネギ君と神楽坂さんがいる。
戦闘慣れしていない女子生徒。
魔法で石化が進んでいるネギ君。

絶対にここを通すわけにはいかない。

しないで後悔よりして後悔。
泥水を啜ってでも生きる。
少ない可能性にでも賭ける。

腰につるしていた緋陰の柄を握る。

パリン

結界が割れる音がする。

それと合わせて緋陰を抜き放つ。

体の激痛も訓練のおかげがあまり気にならなくなつた。
体が燃える感覚がする、痛くはない。

魔力が暴れる中での魔力操作になれたからか、難なく瞬動が行えた。

抜き放たれた刀と同時に瞬動で全身して突進する。
振り上げのモーションで敵の障壁に阻まれ止る。

「なんだい？ その姿は？」

アーウェルンクスは余裕の表情で聞いてくる。

「教えるか」

全身に力を入れる。

魔力を制御しようとする。

その瞬間体に今までにない激痛が走る。
しかし、それは力を緩ませるどころか強ませていた。

訳が分からぬ、しかし、その思考に反して体は勝手に動いていた。

「へりああ！――！」

障壁に阻まれていたはずの緋陰が障壁に食い込み始める。

「なつ」

それに驚愕するフロイト。
しかし、とき既に遅し。

「はあ！――」

その一閃は凄まじい速度で振りぬかれた。

第22話—線上 on the border —(後書き)

感想、指摘、誤字、脱字！なんでも受け付けます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7323n/>

平凡と理不尽が刻む物語

2011年9月29日22時43分発行